女子文壇

第壹卷 第七號

口繪
三宅克己水彩画 夕立雲
山中古洞彩色画 朝の散歩
都下有名各女學校卒業生大判寫眞



中村不折画
吉田晩稼題字

明治三十八年七月一日發行（毎月一回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

東京 女子文壇社 發兌
（電話本局六〇七番）

注意＝此目次を熟讀順次内容閲覽をこふ

第壹巻 女子文壇 第七號

目次

▲本號の二十四頁に▲九月一日發行第九號より實行する特別賞與法を發表せり、是は從來の懸賞法の外に傑作文に對し奬勵の爲め設けたるもの也就て見よ

發起贊成員

（イロハ順次第不同）

文學博士　井上哲次郎君
哲學館大學長文學博士　井上圓了君
淑德女學校主幹　井原法從君
少年世界記者　巖谷小波君
文藝倶樂部記者　石橋思案君
石井研堂君
醫學士　石原喜久太郎君
淑德女學校教授　石塚龍學君
二六新聞記者　江見水蔭君
理學士　飯塚啓君
東京府女子師範學校教諭　岩本ふく子君
甲府商業學校教授　池田朝長君
在廣島高等師範學校　今村武男君
淑德女學校教授　一盛眷君
帝國大學、高等師範、日本女子大學教授文學博士　萩野由之君
慶應義塾教授　林毅陸君
太陽記者　長谷川天渓君
女子教育奬勵會東京女學館幹事　西田敬止君
淑德女學校教授　西弋君
島根縣女子師範學校教諭　錦織竹香君
衆議院速記者　新井田次郎君
淑德女學校教授　丹羽正長君
太陽記者　鳥谷部春汀君
東儀鐵笛君
淑德女學校教授　知野偉文君
獨逸學協會早稲田大學講師文學士　長連恒君
淑德女學校教授　千葉秀胤君
東京女子高等師範學校教授文學士　尾上柴舟君
文學士　大町桂月君
獨逸學協會學校長　大村仁太郎君
大和田建樹君
大塚楠緒子君
仙臺第一中學校教諭　大宮宗司君
東京府女子師範學校教諭　大塚治六君
外國語學校教授帝國大學講師文學士　岡田正美君

（附錄の二）

淑德女學校教授　太田美濃君
東京府女子師範學校教諭　岡田ふみ子君
女子圖案會理事　岡不崩君
東洋女藝學校講師　岡みち子君
醫學士　岡本武次君
博文館發行戰爭實記記者　押川春浪君
新潟縣女子師範學校長　川面松衛君
市立下關商業學校教諭　川崎又次郎君
萬朝報記者　茅原華山君
信濃每日新聞記者　川崎默堂君
女子英學塾教師　河井道子君
河井醉茗君
河合英忠君
醫學士　櫻田龜一郎君
福岡縣東筑中學校長　金澤來藏君
淑德女學校教授　加藤玄智君
鏑木清方君
女學世界記者　勝間恒彥君
春日廓悟君
吉田晩稼君
武内桂舟君
文學士　武島羽衣君
法學士　武田千代三郎君
文藝倶樂部記者　武田櫻桃君
攻玉社教師　竹貫登代多君
少年世界記者　竹貫直人君
日本女學校教授　高平德文君
女子美術學校教授　谷紀三郎君
東京心性學館主　高橋邦三君
大阪新報社總務部長　高橋雄峯君
萬朝報記者　高橋鬼川君
山邊太一君
醫學士　山村光顯君
太陽記者　田山花袋君
市立甲府商業學校長　田崎要君

名譽賛成員

（イロハ順次第不同）

中學世界記者　鹽野止水君
博文館編輯局主幹　坪谷善四郎君
女子英學塾主　津田梅子君
早稻田大學講師東京中學校教師　土谷詮教君
文學士　中内蝶二君
醫學博士　中濱東一郎君
中村不折君
報知新聞記者　中村千代松君
中里峻峰君
三井同族會書記長　成瀬隆藏君
日本女子大學校長　成瀬仁藏君
東京府女子師範學校教諭　永田とめ子君
淑徳女學校教授　永地待枝君
學習院教授　南日恒太郎君
農科大學講師文學士　村上辰午郎君
村岡典嗣君
博文館出版部長　内山正如君
淑徳女學校教授　野村[illegible]惠君
淑徳女學校長　黒田眞洞君
文學士　久保天隨君
熊本私立尚絅高等女學校教諭　栗田正治君
文學士　栗林已巳藏君
法學士　熊倉操君
學習院教授　山口弘一君
日本女學校教授　山根勇藏君
博文館副支配人　山田靜三君
高等師範學校教授　山田萬太郎君
山中古洞君
在農科大學　矢田鶴之助君
東京府共立女學校監督 子爵　松井康義君
萬朝報記者　松井柏軒君
女學世界記者　松原廿三階堂君
前田曙山君
福井學圃君
東京女學館教授　國分操子君
太陽記者　國府犀東君

東京府女子師範學校教諭　小寺あや子君
加持世界記者　小林雨峰君
文學士　幸田成友君
農學士　近藤仙吉郎君
文學博士　姉崎正治君
東京女子高等師範學校教授　東基吉君
竹柏園主幹　佐々木信綱君
東京女子高等師範學校教授　佐藤球君
醫學士　佐々倉永三郎君
獨逸學協會學校講師　佐藤吉次君
横濱商業學校教諭　坂本盛一君
市立下關商業學校長　齋藤軍八郎君
學習院教授　北里閑君
太陽記者　岸上質軒君
少年世界記者　木村小舟君
三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子君
同校教諭文學士　三輪田元道君
文學博士　三宅雪嶺君
日本女子大學校教授　三宅花圃君
三宅克己君
都新聞記者　宮川鐵次郎君
博文館出版部　宮川大壽君
日本女子大學校教授文學士　鹽井雨江君
獨逸學協會學校講師文學士　芝葛盛君
獨逸學協會學校講師文學士　志田義秀君
愛國女學校講師京華中學校教諭　鹿田熊八君
東京府女子師範學校教授　神通せき子君
從二位伯爵　東久世通禧君
廣津柳浪君
獨逸學協會學校講師　守屋荒美雄君
[illegible]居直臣君
[illegible]山衣洲君
[illegible]中鹿雀志君
學習院教授　[illegible]田毅雄君
慶應義塾教授　[illegible]綠陸君

（以上七號〆切迄に賛成並寄稿の快諾を得たる芳名増訂）

宮中御歌所寄人　中邨秋香先生新作
華族女學校講師　小野鵞堂先生淨書

新編手紙

（男子用）

木版半紙摺
無類の美本
男女各一冊
定價四拾錢
郵税四錢

女子消息 文の手ほどき

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例

（男子用）

木版半紙摺
精巧優美
男女各一冊
定價六拾錢
郵税六錢

新編女子書簡文例

本書の文例は現代の文壇中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に阿らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の好典範として上乘の書ない、先生特に上欄に類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきものなり

中邨秋香先生著　增訂五版

文鑑 千草の錦

此書は中邨秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄録せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論説、消息、物語、詩歌等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ、作習の模範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざる最良の文鑑なり、國文學研究者は是非一本を座右に供すべき也

菊判和裝
定價五拾五錢
郵税拾錢

新編書簡文法式

書簡文の法式男女に別ちて大成せるものは、古來未だ嘗て有らず、蓋し書簡に法式のなからざるべからざるは、尚人に禮儀の鈌くべからざるが如く、苟も人に禮儀なく、書簡に法式なからんか、其人如何に貴しと雖、又いかに富めりと雖、一日も交際場裡に立つこと能はざるべし、御歌所寄人中邨秋香先生深くこゝに惑せられ、即ち男女に就きて各書簡文法式の撰著ありて之を世に公にせらる

（男子用）

總クロース
金文字入
定價五拾錢
郵税六錢

新編女子書簡文法式

◎女子は男子と自ら差別ありて特に散らし文は小野鵞堂先生の書に係るものを挿入せり

此法式は元來封建制度の代に於ける尊卑上下に就きて種々の段階を分つが如き煩々避け、今日の現状に依り斬新を對照して以て時の宜に從ひ、適當の式を設けられしものなり、故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論、苟も筆を書簡に把る者は瞬時も座右を放つべからざる要書なり

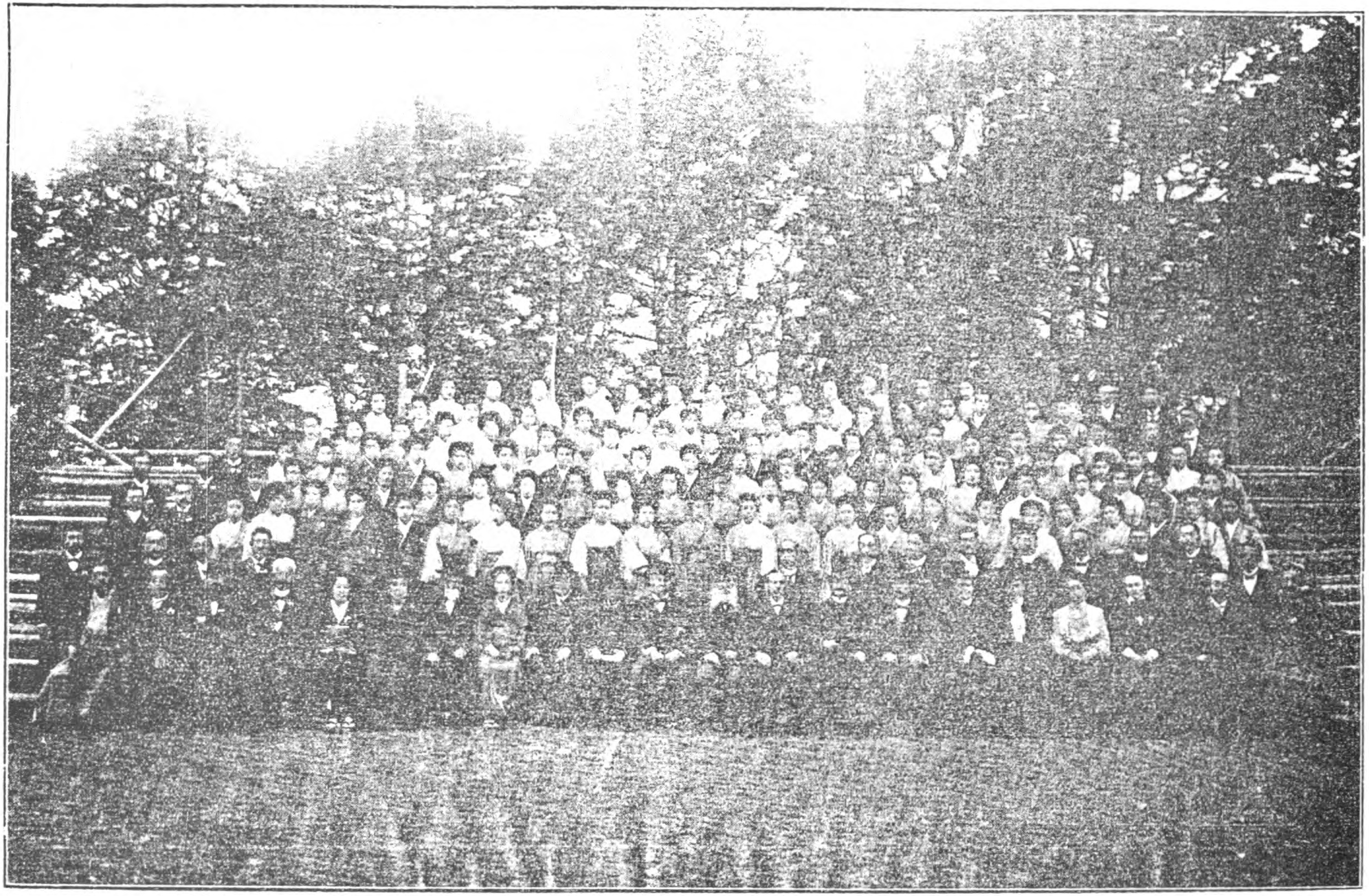
西洋綴美本
定價六拾錢
郵税六錢

發兌元　東京市日本橋區箔屋町十六番地　前川文榮閣



（十七頁の家庭欄記事參照）

アルマ、タデマ夫人の筆



（所在　小石川區高田老松町）

日本女子大學校卒業生並職員

（明治三十八年）



（所在　神田一ッ橋通リ町）

共立女子職業學校卒業生並職員　（明治三十八年）

（所在　神田區錦町二丁目）



女子商業學校第二回卒業生並職員　（明治三十八年）

女學生の作詩模範とすべき詩集出づ

河井醉茗先生作

長原止水先生表紙
三宅克巳先生口繪

詩集 塔影

クロース本綴
製本極めて美
上等用紙印刷
定價四十五錢
郵税金六錢

新躰詩を愛誦するもの昨今、日に多きを加ふれども、或は熱烈なる戀愛をうたひ或は平板なる叙事に終り、一は少女の胸を刺戟すること餘りに深く、一は詩として價値の乏しきが故に、女性の愛誦するに堪ゆる詩集の乏しきを嘆きしが、此處に醉茗先生の「塔影」出でゝ其欠を補へり、塔影の詩は平和なり、優美なり、清楚なり、高雅なり、淡泊なり、明瞭なり、今の詩を讀む者、往々にして新躰詩の難解を云ふ、而かも塔影に至りては、晶々として八面玲瓏、初めて詩に接するものと雖も、能く其趣致感情を味ひ得、蓋し近時、稀に見る好詩集にして、特に之を新しき詩想を窺はんとする諸孃の机邊にすゝむ

塔影は家庭に於て愛誦せらるべき唯一の詩集なり

文淵堂近刊書目

- 小説 琵琶歌（桃源三版）税八十六錢 ○繪葉書 源氏物語 五十四枚箱入半古（近刊）
- 小説 妙な男（溜芳再版）税八十六錢 ○繪葉書 十貳文豪（新海竹太郎作）シルレゲーテ各十錢づゝ
- 小説 間一髮（南翠近刊）税八十七錢 ○繪ハガキ 思ひで艸（和田藤島小林）六枚一組精巧木版金五十錢
- 新詩 紫花環（天弦近刊）税八十七錢 ○新體詩繪葉書 そのおもかげ 藤村和田英作（廿五錢）
- 小説 密航婦（春雨近刊）税八十七錢 ○新體詩繪葉書 物おもひ 泣菫満谷國四郎合作 六枚一組（廿五錢）
- 詩文集 白玉姫（泣菫新刊）税八十八錢 ○征欧繪葉書 小詩國 蕉園梶田半古合作六枚一組 廿五錢（以下續出）
- 小林萬吾 風景畫帖（精巧水彩）六十錢税四錢 ○繪葉書 植物園 秋亭七月寫生の植物園十八枚一組寫生用（四十錢）
- 病間錄（綱島梁川）金一圓税十錢 ○繪葉書 花の精 岡吉枕の水彩美人畫の精巧木版六枚一組（廿五錢）

發兌元 東京神田西今川町 金尾文淵堂

發賣元 東京 東京堂 上田屋 文榮閣 東海堂
大阪 杉本 九淵 菊竹 其他全國各書林

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

登錄商標



五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
錫蓋附乳白硝子器入
ウワイオレツト煉製
壽美禮おしろい

壽美禮おしろい



ねり製
定價 大壜 二十錢 小壜 十二錢



すみれ水おしろい
ヴワイオレット水製
定價 大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢

すみれ白粉は
菫おしろいは
壽美禮白粉は

歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て調製しあるを以て總てを艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に望みて衛生上良好の逸品なり高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

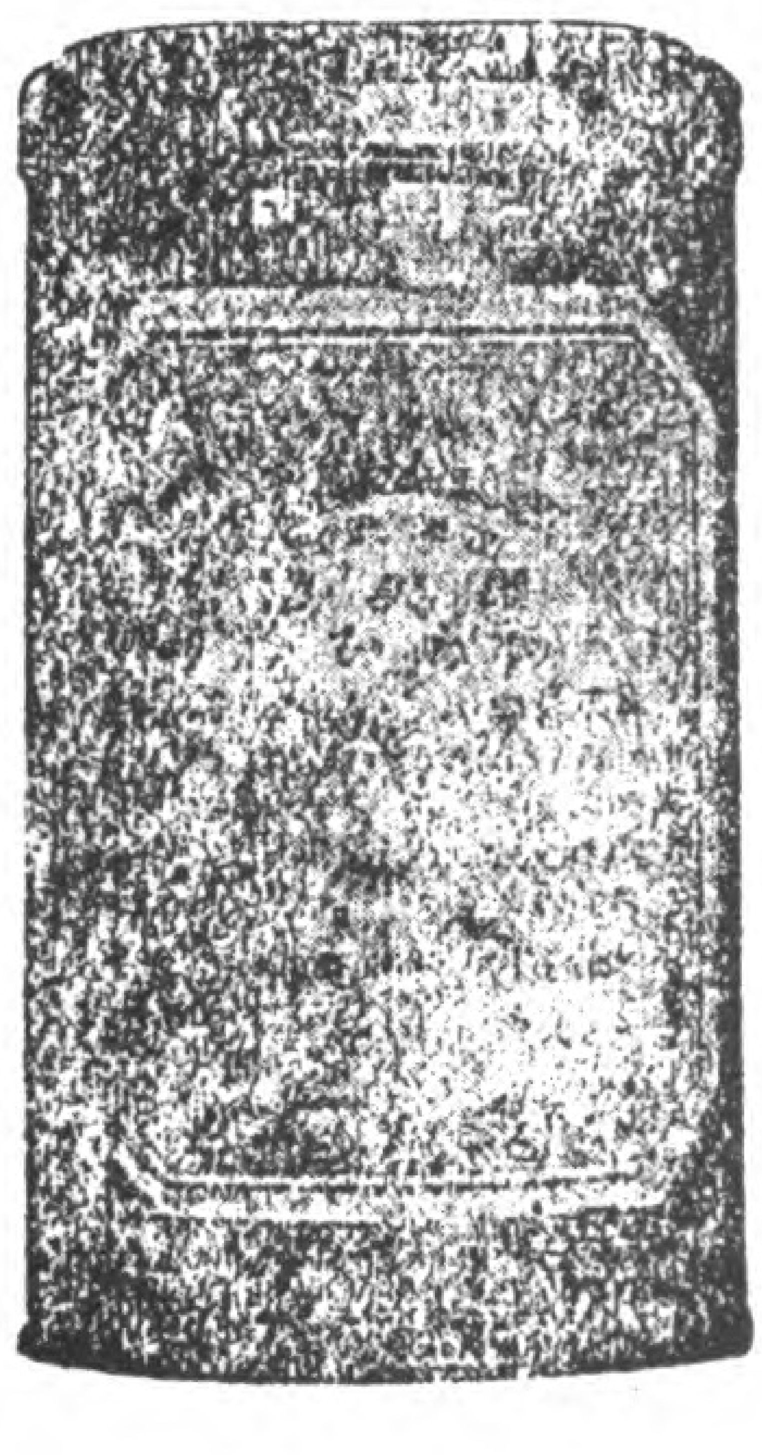
壽美禮あらひ粉

◎弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美しくなす
◎常に髪洗ひに用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹綿等に用て能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり
◎使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入 三錢
鑵詰 六錢五厘
袋 壹錢

登錄商標
西洋色美くなるあらひ粉
SUMIRI
WASHTNGIOWDER

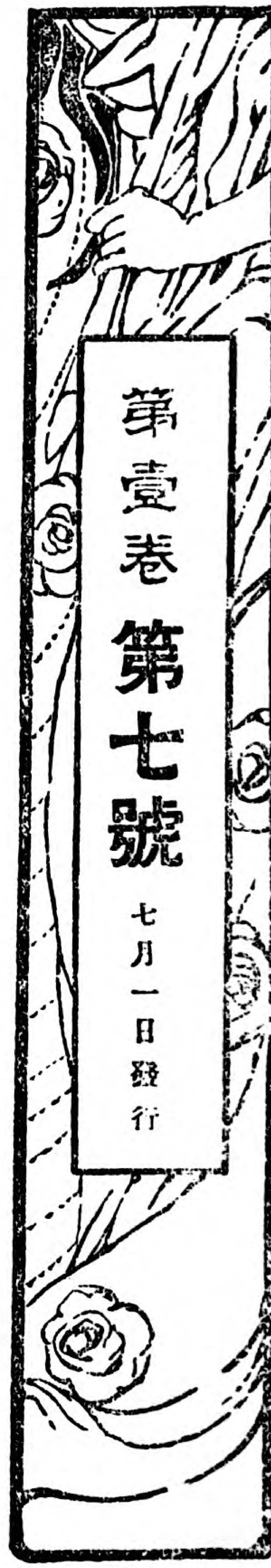
壽美禮あらひ粉



製造本舗
東京市兩國
元町兩國橋際
伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所ハ全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ





若き女子と文藝の自由

女子は男子に比較して自由でない、其家庭に於ても、其社會に於ても、羈絆され制裁さるゝこと、男子より甚しく且深い。然るに元來文藝の事たるや獨立自由、我歌はんと欲する處は鬼神も之を止める事は出來ない、我言はんと欲する處は王侯も之を阻む事はならぬ、生れながら想像力ある者は、禽の大空に翔るが如く、藝術の花にあこがれて、自由自在に思ふ空を翔ることが出來る。況して火の如き感情、花の如き思想を持つ若き女子が、文藝の自由を慕ふこと、夏の旅人が森の泉を慕ふが如きも無理はない。若き時は凡てに自由を好む時代、輝く希望を文章に寄せ、鬱結せる感情を詩歌に慰む。諸孃の一人が、假に乾燥せる家庭に成長しとするも、文藝の濕ひに浴することは正に自由である、只夫は心掛の如何に由る。來れ、文藝の泉に。若き女子に詩歌の思想なきは、輪廓正しき顏の、愛嬌を缺くが如し、所詮文藝は一種の表情なり、直線許りては美を成さぬ、女子は宜しく蔓の如くなれ、其形躰に於ても、其思想に於ても。斯くて一度文藝の自由を知る以上は、諸孃の信仰や高く、思想や淸く、品性は練られ、感情は養はれ、若き女子として純潔無垢、然かも愛の權化となる事が出來るであらう。

名家文壇

作家の階級

文學士 岡田正美

茲に作家といふのは、上は大歌人、大文章家、大小説家より、下は小學生徒、小僧、丁稚に至るまで、苟も文字を連ねて自己の思想を發表しようとする者をば、一切ひきくるめて呼ぶのである。であるから、上手下手を問はず、うまいまづいに係はらず、歌よみは作家である。新體詩人も作家である、發句師も作家である戯曲作者も作家である、雜誌の論文書きも作家である、新聞の雜報書きも作家である、日々の事件を日記帳に書付くる細君も課題の作文を一生懸命に綴る學校生徒も、皆作家であるのである。

作家の種類は此の如く多く、作家の範圍は此の如く廣いのであるから、從つて、その總數は非常なもので、現在に於て何十萬人あるか、何百萬人あるか、わからぬ位である。

處で、諸君、此何百萬人かの作家は皆同等のものであるか、といふに、勿論、さうでない。極めて上手な人もある、又、極めて下手なものもあつて、精細に調べたならば、その階級はまた何萬級になるか、何十萬級になるか、わからぬ位である。この何萬級、何十萬級かの階級を、予は大別して五ッとする。

まづ、初級を第五級とする。此階級の者はまだ考も調はず、言葉遣も十分でなく、又、作法も知らず、作物の巧拙、作物の美醜等を見別ける力もないので、いきなり、思つた事を思つたまゝに書いて、夫れて、字が間違つて居らうとも、言葉遣がわるからうとも、全體が所謂頭でっかの尻ちっく、即ち、龍頭蛇尾であらうとも、そんな事には一切御構ひなしで、自分では立派な、餘程な物が書けたと思つて居る。尤も、時による

と、實際いふにいはれぬ面白味のある立派な物が出來ることもあるが、しかし、之は千に一つか、萬に一つて、夫も作者自身が意識して作つたのでないのだから之は除外例にしなければならぬ。

さて、この階級の者が、も少し考が出來、言葉遣といふことを知り、又、やゝ作法をも理解するやうになると、今までの自分の作つた物は凡て平凡な言葉の行列で、然かも夫がたゞだらく〵と無暗につゞいて居るばかりで、全體にひきしまつたところもなく、作物としては殆んど見るべき價値がない、といふことがわかつて來る。て、作物として見らるゝだけにするには、言葉も立派な言葉を遣はねばならぬ、抑揚も波瀾もなければならぬ、首尾の照應もなければならぬ、といふ考が起つて來る。そこで、熟語麗句の集めてある本や、何々文例、何々軌範、などゝいふやうな本をいくつも買ひあつめて來て、まづ、體裁を何々の作例に似せ、次に言葉をば彼より一句、是より二句と取りあつめて、之を骨を折つて綴り合せて、作り上げて、さて、一誦し、二誦して、嗚呼我ながらうまく出來たナアと思ふ。……ところが、夫がまだ眼の若いので。眼の利いた人が見ると、新古絹綿氈紗の綴ぎ合せて、まるで、簔虫の着物の樣。中學校高等女學校等の生徒、普通の新聞雜誌の記者、何々連の宗匠、何々會の先生等、特に諸雜誌に盛に投稿する連中は、大抵此階級に屬する。此を第四級とする。

作法を會得し、言ひ廻しを知り、又、やゝ作の目的を知つて來ると、その組立に於て、その言ひ廻しに於て、又、その言葉遣に於て、どうも思ふやうに行かぬことが多くなつて來る。アゝデモアルマイ、カウデモアルマイと千思萬考して、尙、或は徒らに紙面を塗抹したり、或は徒らに煩悶したりするのみで、どうも思はしいものが出來ぬ。何だか以前よりも下手になつたやうな氣がするやうになる。此時代を第三級とする。いくら苦しんでも思はしいものが出來ないやうになつたのを、階級の進んだのとするのは、一寸思ふと、餘程不思議な、不合理なことの樣であるが、アレモイケナイ、

コレモイケナイ、ア、デモアルマイ、カウデモアルマイといふ考の起る樣になつたのは、是が、即ち、自分の思想が進んだので、又、考がこまかい處まで屆く樣になつた證據なのである。但し、無形の抑揚、無形の波瀾、無形の照應、無形の結尾、無形の潤色、無形の調勢、等、凡て無形の要素が具はつたのみなので、之を實體に現はす、作物の上に實現させるのに當りて、その最も適當なるものを採り、つとめて不適當なものを除くについて、アレカ、コレカ、ア、デモアルマイ、カウデモアルマイ、と、いろ〳〵に苦心もし、煩悶もする、しかも、なほ、その無形の、理想の、法則、抑揚、波瀾、照應、潤色、調勢、等に適應する實體が得られない、といふのであるのである。であるから、以前に較ぶれば、確に一階進歩したのである。

此階級に於て、即ち、自己の實際の腕前の、自己の理想に及ばない時代に於ては、屈せず撓まず、一生懸命につとめて、此苦境を切り拔けるのが肝要である。小野道風は、ある雨上りの朝、庭の池の邊で、柳の枝に飛び上らうとする蛙の、とびてはおちとびてはおちして、遂にとび上つたのを見て、感奮して、更に勇氣を鼓してつとめて、遂に三蹟の一人とまでなつたといふことであるが、恐らくは、道風は、まだ、その頃は、此第三級の時代にあつたのであらう。道風は感奮して不屈不撓の勇氣を出して勉強したに依りて、遂にあの通りいらくなつたのである。この不屈不撓の精神を以て勉強するといふことが、特に此時代の人に肝要なのである。所が、氣の弱い人は、此苦境に入ると忽ちに、コレハ到底もだめだ、自分は元來此道の天才ではないのだらうから、といふ樣なことを考へ出して、遂に、中途で挫折してしまふ。こんなことでは何事も出來るものではない。無論、誰も彼も天才であるといふことは出來ないが、しかし、天才でなければ何も出來ぬといふこともなからう。「業は勤むるに精しく、樂しむに荒む」といふこともあるから、一生懸命につとめさへすれば、誰でもきつと上達するに違ひないのである。この苦境を切拔けたものは即ち第二級の人である。細

立を考ふれば首尾釣合のよき立派なものが容易に出來上り、筆を取れば、佳麗なもの、流暢なもの、豪壯なもの、溫雅なもの、意のまゝにあらはれ來りて、立所に躰裁の整然とした、辭句の巧妙なものが出來上る。此階級にある人こそは正に、歌に於ては歌人、俳諧に於ては宗匠、文章に於ては文章家、小說に於ては小說家、戯曲に於ては作者、新聞雜誌に於ては記者、といふべきである。

人は誰でも勉强次第で此第二級までは進むことが出來る。更に一級進んで、第一級の作家になることは、或は天才でなくては到底なられぬかも知れぬ、少くとも非常なる勉强と餘程の年効とを積まなければなられぬのである。既に作物の目的もよくわかり、言葉遣、言ひ廻しも凡て思のまゝになり、格、法式といふものも身に具はつて來ると、心なく連ねたる一句一節も、盡く法に叶ひ格に合し、おのづから走りたる筆のあとも盡く金玉の名篇をなす樣になる、此の如き人々は、確に大歌人、大宗匠、大文章家、大小說家、大戯曲家、大文豪などともいふべく、又、それ〳〵の道の聖などともいふべきで、之が即ち第一級の人、正眞正銘の大作家であるのである。

予の五階級といふはまづざつと右の如くである。人の進步は人に依りて、又、勤勉の度に依りて、種々樣々ではあるが、まず大概の人はこの順序を以て進むのである。自分は本來此道には天才であるから、此の如き階級には依らずして、一足飛びに第二級に入つて居る、などゝはゆめ〳〵思つてはならぬ。もしさやうなことを信ずる者があつたら、その者はなほ第五級を脫し得ぬ者と見て差支なからう。

現今大家といはるゝ作家の内で、第一級の人は何人あるであらうか。誠に覺束ない。第二級の人は何人あるであらうか、之は少くはあるまいが、しかし、又、決して多くもあるまい。所謂大家の大多數は、やはり第三級であらう。苦作、苦吟して、辛うじて先生、宗匠、大家の位置を維持して居るのであらう……。予の如きは作家として數へられても居らぬし、又、作家にな

る氣もないから、此階級には與らぬ。然し……これても、時あつては作家たらざるを得ないこともあるから、……その場合に於ける予は……サヤウ……やはり、この第三級に位する、……第三級もよほど下の方で、片足は未だ第四級を脱せぬ位の處に位するのである……諸君。諸君は何級位の處に位せらるゝか。尾上君、鹽井君、佐々本君、廣津君、巖谷君等に判定してもらへば直ちにわかるが、夫にも及ぶまい。諸君自から右の尺度で計つて見られたら、各自の等級は忽ちにわかるであらう。

わかつたならば、諸君は最早何も疑ふに及ばぬ、何も迷ふに及ばぬ。たゞ不屈不撓の精神を以て、どこまでもつとめはげんで、目の前にある、否、爪先にある階級を一つ〳〵昇りさへすればよいのである。而して、之は、甚しき不具者でない以上は誰にても出來ることであるのである。諸君よ。勤め給へ、勤め給へ。

右は詩歌文章小說戲曲に限らず、凡ての技術に通じて誤らぬことゝ思ふ。書法に於てもさうである。繪畫に於てもさうである。活花、造花、編物、裁縫等の道に於ても然うである。唱歌、音樂、作法、舞踏に於てもさうである。たゞ、予の特に切に感ずるのは、やはり文學上の作物に於てゞあるのである。

（明治三十八年五月十三日）

選評餘談（一）

文學士　鹽井雨江　談話

門生　錐　記

◎選評をはじめて、先づ驚いたのは、剽窃文の多い事である。これは、どんな心持ちでするのであるか、其の作者、否、剽窃者の意を了解するに苦しむのである。他人の所有物を盜むのは、破廉耻漢である、罪人である事は、誰れも知つて居るであらう。文章も同じ事である。例へ法律の制裁はなくとも。

元來、文章（實用の文を除く）の目的は、自分の言ふ所を、人をして感動せしむるにあるので、文章は即ち一の技藝である。すべて、一の技術家となり、一美術品の秀でたるものを製作するには、純潔な高尚な心と熱心な忠實な心とを以て、慘憺たる苦心をなすにあら

ては、決して望みない事である。文章も其の通りである。然るに他人の文を剽窃して、斯かる道徳上の罪を犯して耻ぢざるは、畢竟、二つより眼の無き選者の眼をくらまして、一時の虚名小利を得やうとする、最も卑劣な精神のあるからであらう。さる卑劣なる精神の徒は、到底文章家となることは出來ない斗りでなく、斯道の進歩を妨る恐るべき蠹蟲である。選者は、此の誌友諸子と共に、是非に一日も早く、か丶る徒の、文壇より驅除せられんとを望む者なり。

尚ほか丶る中には、一度他の紙上にて懸賞を得たものを、更に名をかへて、再びここに出だす人もあるであらう。これも卑屈な人であるのは云ふ迄もないが、是れ等は實に小成に安んずるの徒、ますます工風し推敲して、層一層發達進歩したいとの熱心のない怠惰者である。　到底文章家たる事は出來ぬ。

◎投書中、往々用紙や書躰に不注意であつて、讀みにくい物が多い。最も甚だしいのは、紙の切れ端しに、書躰見苦しく認めたのさへある。素より是等の文の中に、秀抜なのがある筈は無いのであるが、文章の目的を達する點から見ても、誠に惜しむべき缺點と云はねばならぬ。己れ獨り樂しむにはさしつかへ無いのであるが、かくては、他人に見せて、到底面白く讀ましむる事は出來ない。併し、文章は思想が基礎であるから、思想が面白くて、其れを現はす詞が美しいならば、善いと云ふ樣なものではあるが、斯かる點に不注意てある人の思想は、必ず亂れて、詞も美しく無いものである。今卑近な一例を擧げて見るに。

商店の陳列品にした所が、どんなに品質が美しく、且つ必要な品であつても、汚穢極まる店の中に、而かも不規律に陳列してあつたら、恐らく買ひ手は一人もあるまい。そうじて、斯かる汚れた店に、不規律に陳列してある品に、上等なものは、先づ無いと云てもよい。

尚ほ又投書家の德義の上から云うても、決して面白いことではないと思ふ。何故かと問ふ迄も無いが、山の樣な投書を、一々選評しなければならない、其の勞力を少しでも減ぜんとするのは、選評者に對する德義では無からうか。これも一つの思ひやりと言ふものではなからうか。思ひやりの無い人では、決して人を感動せしむる文章は望むべからず。かう言うたとて、選者が得手勝手の議論ではないと思ふ。

◎投書の中には、思想のまとまりの惡い文章が實に多い。其の源因は種々であらうが、歸するところ、左の

三つの理由に依るのである。

第一　思想、詞藻、修辭法の貧しい事

思想とは、其の文の中に言はんとする事柄である。詞藻とは思想を發表する吾人の聲である。而して、此の一篇の想をなすには、自ら法がなければならない。三者共に文章を成すの要素である。されど、心の無い所には、聲はなく、詞も無い。形の無い所には影はない。種子の無い所に草木は生えない。想は其の心、其の形、其の種子にして、詞藻は其の聲、其の影、其の草木の如きものである。

想は文章の本であつて、詞は其の末でなければならない。而して、法は此の想と詞との爲めに存するものであつて、二者あつて始めて、法ははたらく事の出來るものであるから、二者の下に置かねばならない。されど、法があつてこそ、思想も詞藻も、其の力を現すことが出來るのであるから、今二者を種子と草木に例へたならば、法は雨露とも云ふべきものである、雨露の助けがなくては、草木の成長しないのと同じ道理で、法がなくては、文章は成り立たないのである。畢竟、三者とも、其の本末はあるけれど、其の輕重は論すべきでない。文章に志すものは、先づ此の三大要素を養ひ貯へなければならない。さるに、此の想に乏しく、詞に貧しく、法に暗くて、强ひて作文せんとするのであるから、まとまりのつかないものが多く出來るのである。今其の三者の修養法を略述して見やう。

（一）熱心でなければならない

何事をするにも、熱心の必要でないものはないが、作文の修養には、殊に必要である。日夜我が心を此の文章の道に熱狂せしめて、朝夕始終、我が心をこゝに離れしめない丈けの熱心があつたら、名文家となる、必ずしも難事でない。熱心は先づ其の道の奥に至るの始である。

（二）博く觀察せねばならない

博く觀察することは自然界、人事界、心情界の種々の事柄を多く觀察することである。即ち、大は日月の運行より、小は葉末を渡る微風に至る迄、ことごとく觀察する時は、思想の材料を豊富ならしめ、從つて、面白い思想、詞を得るの本となるのである。

吾人には想像力と云ふ靈妙なものがあるけれど、全く見も聞きもしないものは、何も言ふ事は出來ない。多く物を見聞しなければ、智識觀念が狹く、從つて想像

力もにぶく、多くの事柄を言ふ事は出來ない。まして面白い事や詞を、いかで。

（三）多く讀書せねばならない

多く讀書すべしとは、讀んで字の如くであるが、只其の讀書の方法に就いて、一言する必要がある。書を讀むには、勞を少なくして、効の多い樣に心掛けねばならない。であるから、古來の詩でも文章でも、斯道に高く聞えたものを擇んで、且つ忠實に我が心を入れて讀まなければならない。即ち、此の想は如何なる事を云はんとしたのであるか。如何なる法を以てこれを組みたてたるか。如何なる言葉を以て現はしたるか。如何なる所は如何なる言葉を以て、現はしたるか。如何なる所は如何なる法によりて、如何なる詞に出でたるか等の點に、深く細かに心を入れて讀まなければならないのである。修辭の修養は、殊に此の讀み方にあるのである。今一つ此の詞と法との修養について、殊に注意して置きたいと思ふのは、詩歌を多く讀むべしと云ふ事である。詩歌はもと激昂した感情の聲であつて、其の聲調を尊ぶものであるから、自然、修辭上の技に富んで居るからである。

○讀書は、是非に選ばなければならない。選んで、これに忠實でなければならない。而して、これを暗誦する迄に、朝夕愛讀するがよい。しかすれば、其の想、其の詞、其の法は、全く我が心の中のものとなつて、常に我れを導き、筆をとれば立ちどころに文章が出來る樣になるのである。

第二　命題に不注意なる事

○命題とは或は主想と言つてもよい。思想中の主となるもので、其の文章の中に述べた事柄を總括したものである。即ち、一つの文章の意を煎じつめたものである。一篇の文には、必ず先づ此の主想があつて、これを敷衍して、一篇の文を成すのである。

されば、いかなる文章を作るにも、先づ自分の心に、明らかに此の主想を定めて置かねばならない。而していかに多く是れを敷衍して、いかに長く並べて行つても、此の主想をどこ迄も忘れてはならない。これを敷衍するのは、徒らにこれを長く言はん爲めではない。此の主想を明らかに強く面白く發表して、讀者の心を動かす爲めである。例へば、鴨の長明の方丈記一篇の主想は、「人世を感じ來つて見れば、有爲轉遷の誠に常なく頼み難くて、身を置くべき所でない。こゝに大いに

悟つて、山中に閑居し、遠く煩惱の執着を斷つて、只浮世の外の自然を友として、無心の境に寂滅を樂しをとする」と云ふ事である。此の主想を明らかに强く而しかも美しく發表する爲めに、彼れは先づ「行く川の流水は絕えずして、しかも本の水にあらず。淀みに浮ぶ水泡は、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまる事なし」と例へて、其の筆を起して、世の人、世の住家轉變限りなく、人生の賴む事の出來ないことを說いて、遂ひに「朝顏の花の露に異ならず」と斷言した。而して、此の有爲轉變無常の世の中を、一層明らかに强く示さうと思つて、大いに敷衍して、安元の大火、治承の旋風、同じく遷都養和の飢饉、元曆の大地震の悲慘なる景色を列記したのである。さて、こゝに大いに悟つて、「五十の春を迎へて家を出で世を反けり」と語つて、主想の前半は、これで明らかに强く美しく發表し得たのである。これから、閑寂無心の境に寂滅を樂しむと云ふ後半の主想を發表せうとするのである。そこで、先づ、自分の方丈の住居の有樣を語り、次ぎに其の閑居の樂しさを語らうとして、大いに敷衍して、四季の風景を畫き、朝夕の遊樂を叙し、更にまた、我が閑居の高尙である事を示さうとして、世の人の低いのと比較し、遂に「大かた世を遁れ身を捨てしより、恨みもなく、恐れもなし。命は天運にまかせて、をしまず厭はず。身をば浮雲になずらへて、たのまず未だしとせず。一期の樂しみは、轉寢の枕の上にきはまり、生涯の望は、をりをりの美景に殘れり」と云つて、我が樂しい自然の境遇を語りつくしたのである。而して、こゝに、我が主義の誤りでないのを示さうと思うて「それ三界は只だ心一つなり。心若し安からずば牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望みなし」と云ふ一段を添へて、全く遺憾なく、後半の主想を明らかに强く美しく發表しつくしたのである。かくて、最後に「かゝる閑寂に執着するが如き事を言ふも、執心なかれとのみ敎へ給ふ佛の心に反けるものなるを恐れて、不請の念佛兩三反申してやみぬ」と、一篇の思想を結びとめたり。かくの如き有樣に、どんな事柄を、どんなに連ねて、思想としても、必ず此の主想の大綱によらねばならない。然るに、多くの作者は、此の主想の大綱を明かに確かに定めずして筆を取る故に、往々其の敷衍の道を誤り、最も甚だしいのは、命題に關係のない事柄を喋々記述するに至る。思想のまとまらざる、さては、全く其の文意のわからないものとなるは、一つは此の不

用意によるのである。

第三 秩序ある進行といふ點に不注意なる事

秩序ある進行とは、主想を明らかに強く美はしく發表せんとして、これを敷衍するに當つて、順序正しく敷衍して行く事である。

文を作るには、先づ其の主想を敷衍するに用ふべき事がらを、豫め我が心に多く集め置かざるべからず。而して、次には、いかに筆を起したならば、よく人の心をこゝに引き寄する事が出來るかを考へなければならない。又どうして筆をとめたなら、讀み去つて、人の心に忘れさせない力があるかを考へねばならない。扨て、其の起結の考へが定まつたなら、其の得たところの起筆から出て、豫め定めたところの結末に、自然にはいる樣な道をとつて、其の主想を敷衍する爲めに豫め集め置きたる事柄のならべ方を定めねばならない。此の準備が出來て、方針が立つてから、始めて筆を取るべきである。然るに、作者の多くは、此の準備をしないので、支離滅裂難澁の文が出來るのである。投書家たらんとするものは、よくよく以上の諸點に注意を拂つてもらひたい。

（未完）

賴山陽十二媛絶句評釋（一）

福井學圃

賴山陽が史學に深くして、其の著書の後人を裨益したるや、固より余の喋々を須たざるなり。故に其の詩は詠史諸作に於て最も特長を露はし、優に當時の諸作家をして其の下風に立たしめたりき。たゞ其の作法は、縱橫自在に內外古人の典故を援据して、獨得の批評を試みたるが故に、一見してまゝ解し難きに苦しむものあり。今此に擧げんとする十二媛絶句は、皆我國有名の婦人を詠じたるものにして、或は德行の高き者、或は文學に秀でたる者、或は早く浮世の悟を開きたる者、或は艱苦の中に遺兒を養ひたる者、或は勇武なる者、或は情に濃かなる者、或は女丈夫的なる者、或は貞婦或は賢母等、みな家庭の談柄に上ぼすに足るもの〻みなり、十二媛は年代の前後に隨ひて其人を擧げしなるが、之を始むるに紫女の高風を以てし、之を終ふるに楠母の賢明を以てしたるは、また山陽微意の存する所

を見るべし、因て略評譯を加へて、本誌に投じぬ。其傳記の如きは大抵世人の熟知する所なるべければ、詩中に言ひあらはしたる外は、大かた略しぬ。

紫式部

靜女高風冠內家。何唯彤管逞才華。相公百事原無缺。不折一枝深紫花。

靜女は、詩經の邶風靜女の章に、靜女其姝とありて、靜とは閑雅の意なり、以て式部を指す。內家は、唐の李賀の詩、柳花偏打內家香の註に、內家は宮嬪なり。彤管も、また詩經靜女の章の貽我彤管より出て、前の靜女の字に應ず、彤管は筆の赤き管にして、支那にて古へは后夫人必ず女史彤管の法ありて、事大小となく之を記せり、後世には單に女子の用ふる筆を指していふ。此句彤管逞才華は、式部が才筆を以て源氏物語日紀等を書きしをいふ。相公は御堂關白道長を指す、道長は上東門院(一條天皇の中宮彰子)の父を以て、威權極めて盛んに、其榮華の狀態は、榮華物語に詳かなり。一枝は數多くある花の中にても此一枝はと、力をこめたるいひぶりなり。深紫は式部の名に因みていひ、花は其の美人なりしを形容す。道長式部が才色を喜びて、之を挑みたりしに、式部の順良謹愼なる、婉曲に之を辭して其の貞操を全ふしたる事、委しくは式部日記にあり。

此詩の大意は、式部が絕世の文藻ありしのみならず其の行の高かりしを頌したるなり。當時宮中のありさまは、浮華淫奔の風習甚しく、諸姫嬪は恰も妓女の如き觀ありしに、獨り式部は毅然として其間に挺出し、高風は內家中第一にして、啻に其の文筆が才華を逞ふして諸姫嬪を壓倒せしのみにあらず。されば、威權雙びなく何事も意に任せて缺くることなき御堂關白も、此一枝深紫の花は手折り得ざりしとなり。夫れ上東門院に事ふる式部の身にして、門院の父たる關白よりの挑みを拒みしは、其の苦心想ふべく、高風欽すべし。山陽の詩善く之を寫し出だせり。

清少納言

暗記長慶亦等閑。暇毀一捲解龍顏。誰知雞塞臨摸手。當喚斂裙李義山。

長慶は唐の年號にて、白樂天の詩集に長慶集あり、此にては詩集を指す、樂天の詩集は早くも嵯峨天皇の朝に渡來し、王朝時代には盛んにもてはやされたり。暇

簾は簾なり。龍顔は天子の御顔をいふ、一條天皇、ある雪の朝に左右を顧み給ひ、香爐峰の雪は何如と宣ひしに、清少納言は直ちに起ちて御簾を捲きあげしかば、天皇大に其の才慧を賞せられき、此は少納言が樂天の遺愛寺鐘欹枕聽　香爐峯雪撥簾看といふ句を暗記せしに本つけり。一書に此事は天皇にあらずして、少納言が事ふる所の一條天皇の皇后藤原定子となしたれども、それにては此詩を解し難し、新井白石の詩にも捲簾清氏對龍顔とあり。雜纂は、唐の李商隱が著はしし書にて、商隱は晩唐の有名なる詩人なり、臨模はうつすなり、釵裙は婦人の用ふるもの故、此にては婦人の事になるなり。義山は商隱の號なり、少納言の著はしたる枕草紙は、多く義山の雜纂に倣ひしをいふ。齋藤拙堂もまた其の文話中に此と同じき評語を載せたり。或ひと曰く、文體は雜纂に倣ひたれども、之に上ること數等、其の差遼啻に鷄鶩のみならざるべしと。大意は、清少納言が才學の秀でたる、殊に枕草紙の妙文を頌したるなり。少納言が才學にして、樂天の詩句を暗記し居るなどは、等閑の事なれどもそれですら能く簾を捲きて龍顔を喜ばしめき、誰れか知らん義山の雜纂をうつし枕草紙の文章は、高妙自在にして、當さに婦人中の義山と稱すべきなりと、さて紫清の二女は、齊しく當時無雙の閨秀にして、學問氣韻共に優劣をなし難し、されども彼は貞淑にして德行高く、此は内行修らずして才學に誇るの氣味あり、故に山陽の二女を詠ずるや、一は其の高風を擧げ、一は其の文章のみを擧げたり、能く人の美を成すものといふべし。詩は前の方趣向言ひまはし共に工みなり。

もとのしづく（接前）

三宅花圃

五　籠にすむ鶴

望東尼、春秋の月花につけて、うたひ出づる言葉のたえなるを人々聞つたへて、添削を乞もの多き中に、中村圓太といふなむ、同じ藩の中には平野國臣と、一つこゝろに勤王の有志として重ぜられつる一人なり、望東尼は弟子としてのいつくしみ、同志としてのしたしみ、淺からず圓太をおもへば、圓太もこの別莊に時事をかたり、同志の人々などと腕とりしばりて、こゝろに違ふ世の有樣を憤りしが、突然思ひ起して、江戸に立出て、同じ志の人々と往來しつゝ世のさまをも見るほどに、安政六年かの櫻田の變ありてより、いよ〳〵人氣も立ちて物さわがしく成ぬる頃藩主東觀あるべきよしきゝて、國許こ立かへりひたすらにとどめまつ

りしも聞かれず、中々にゆるしなくて、國を出し罪もてとらへられんずときゝて、一度は鹿兒島にのがれたれど遂にとらへられ獄に下されぬ望東尼はかくと聞ていよ〳〵結ぼるゝ胸の思ひのはるけん方もなきに月形洗藏、鷹取養巴、これまた各幽閉されぬといふに、世はたゞ常闇の心地して、ひたくれまとふ心をはげまし、殘れる同志筑紫衛、早川養敬をかたりがたきとして、いかにも如此こゝろざしあつき武士を、あらぬうきめに、一日だにあらせづかしきかぎりならずや、とりのこされし御身等のつとめは少しも早く、天つ日かげの、あきらけき身に彼等をなし給ふ術をはかりたまひれ、とはげましつゝ、とせんかうせん、と額をあつめはかりしする、幸ひ長藩より、久留米なる志士の、幽囚されしを救はむとて、此福岡の領内を經て使者の久留米に到ると聞き、これによりて事をはからはんと、早川養敬は時の要役、牧市内のもとへゆきて、他藩にても志士幽閉をゆるしゝことより、京攝の有さまもまじへ物語り、ときあかし口れば、市内もつく〴〵とおもふ樣、まことに國をおもふ心々の經緯はあれ、よしいろ系の同じ錦に織立なん、志はひとしきをさとりて、遂にこの人々の罪を免るす事となりたりけり。

其頃將軍上洛あり、等持院にありし足利將軍家三代の木像をきり、首を三條河原に梟しつるなど、おさ〳〵人心の落ゐぬ程將軍は參內ありて五月十日攘夷の大令を天下に布かせられ、公式の間、圓滑に事をさまれる如くなれども、先に石清水八幡宮御參詣の折、將軍供奉の時を以て、攘夷御委任あり、節刀を授けんとありしを、將軍病をとなへて、供奉せざりしなど、怯懦の振舞として、非難の聲、朝野にみちわたるが上に、去年新築せし品川御殿山の外國公使館に放火せしものあり、生麥にて英國人を斬殺せしものありて、其犯者を得ぬを以て談判のため、英國より見もなれぬ黑船の、品川沖の烟をたて、よせくるなど、外患內憂いづれ避べきかたをなみ、志士東奔西馳して動搖甚だしく、人心たゞ薄氷を踏む心地して居たりしほどに一橋中納言は、攘夷の聖旨を奉じて東歸したれども、江戸において、鎖攘の行はれぬは、京にありて、開國和親の說容られぬに等しく、一身二途に分ちがたく、ものゝ中らに立すくまれるごとくなれば、情を具して奏上し、政事後見の職を辭しけるに、水戸中納言も先に將軍に代り江戸に下り、攘夷を指揮すべき命を奉ぜしも、同じく又辭されければ幕府は將軍未だ東歸なく統御の人はたなくなりしより、幕府の老中、小笠原圖書頭心を勞し、速に將軍の東歸を乞ひ、且は鎖攘の行はるべからぬ理をも、あきらめ申陳ん、と二千餘の兵を率て上京しつるを、朝廷には、やすからぬ事と御けしき惡しく、兵威を以て、おびやかし奉りぬとて、將軍は、大阪に下りて、それ等を處分すべしと命ぜられぬ

かく紛擾の中に中村圓太は野唯人と變名し、各藩の有志と通じ、殊に長藩の久坂義助、寺島忠三郎と示し合せ、幕府の御覺えめでたからぬを機とし、攘夷御親征を首唱し、討幕の策を畫し、日夜奔走するを、朝廷にも賴みあるものにおぼしてや、尊王攘夷の趣意徹底あるべきやう、周旋有之可候事、との御書付をさへ給はりたれば、いよ〳〵意を固め、且各藩に令して、御親兵を徵さるゝ旨ありければ、福岡藩よりは、他の諸藩にまさりつべき大隊をも、獻げまく思ひ込みて、福岡さして足をそらに走かへりぬ、都には大和行幸、夷狄親征の敕諚出て、既に期も迫りぬれど、先帝叡にあやぶみ思召所あり、中川宮よりも仰立らるゝ旨もありて文久三年八月十七日といふに、俄に會藩の兵を徵して、九門を守衛せしめられ、三條中納言をはじめ、過激の公卿の參朝をとゞめられ、攘夷黨の中心として、今日までは、人も歩みを讓りたりし、長藩士も禁裏守衛の任をとかれて、榮枯盛衰は僅なる世も、かく斗とや思ひ見し、みがき

し、銹きたへし刀、たゞ徒なる心地して、敵なき浮世を歎き、憤やる方なく戦端をも開かんさまなりしを、主将益田彈正、とかくにこれを引まとめ、かれてかたらひまつりし、三條、四條、東久世、錦小路、西三條、澤、壬生、七卿の、長藩をたよりたまへるを擁して、とも〱都を引退きぬ、昨日は官人輿丁の供奉、したがへたまへる御身なりしを、さらぬだに露けき秋の旅の空に、馴れし都をかへり見勝に出立たまふ、人々のうへ思ひやるだにかなしかし、かくぞとは知らぬ中村圓太はたゞ國の爲わが藩のためと、心のかぎり、四方にはしりて、九州諸藩聯合をときすゝめ、今は我世と思ひとりしを、思ひの外の都の變動、盈てはかくる望月の夜まではまどかなりしを、十六日の頃より蹉跎じ、七卿は西竄し、長藩は守りをとかれし、と傳ふるに、手に持らし物、とられし心地して悔みなげゝども、いかにせん、取かへすべき術もなく、泣然と思ひ屈する折しも、藩主は七卿の復官、長藩の復任、公武和合の議上らんとて、上京あり、圓太も其尾につきて、謀るところあらんと爲せしに、はや都邊は野分の朝とさまかはり、花ぞと見つる七種は、かげだにかくれて、暴吏なほ後の詮索きびしき折なりければ、圓太の上京を直に見とがめられ、桝木屋の獄に捕へられぬ、望東尼はかくと聞き、うれひに堪ず、獄吏の手を經て、和歌一首に心のかぎりをこめていひおくりける、

たとひなき聲を雲井にあけてこし
たつも籠にすむ春ぞわひしき

六　花の友ずり

平尾山の別莊には、昨日の嵐、今日の雨、平野も捕へられ、圓太も同じうきめを受ぬと、聞及ぶに心細さもいやまして、又つぎつぎに降かゝる難儀も國の爲には身を惜しまぬ人々ながら、福岡の志士の心は、たゞ此大木を中らとして、つなぎとめたるものなれば、もしあだし野の、花咲春もまちあへず散なんのちは、殘りたる木の葉や何の香もあるべき、よしさなくとも、今は危急の場合なるを一本の支へも欲しぬる時なれば、このまゝに獄にありて、此大木の朽なんやうの事あらんか、士氣の沮喪も甚しからむ、いかで今一度、此世に出して大鵬の翼のまゝに翔らやなん術もがなと、思ひわづらふ望東尼の心を、若き人々はたゞ片端のみ思ひとりて心も狂はん迄憤り、誠よ刀自の憂ひおぼす樣に今の藩政の日に〱、非にして、上は主君の聰明を掩ひ下にはたゞ暴力をたくましくして、抑壓し、幕府の專横なるにおもねりて、政義をかへりみず、遂には社稷を賭して、身の全きをはかる輩多し、今この邪曲の士の存在のまゝにせんか志あるものは、無辜の罪におとされて、囹圄の中に呻吟し、志なきものはたゞ阿諛を事として、朝の露、夕の烟、時のまに〱、志を飜して歸着する所なし、いでや我輩かゝる奸賊を倒し、圓太を救ひ、一と先づ長州へ落去らしめ、彼藩中にある三條公を奉じて京師に立越え禁闕に乞申して東夷征討の敕を乞はゞやな、かゝらんには私には我藩の邪曲を掃ひ、公には天下萬民、其堵に安んぜん、緒をも開くべきなり、せんずるに、牧市内の、ごときわが職をかざして、正義の士をおびやかす如きは倶に天をいただくまじき仇とこそ思へと、哮り立るやから人の平尾山の別莊に、やゝと斗おしこもりて、劍をみがき銃をとゝのふるなど用意なおこたりなかりけり

望東尼は慈母の子をさとすやうに此有樣をつく〱と打守りつゝ志はいさぎよからぬにはあられども、事の成立んには、又自らの順序といふもの侍るおや、今しばし時機到來の期をまちたまへと、なだめけれどもはやり立たる心の駒にむちうちて、千里も遠しとせず、ふみ出したる上には、大方の忠言も、たゞ因循姑息とのみおもはれて、いかでうけひぬ

べきさまも見えず圓太が實弟恒次郎、小藤小藏、伊丹平一郞など示し合せこれあればこそ、藩政もはかどらず、人心もをさまりかだし、と恨みおもひし、牧市内の朝とく海濱の逍遙を慣とせるをかれてしれるより、同志の中にも中原、立田の二人は途上にまち迎てたやすく打とり、事の手はじめ幸よし、と勢よく平尾山の隠家に引あげ歸りきつことかく、緒につきければ、いよ〳〵一座の人々氣あがり意たけく、盃をあげてかつうたひ、かつ吟ずる詩歌に慷慨悲憤みち〳〵て、鬼もなりをひそめ、神もすさまじとや思ほすらむ、眞一郞は座を中央にすゝめつゝ、恒次郎に盃を侑めたはふれていふやう、御魚には何よけむともてなしぶりたる筵にこそあられ、今朝地引か濱にて屠りたる鮮肉は、同志の人々には佳肴珍味にやあらむ、一片をもて來て、一つ過したまひれ、とわらひどよめく中に、望東尾はさすがに女氣の、おちたる氣はあられども行末こし方もおもはれて、一人打しづみつゝ「あすしらぬ此世の中のはかなさは」とひそめきいへば恒次郎は口とく「限りはてなき今日の暮かな」と下の句を附たりけり、人々いよいよ興に入りて、今は思ひ殘すかたもなしと、谷鍜冶木なる加藤彌平太が宅の藪の中に、身つくろひいかめしうして、うち立んとすれど、いかにせむ心は同じ道をさせども行方に思ひ〳〵の差ありて、かくせむ、とせむの説あはず、鷄鳴曉を報ずれども囂々とひしめくのみ、事更にはつべくもあられば、同志の一人いらたちて、大丈夫一度死を決して事を行はんとする、右にせんも、左にせんも、詮する所はたゞ一つの目的を遂せば、萬事畢れるなり、今日になり時機を失せんか、尤も味方の不吉なるべし、われと思はん方々はつゞけよやとはせ出せば、これに勢を得て一人を危うすな、それつゞけとたゞいかり猪のあれにあれて、とかくもどかん暇もなく、一度にどつと驅出したり

目ざす牢獄に近附しより、小藤平藏はかれて案內しれる事なれば、先立て當直の吏を脅し圓太をたやすく奪ひ取り、仙田雪子の家に落のびけり仙田雪子も心掟まれに正しき女にして、古櫃の中にしのばせ、切に人の見聞をさけたれば、圓太はこゝに二三日ありて、田代表へ入立ぬ田代には、對州藩染井直衞といふ人先に故ありて浪々して僧となり名を虎睡とよび、失念門虛空寺一朝軒にかくれしのびし頃筑紫衞も同じ失念門に住しつるより、今に親しき中なるが、田代にあるを幸ひ田代在姬方村へしばしのあひだ立しのび又長崎の方へ入立ちのがれおほせたり、藩廳にてはかくときゝ直ちに鷹取養巴、江上榮之進、早川養敬へ特命し、圓太を即座に捕殺すべきよし、いひわたし、きびしく行衞をもとめつれど、此三人は圓太のいとも親しき間柄にて、又此度の事にもたづさはりし人々なれば、陽には詮索するやうにみせながら、陰には志を通はして、これを紹介して三田尻なる三條公へ謁見をとげしめたるに、圓太は此光にあひて、いよ〳〵勤玉の志を固むるを、しる人なきこそ幸なりけれ

（つゞく）

春鳥屋の歌

佐々木信綱

美濃中津なる間鷲耶氏の案内にて小鳥狩を見る聯作十首

春鳥屋の時になりぬと山畑に
網はる料のとまり木立つる

春の夜のいまだくらきを畑中の
　とやにおりたち霞網張る
網張りて鳥籠かけて追小屋に
　鳥まち居れば朝日のぼりぬ
まむかひの山打かすむ朝東風に
　近き麥畑蝶ひとつ舞ふ
我待つや鳥いまだ來ず鳥かごの
　を鳥さへづる春の日うら〳〵
遠方の松のこむらの上こして
　そゝや來れり一むら小鳥
振り棹をふりのさわぎにおどろきて
　鳥まひさがるあなた此方に
こゝだくの獲物をさめて追小屋に
　たばこくゆらす翁ゑみつゝ
とまり木の木葉ゆるがし風いでぬ
　あたら小鳥の行きや過ぎなむ
網をさめ鳥籠をさめ鳥屋守の
　老人かへる菜の花の道

家庭

▲園藝十二德

慶應義塾教授　菅　綠蔭

人の職業中、最も必要に、最も衞生的に、又最も高尚なるものは、農業に如くはなし。昔羅馬の詩人ヴアージルが、「余が第一の希望は良哲學者たるに在り、第二の希望は良農たるに在り」と云はれしが、此中第一の希望は姑く措き、第二の農業に至ては、余が家元農家なりしが爲か、身は多く都會熱閙の地に在るも、心はやゝもすれば淸閑なる田園に馳せて止まず、加之余は元來無風流人にして、圍碁、將棋の嗜なきは勿論、寄席、芝居、相撲等、亦殆ど心を樂ましむるに足らず。玆に於てか今より恰も十年程以前、一日門前に茄子、胡瓜等の苗を賣行けるを聞附け、之を買求めて庭園の一隅に培養せしに、其快や眞に言ふ可からざるものありき、即ち久しく埋沒されし余が農業的趣味は、端な

くも斯くの如くにして喚起されしが、爾來歲月匆々、既に十年を經たる今日に至るも、尙園藝は余が樂事の一として、到底忘るゝ能はざるものあり。今此表題に揭げたる『園藝十二德』とは、即ち余が既往十年間、一種の娛樂として、自ら經驗せるものにして、試に之を列擧すれば、左の如し、

一植物の培養は、生存の競爭益々激烈ならんとする今日、及び今後の社會に處する、人の娛樂としては、最も高尙に、又最も健全なるものなり、何となれば無心なる紅花、綠葉、能く我心を娛ましむると同時に、心機一轉、亦能く我浩然の氣を養ふに足ればなり。

一植物の培養は、物の生長發達を希ひ、及び美花好實を望むより生ずる、所謂希望的快樂の最純最清なるものなり。

一植物を愛する者は、勢ひ早起し、又多く戶外に在り、隨て新鮮なる空氣、陽々たる光線、以て能く吾人をして健全快活、所謂樂天的の人たらしむ可し。

一園藝は自然に人をして植物學上の智識は勿論、併せて理化、地質、及び氣象學等に關する必要有益の新智識、換言すれば自然法の一斑を知らしむるの利益あり。

一植物の栽培、換言すれば田園的生活は、單に人をして健康ならしむるのみならず、亦人をして自ら純潔正大、即ち紳士たるの美德を養ふに足るものゝ如し。

一植物は日夜生長、以て人をして自ら進步の必要、及び徐々として屈することなき、即ち所謂勤勉力行の模範を示すものに似たり、例へば花も實も時來らざれば、開花結實せざるが如き是なり。

一凡そ物皆之を爲すに必要なる、所謂時機なるものあり、而して植物の栽培は、亦最も能く此時機利用の何物たるやを知らしむ。即ち一草一木と雖も皆各々其生長、發達及び成熟、結果等の時機なるものあれば、吾人は須く此時機に乘じて事を爲さゞる可からず。若し夫れ然らずんば、假令如何に辛苦培養の功を積むと雖も、到底其好果を見る能はざる可し。

一園藝は亦人をして用意の必要を知らしむ、即ち吾人は何事に依らず、豫め劃いて、後靜に其効果を待たざる可からず。

一園藝は温室を利用せば、四季共に樂むを得可しと雖も、就中夏日の植木は晝寢を防ぐの最良法たる可し。

一園藝を愛する人は、勢ひ外出すること少く、随て若し家族一同に之を愛せば、其家庭をして所謂和氣靄々、恰も春の如きものあらしむ可し。

一自然は人の心配を醫する良藥たるのみならず、心配なきものに非ざれば、眞に能く自然を樂むことを得ざるなり。即ち蒼々の木、以て我悶を遣り、灼々の花亦能く我涙を拂はん。

一植物の中發育不良、成熟不善なるものは、人之を無用の長物なりとし、或は之を拔き、或は之を捨てゝ、毫も惜む所なし。即ち人の一生も亦實に斯くの如くなれば、吾人は須く孜々學に勉め、汲々業に勵み、以て自ら笑を草木に取るなからんことを期せざる可からず。



最近東京女學生風俗（其九）

聞く、我同盟國なる英國の紳士が、常に其健康を保ち氣品に乏しからざる所以のものは、主として其田園的生活、換言すれば園藝的趣味あるに由ると。吾人は我國の近來、亦漸く此種の傾向あるを見て、心私に之を喜ぶと同時に、將來益々斯道の盛んならんことを希望して止まざるものなり。

▲アルマ、タデマ夫人の繪畫

水野環一

やさしき繪筆をとりて、あるは崇高、仰ぐべきもの、あるは妖艶、愛すべきものをとらへ、描くところ、一濃、一淡、よく色彩に調和を示し、寫すところ、一刷一點、よく表情に豐かなるものを現はして、滔々として美神の聖壇を遠かりゆく今の世に、かぐはしき藝術の靈光を與ふる閨秀畫家は、まこと、情緒の濃かなるものを謳ひ、人生深奥の響きを奏づる女詩人と共に、われ等が推重に價すべきものならずや。わがアルマ、タデマ夫人の如きも、まことに近英の畫壇に咲きいでたるめでたき藝術の花にして、われ等は女史の如き美はしき女流美術家を有するアルビオンの國を羨望せずんばあらず。

アルマ、タデマ女史は、英國に於ける和蘭の畫伯、サー、ローレンス、アルマタデマの夫人にして、多く趣味豐かなる人事畫をものして世に知らる。女史が藝術界にまれなるほまれを博しつゝあるも、又、その一風かはりたる畫風が、平凡なる繪畫に飽けるかの國の好畫家の渇望に投じたるに由らずんばあらず。

女史の以前にありては、ローザ、ボンヒユール及びバツトラー夫人等の天才のきらめきある繪畫つよく、女王朝の藝術の內容を豐富ならしめしものありと雖も、十九世紀の末葉、二十世紀の初頭に至りては、英の藝苑はひたぶるに女史の才に負ふ所多し。女史の過去の藝苑の生涯は決して長しと云ふべからず、然も、今や彼女は全く桂冠を以て冠せられぬ。女史と同時代の先進の女流畫家としては、ミツス、アール、ミツセス、ジヨツプリング、ヘンレツタレー、ミツスケンプ、ウエルヒ等、輩出して「時代の美術」を代表して、英國に於ける女流美術家の位置を一段、高からしめしと雖近時女史のめでたき筆技に接して、衆目みな彼れを忘れて、只これを藝苑の女王の如く讃へんとす。

女史がかく社會にほまれを博しつゝあるは、勿論、女史自らの天才、獨特の筆技、かつはその絶えざる精勵にとるべけれど、なかばは、その夫なる畫伯の教示と批評とに負ふ所なくんばあらず。既に藝苑の老將たるサー、ローレンス、アルマ、タデマはその妻の筆技のますく〳〵圓熟するがためには、あらゆる助言と勞力とを以てし、女史が若き時代より終始かはる所あらざりき

けに女史がはじめて、サー、ローレンスの門に走りしは、いまだその十八歳の處女のころにてありき。女史は今猶、己がサー、ローレンスの門下たることを以て光榮なりとす。

アルマ、タデマ夫人の繪畫は二十年間、絶えず英國の王立美術院に出品せらる。一九〇〇年には女史の作、巴里萬國博覽會に出品せられて銀牌を得、ペルリンの博覽會にては金牌を得たりき。そはその作「滿足」"Satisfaction" と題する作、一人の貴夫人が鏡に對して、我れも己が雅しき美貌に微笑めるさまをうつせるもの、最も天眞をうつしいでゝ愛でらる。この畫幅、サー、ブルース。セートンといふ貴族に購はれて、この人の秘藏する所となる。

現今、女史の作は倫敦の王立美術院及び新書堂に出品せらる。アカデミーの出品中、自眉と讃ふべきは「戀のさゞし」"Love's beginnig"にして、新書堂のそれは「樂しき精勵」"Sweet Industry"と題する作也。こは後、マンチエスターの美術館に購はれたり。



最近女學生風俗(其十)

女史はつねに倫敦、聖ジオンス、ウード St John wood なる彼女の書室に於て、その美はしき製作をものす。少しく女史の書室につきてうかゞはんか、そは最も幽寂閑靜の境にして美術家のスッウヂオには最もふさはしきところ、女史の居室には幽邃なる自然の裝飾あり、書室には精巧なる藝術の裝飾ありそは多くは和蘭藝術復興期の當時の製作にかゝる木造彫刻等にして、十六世紀の遺物、この居室や、書室はいづれもサー、ローレンスが妻のほしいまゝに造らしめしものなり。此處に一つ最も珍らしく感ぜらるゝも

のは、和蘭の古りたる寢臺也。その寢臺柱の日附によりて考ふるに、そは一六〇六年のものなりと云ふ。こは少し、ローレンスが生地なるフリースランドより取り寄せしものなりと。女史が快活、洒灑の畫風をよろこぶかたはら、深く古物に嗜好を有せるこれを以て知る可き也。この古物の嗜好はやがて女史の繪畫をして古物的ならしめぬ。女史のゑかける女性は多く歡喜快活の相を表はせるも、そは現今、英國女性のスタイルにあらずして、和蘭藝術復興時代、もしくは英國スチスアート朝のそれにして、殊に女史は英國內亂時代、ミルトンヤバットラーが詩篇を揮ひし、當時の、劍と戈とが國內を支配せし時代の女性の姿をさながらに、寫していてたり。さるからに、女史の書は終に、歷史畫と風俗畫との調和とも見る可きか。而して女史の描ける女性は多くは、華麗に盛裝せる姿なるも、快活の中に疲勞の風貌を有せるは、そが戰亂時代の女性なるを以て也。とはいへ、女史の色彩や、背景や、人物の勤作等いづれも光明と優雅なるはさる批評家の評しけむ如く、戰亂の女性を描きたる作者の決して厭世家にあらざるを證してあまりあり。而して女史の作に於て最も尊ぶべきは、人物表情の豐かなること也。熱心、憂愁、恍惚、歡喜、天眞等、誰れか女史の畫を閲し來りて、這般の消息を解せざるものぞ。表情につぎて、着想の奇なるはわれらが夫人の作に於て殊に認むる所、その作「こゝまでおいで」"Nothing venture, Nothing have" の如き、一幅の畫面、觀來れどあどけなさと可笑みとに充ち、われらをして轉た、天眞なる幼な時を回想せしめずんば止まざらんとす。

われらをしてさらに女史の傑作を閲せしめよ。一八九五年には「無言の說得」成りぬ。盛裝せる貴夫人、ピアノのかたへに立ちて、樂師の彈ぜる妙音に聞き惚れたるさま、こは畫題を沙翁が詩句による。

The silence often of pure innocence
Persuades when speaking Jails.

一八九五年、この作につぎて「戀の道ゆき」をものす、新畫堂に出品せられたり。

王立美術院、及び新畫堂に於て、一八九六年には「讚歌」及び「祝杯」の大作出品せらる。前者は一人の若人と佳人とが若き思ひの甘さに醉ふて、讚歌を誦しつゝあるさまにして、後者は二人の若人が一人の少女の健康を祝して、杯をあげつゝあるさまを寫せしものなり。

一八九九年には色彩のいと珍らしきを以って知らるゝ「新らしき書」成りぬ。その翌年、一九〇〇年には最も可憐の傑作と稱せらるゝ「詩人の華」をものしぬ。そは花合かしき處女が戀愛詩に思ひくづるゝさまなり。同年亦戰時費（南阿戰爭のため）獻金の美術展覽會の「ギルドホール」に開かるゝや、大作「未來のかげ」出品せられて江湖嘆賞の聲喧しかりきプリンス、オフ、ウエールスによりて、購なはれき。一九〇二年、女史がアカデミー出品中、主要のものは「幼き訓練」と題する書幅にして、玩是なき幼兒が人形を訓練しつゝあるさまにして、蓋し作者の意は、天眞無邪氣の幼兒の中にもひそめる母心を表はせるものなり。その他に於て女史が過去の生涯を通じての大作を求むれば「別離の悲哀」と題せる製作にてあらむか。こは初め一八九五年アカデミーに於て出品せられ、さらにその翌年、一八九六年には佛京サロンに出品せられて好評を博せり。こはこの作者が、人性深奧にひそめる「衷情」を寫さんとこゝろみしものにして、畫題はこれを詩人バーンスがめでたき詩句より採れり。

I can dee, but canna' part.
My bonnie dearie.

なほ、女史は肖像畫をものし、サー、ローレンスが愛犬を撫しつゝある圖等もあり。時には風景畫をも描きしも、多くは箱庭的描寫に陥りて、天然雄大の致に乏しきは女流美術家のつねにして、深く咎むるに足らざるべし。

アルマ、タデマ夫人、初めの名はローラ、セレアと呼びて、英國官立醫學校校友ジョーヂ、エップスの女に



最近女學生風俗（其十一）

して、又そのはらからなるドクトル、エップスの繪畫は數多きサー、ローレンス、アルマタデマが肖像畫中最も眞を寫し得たりと稱せらる。まこと、女史は多幸の人なりき。その家庭や、その人物や、その經路や、只平和と光明とに滿つるものあり。今や、女史は桂葉を以て、冠せられ、宛として藝苑の女王の如く、あらゆる嘆賞と名譽を以て、倫敦の社會より報ゐられ、その技、愈優麗、圓熟、社會はさらにアルマ、タデマ夫人に待つに、繪畫詩の作家を以てせんとす。好い哉夫人いまだ齢老いたりとなさず、願くは來らん生涯に於て、われらに示すに、人事の最も善なるもの、人生の最も美はしきものを以てせん事を。人、やがては云ふべし、されどその永はに朽ちざる繪畫の美のきらめきは遂にこれを如何。

西歐の閨秀畫家がことを叙して、やがて思ひ到るは我邦の美術界也。文壇の閨秀、われ多く才人に接せし事あり、しかも美術界に到りては、杳としてその聲をきかざるは何ぞや。美術界の近状、われら二少壯氣鋭の畫家を認むれど、清新優麗、人をして人生深奥と相面語せしめ、自然の生命と融合せしむる新進女流畫家のいでざるは何ぞや。道樂半分の「繪のお稽古」は、地軸一轉、遠く暗に弔られたり。藝術は眞面目也、日東國藝苑の女王、遂に期して待つを得べきか、非乎。

論文

日本女子大學教授 國井文學士選

地

○人間

靜岡 たか子

人間とは何ぞ。これを女にしては、世の人曰く、面には磨砂やうの眞白きもの厚くぬり、唇をば燕のやうになし、雨ふりても濡らぬ用意の庇髮に、ホワイト、オリーブのリボン、こちたき草花結びまろめし簪、かずかず飾り立て、身には父母の御汗にかへし縮緬羽二重をつけ、濃紫の袴に佛蘭西形の靴うがちし姫君、即ち人間なりと。これを男にしては、世人曰く、頭はチックとやらんにて、犬のなめたるが如く分け、金縁の眼鏡仰々しう人を睥睨し、髯いたくひねり上げて、衣はパリの流行を追ひ、新荷着の廣告を見るごとに、人に魁せられなば己れ一代の不面目とや、戰々兢々として、或は靴に或は帽に、其の心をなやます。すれちがへば、香水の香鼻をつんざく。かゝる紳士即ち人間なりと。而して、彼れ等が心や如何。其れ紳士、姫君、日夜かゝる外面の飾にのみ力めて、其の內心や、實に空洞の如けん。物に譬ふれば、則ち赤きゴムダマか。美しき皮をはげば、あはれ空洞よ。あゝ心空洞、タマ空洞。空洞は即ち〇なり。

あはれ、心なきものにて、人間と稱し得べくば、己れはゴム人形に美裝せしめて、之れ人間なりと云はむ。彼れ等にくらぶれば、之れは米はまぬ利益あり。心なくして、人間と稱し得べくば、己れは、向ひの猫も玉子孃、隣りの犬も太郎君とこそ呼ばめ。あなあはれ、今の世の所謂人間とは、それ人形猫犬と遠からざる者か。

（雨評）別にめづらしき趣向にはあらねど、末段の數節、諷刺し得て痛快なるものなり。地とす

人

○愛情

尾張國中島郡豐田村友松溝口 平野春子

愛は人間必須の要素にして、而も亦萬種の原動力なり

是が前には、富貴名譽も塵芥の如く、生命財産も鴻毛に似たり。蓋し夫妻の間に於ける貞節、君臣の間に於ける忠勤、朋友の間に於ける信義、父子の間に於ける孝養、概し來れば、孰れか愛の根本より發育發成せられたる花實にあらざる。人若し其の臣の忠勤を望み、其の妻の貞節を欲し、其の子の孝養を願ひ、朋友の信義を求めば、唯平生相互の愛情を濃厚ならしむべきのみ。愛情にして濃厚ならむか、生命も互に許すべし。何ぞ不倫、不德、劣情妄念等の惡魔は、其の間に乘ずるを得んや。嗚呼、鶴岡祠前、柳眉高く花唇やさしく、六十六國總追捕使を睥睨毀譽し、粟津原頭、紫騮に風をきり纖手刀を揮ふて、敵將を殲したる、或は忠臣の離躰を負うて、松の雫に袖を絞り、或は孝子の裸躰、凍を忍びて鱗を江河に求めたる、何ぞ其の思想崇高芳潔にして、行事の純粹佳美なるや。而して、是れ皆愛の至情の外界に發現せるものに外ならず。世豈に愛を措て、忠、孝、貞、信等の美行あらむや、然れども、愛の極端は、動もすれば亂に至るの恐れあり。古語に曰く、禮の用は和を貴しとなすと。余は將に謂はんとす、愛の用は禮を貴しとなすと。蓋し愛の極まる所をして亂に至らざらしむるものは、唯禮これを能くすべければなり、あゝ、愛の純は、春の日の親む可きが如く、愛の亂は、夏の日の恐るべきに似たり。一は、風暖に、花咲き、鳥歌ひ、楊柳の煙るが如く、櫻花の艶美なるに似、一は、炎熱燃くが如く、清泉涸れ、草木萎し、苦息喘々として餘命を保つに似たり。一は人を樂園に遊ばしめ、一は人を地獄に墮す。一は神に、一は惡魔に、愼むべきは、愛をして亂に至らざらしむるにあり。

（雨評）論旨は一通りきこえたり。人とす。

秀逸

○筆のまに〳〵

部筑部新田村　新羽上藍　小野ゆきゑ

浮世のちりひぢに、そまぬ幼兒のさまこそ、見るからにいと〳〵なづかしき心地せらるれ。ふさ〳〵としたる其の髮、ゑくぼ湛へたるその頰、いづれなづかしからぬかは。母の懷にありて、名利の鬼にせめらるゝことなければにや、もみぢの如き手して、ほゝゑみながら乳房含み居るさま、なにゝかはたとへんげにぞ。くもりなき神の心にもたぐひつべくなん。

あはれ、かう淸らにうるはしき幼兒の心も、やう〳〵年たくるにつきては、遂に免るまじき浮世の、荒波にもまれも汚れもゆくと思へば、いと悲しうなむ。心濁りはてたる大方の人も、みな一度は、神の如き幼兒なりけむをと思へば、今更ならねど、妾は教育のゆるかせにすべからざるをぞおぼゆる。

かれは賢し、かれは才ありなどいはれんには、誰も皆心嬉しう思ふさかながら、此の心嬉しう思ふこそ、げに人の心の、いと弱きしるしにはありけれ。いさゝかにても、賢し才ありなど人にたゝへられて、實に妾は人に勝れて賢きか、いみじき才を持ちて生れたるか、さにこそあめれ、などやうに、幼き心にも、おもひたのみなば、遂には成人して、大方は心驕り氣弛みて、あらぬ方にとくだち行くめり。古人の秀才は貴らずとはかうやうなるかを誡めたるにぞありける。幼き人を育てんには、此の心得なかるべからず

名利の雲、世にはびこりて、人の心はくもりはてぬ。名を得んためには夫をすて親を顧みず、黄金を求めんためには、師にそむき友をうる、人の世こそ慨はしき極みなれ。あはれ東方君子國とよびたゞへられて、三千年の久しき間、玉の如く美はしかりし、神代ながらの人心、いつの程よりか、かうくだちきぬらん。こを見、こをきくごとに、かのみづから幸なき身と、なげかひわぶる盲者聾



最近女學生風俗（其十二）

人の、なか〳〵にうらやましうぞなる。傳へきく耳なし山は、今もなほ、神代の儘なりや、いかに。

（雨評）論旨はきこえたれど、筆のやゝまとまりあしきふしあり。

○安價放鳥

紀伊海草郡紀伊村　高橋嘉子

おなじ都のうちながら、さまでにぎはしからぬ、街筋ゆくに、とある家に、小鳥多く集めて籠に飼へるを、足ふみとめて、よく見れば、鳩、めじろ、鶯、ほゝじろ、山雀、など、あまた囀りかはせる。さても、うれしきにや、はた、かなしきにやと、やゝしばし、ながめをれば、この家の前に、安價放鳥と筆太にかきたる、板札の立ちたるさへ見出でたり。

いぶかしとて、立ち去りて、あたりの人に尋ぬれば、小鳥商ふ家なりと云ふ。かの籠の鳥は、不吉に逢ひし人、あるは、病める人の小鳥を憫む心より、さては、殺生を嫌ふ人などの、おのがじ、購ひて、放しやるなりとか。安價放鳥の意も、こゝにさとられぬ。

さて、おのれ、つら〳〵思ふやうは、買ふ人なからましかば、商ふ人もなかるべく、小鳥もかゝる籠の憂目は見まじきを、憫まん心より、買ひ放つ人こそ、なか〳〵に心なき人と云ふべけれ。されば、買ひて放ち遣らざる人は、却りて小鳥の喜ぶ所となり、放ちて憫まんとする人は、却りて小鳥のうらむる所なるべし。世のさまにも、これに類ひするもの、數多あるなど、思へば、いとをかしうそゞろほゝゑまれつ。

（雨評）今一入の文にて候。

○剽竊詩文

東京麹町區飯田町六ノ十　重田春子

剽竊詩文！、剽竊詩文！、この忌むべき語は、わが親愛なる女子文壇に、今や火の手をあげてあり。諸姉よ、都下幾十の雜誌を試に繙きて見よ、わが女子文壇の如く、この語の多く記されたるはあらざるなり。

抑、女子文壇とは何なりや。他なし、我れ等女子の錦心繡腸を練る公開たる場所たるなり、然るに自らの作の如く裝ひて、他人の作物を盗み、名をうらんとするは、あゝ何の心ぞ。他人の所有をぬすむは、不正なり、盗賊なり。他人の作物を盗む、亦不正なり、盗賊なり。しかも、前者は法律の所罰あれど、後者はなし。されど、我れはむしろ、前者よりも後者の罪深きを知るなり。何となれば、前者は外界の物品を盗むにして、決して人の心を奪ふにあらず。後者に至りては、即ち、遠大なる宇宙の、凡て萬般の源たり因たる精神を盗むなり。實にその罪深しといはざるべけんや。

不正の人よ、靜坐拱手瞑目して、人間固有の良心に訴へよ。汝等の良心の聊かなりとも、人間固有たるの資格を有せば、必らず、汝等をせめん。さらば、御身等は、面に紅を帶びて、眞に改めよ。

選者の眼を迷はして、圏點を附せられ、よき評を得る

剽窃詩文よりも、幾倍か、編輯局の紙屑籠に投ぜられしその人自らの作を、我れは尙ぶなり。櫻吹雪烈しき夕寒の庭、おぼろにくもる晩春の空あふぎて、思ひ此所に至れば、撫然として長息せざるを得ず。神聖なる愛誌を汚すの人よ、速かに罪を悔いて、謝狀を愛誌によせよ。

（兩評）　評者も毎回嘆息するところにて候。

○胡蝶に寄する詞

上總山武郡千代田村岩山内田方　翠蹊女史

長閑なる春の朝、靜なる秋の暮、谷より林、野邊より村里、花尋ね、香を求めて徘徊し、日暮れて睡夢を一片の花輪に托す。借問す、汝、長閑けき春の日、靜かなる秋の空に、如何なる心もて遊び狂ふぞ。汝、春宵秋の夜の短夢長睡、如何なる境裏に彷ふものぞ、花は汝の友なるか、汝は花の友なるか。抑も亦、花に遊ぶは汝の天職なるか。汝の容姿は花の如く淸し。思ふに、汝の花も亦花に結べる露の如く玲瓏ならん。汝樂しきか、然り。果敢なきも、汝の特性なるべし。春の花秋の露、淸く生れて涼しく終り、遊んでは詩人に歌はれ、逝て亦詩人に吊せらる、果敢なしとするも、汝何をか恨むべきぞ。天地の生物をして天地の無窮に比す、何物か果敢なからざらん。而も、汝は俗塵の汶々に染まず、天の慈愛の露に沐して、其の生を終る。あゝ、汝果して果敢なしとするか。盛衰の長短を以て、妄りに果敢なきを嘆ずるなかれ。春に生れ秋に終る、是れ汝の一生期。而も、此の間に於て、汝は汝の淸淨無垢の天職を盡し終るにあらずや。吾人五十年の生涯汲々として東奔西走、塵埃に腸を包んて、空しく俗中に一塊土を築くに過ぎざるもの、汝に比して果敢なき事幾何ぞ。已ぬる哉、冗長の繰言。されど、吾は婦女の腐心の下たるものなり、あゝ胡蝶、吾汝を羨み汝を愛す。遊べ〳〵、菜の葉に止まれ。菜の葉に厭く時、櫻に止まれ。而して、花散り霜降るの時、靜かに長へに安眠せよ。

（兩評）　今一層の熟練を要する文にて候。



○同　情

なぎさ

同情の神
愛情の神

なつかしからずや、ナイチンゲール女史。尊からずや、ナイチンゲール女史。

小さき人形にほどこし、繃帯、小さき犬猫にほどこしゝ介抱、しる人や知りけむ、やがて幾十萬の益良武夫にほどこすべき、繃帯介抱のきざしなりしよ。

あはれ、黒雲暗澹たりしクリミヤの修羅場裏に、かゞやきたりし一點の光、誰が手になりし何の光ぞ。云はずもがな、同情の神なる女史が手のあたゝかき光なるよ。あゝ、此光を手に、白衣白帽のけだかきいでたちにて立てる姿は、いたでになやむ武夫等が目には、いかに映じけん。神か、あらぬか、はた天使か。あゝ同情の神、あゝ愛情の神。

あはれ、今や古今にまれなるシベリヤの大修羅の巷に、第二のナイチンゲールとしてあらはるゝ人や、誰れ。第二の暖き光をかゞやかす人や、たれ。

（雨評）なほもの足らぬ心地致して候。

○櫻

麴町　三木田　みどり

およそいづこの國にも、花なき里はなかるべく、また花を愛でぬ人はあらざるべし。されど、日本人ほど、花に趣味を持てる國民は、世界いづれの國にもあらざるべし。

見よ、いかに我國の詩歌が多く花を詠ぜるかを。いかに人、殊に婦人の名が、花によれる事多きかを。又、三大節も花によりて、天長節を菊花節、紀元節を梅花節、神武天皇祭を櫻花節と稱せられたる。此等二三の例によりても、日本人の花に對する趣味を知るを得べし。

我れは、凡ての花を愛す。然して、最も櫻花を愛す。こゝにいさゝか我が最愛する櫻花につきて、おもふ事どものべんとす。

我國にては、櫻を花の王と稱し、單に花としいへば、直ちに櫻を意味し、詩歌にも花といへば、まづ櫻花に定まれり。また花見といへば、櫻を見にゆくをいふ。

誠に櫻は我國の花なり。外國も同じたぐひによばるゝ花なきにしもあらねど、こは我國のとは、さま異れり。まこと我國の櫻は、世界何れの國にもあらざるなり。

いかにして櫻を好むとはゞ、我れは答へん、「我れは日本人なれば」と。まこと、櫻を好まざる日本人はあらざるなり。我國民は、古より自然にこの花を愛するなり。

見よ、その木のさまの、いかに壯美なるかを。見よ、その花の、いかに優美にして雅致あるかを。かつて詩人、

敷島の大和心を人とはゞ、朝日に匂ふ山櫻花

と詠ぜしが、誠に櫻は我が理想の花なり。美しく一時に咲き揃ふその花潔く一時にちりはつる其の花、いかに我が國人の心に似たるよ。國難ある時は、君の爲め國の爲め、死を願ひて生を顧みざるは、誠に嵐にあひてなごりなく散る櫻花に似たらずや。

今、滿洲の野に美しく咲きていさぎよく散りつゝある千葩萬葩の櫻、君見ずや、君しらずや、その櫻花。

われ、また、櫻をおもふとき、さまざまの歷史上の想ひ出多し。義家の勿來の關の歌、重盛義平の櫻樹をめぐりてたゝかひし事、兒島高德の詩その忠義など、猶さまざまの例はあるべし。

我はある國民の「櫻花は優美なれども、餘りにはかなくして、且その實もむなしからずや」といふをきゝぬ。

されど、我は、そは餘りに理屈的にして、驗を好むの言なりと、あへていふ。かの匂ひのみよくて棘ある薔薇より、また、かの椿の如く、牡丹

の如く凋みて後も猶枝にとゞまりあらんより、むしろ一時に開きて、一時に散る櫻こそ、我は好ましけれ。われ、學びやに通ふみちすがら、日々招魂社を通る度毎、いまだかつて戰死の同胞の事思はざる事なし、殊に朝日に照りそふ花を見しとき、かつて聞きし

死シテ歸レバ、九段ノ坂ヨ。忠ト勇トノ花ガ咲ク。

なる都々逸を思はず口吟さみぬ。又其の花陸に我勇敢なる同胞によりて得られたる戰利品を見しときの我が心、誰れかは知らん、櫻花をおきて。まこと日本人は櫻花のごとく、櫻花は日本人の如し。其純潔なる心、そのけだかきさま、正義の爲には命を鴻毛の輕きに比する事。我は再びいはん、わが理想の花は櫻花なりと。

○わが國人と櫻花と

埼玉縣　渡邊きく子

花の中の花としも云ふべきは、櫻なり。櫻は特にわが國土に根さし固めて、神代の昔より、春毎に匂ひ出てゝ、快活なる大和心を、更に高潔優美ならしめぬ。朝日の光うらうらとさし添ひたる、曙の霞の隙よりほのかに白うみえ初めたる、嵐と吹き過ぐる夕風に紛々と散り亂れたるなど、觀る者そもいかなる感をか起すべき。邦人由來氣象快活なり。この花に對して、いかでか無常を感ずるが如き事あるべき。又、いかでか厭世の念を起すが如き事あるべき。人或は言はんに、「夜はに嵐の吹かぬものかは」と咏歎せし人あるにあらずや、また「ありて世の中はてのうければ」と吟咏せしものあるにあらずや。と。信に然り。然れども、これ皆佛敎の傳來せし後、その思想に支配せられたるものにして、わが快活なる大和心のこの花に對して起せる感にあらざることはいふもさらなり。今やわが國人固有の元氣は、種々の思想の支配する處となりたれは、この花に對する感も、また隨ひて一樣ならざるべし。あゝ、年々歲々花相似歲々年々人不同、古人の心遂に今人の心と同きこと能はざるか。あらず、いかでか然らむ。人こそ年々同からざるべけれ、わが固有の元氣に至りては、吾人一貫、その歲々變はらざること、なほ此花の如くならむ。あはれ、國の中の國なるわが帝國に生れたる妾等は、此の後、いかなる思想浸入し來るとも、其の爲めにはわがこの固有の元氣を消磨せらるゝことなく、いよいよ奮起して　人の中の人とならんかし。しからずば、この花に對しても亦おもぶせならずや。

○自然界

靜岡縣　芙蓉女史

萬頃無涯の野を縫ふ水源は、深淵岩壁の間より溢り、天下を擬すの勢上は、山郊水村より生ず。誰れか云ふ、深山幽谷必ず龍蛇を生すと。自然は最もよく、感情あり知識ある動物を敎育す。誠に、凉風徐至、瀟月皎々たる時、蒼海の白浪礁打つ音に接せよ、平素の煩惱は釋然として開き、其の野心ある者は油然として其心湧き、其の眞心ある者は惕然として氣あがり、心志高尙、正大公明、胸中些塵の止まるなく、如何なる僞善家も心洒然として一點の慾、一分の邪念なきに至るべし。古語にも「自然を愛する人に惡なし」と。靜の晨、月の夕、木の間に彷徨するものにして、惡心を惹起する者なし。之れ、所謂自然の然らしむる所以也。

吾人は信ず、國家を興し、邦家を治むるの生命は、決して道德腐敗、名利喧擾の地に於て求むる能はず。一家を經營し、一國を料理せしむるの英靈は、紅塵萬丈の中に於て望むべからず、必ずや靜閑なる山紫水明、の境内に、之を求めざるべからざるを。嗚呼、天地の美妙、暗々裡に人を敎導する其の勢力太だ大なりと謂ふべし。

迤邐たる山嶽、潺湲たる流渓、柳烟花雲、青松白砂の長汀曲浦、或るものは淸爽、或るものは皎潔、或るものは美麗、或るものは快活、皆是れ自然と同化せしむるものにあらずして、將た何んぞや。

苟も膚下一條の血あり、眼中一粟の涙ある者にして、遠大の希望を有持し、無限の抱負あり。國家の光輝を益々燦爛たらしめんとするの士は時に鬱窓の下を去りて、此の風光明媚の間に悠遊して一世を活するの文想を養び、以て社會の木鐸となり、風氣頽壞の塲裡に氣息奄々たる人の子を救介せざるべからず、昔は林氏梅花深き所に其身を置き、神韻縹緲として遂に梅に類す、英雄一度、高嶽深潭を跋跡せば、人其英雄と高嶽深潭を辨ずる能はず、詩人一度烟景霧光を經由せば、人其詩人と烟景霧光を辨ずる能はざるべし。蓋し自然の同化、彼れと是れと倶に一致せし所以に外ならざる也、

遊べ諸子、自然の美、天然の妙に接してそが天賦の能力を發展し、胸中萬丈の紅焔をたくはへよ。天然自然なる大敎師は、汝等の來るを待つこと切なる也。

新體詩

東京女子高等師範教授尾上文學士選

天

○燕よ

出雲杵築町　岩井じん子

打寄せられし貝殻や、　春はのどけき海ぎはの、
街道わたす電線に、　蘗を啣める燕、
翼光りて露おぶは、　今か潮路を越えて來し。

戀の古巣をうしなひて、　愁ふやあはれつばくらめ、
旅に瘦せたる吾なれど、　胸をしかさむ、しばしだに、
人の世ならぬ怡樂の、　春こそあらめなが胸に。

情趣絶佳、何等の秀抜、『女子文壇』紙上、更に一少女詩人を増したるを欣ぶ。

地

○虹の歌

紀伊海草郡和佐村　木村小糸

あゝ美くしき虹の影、　薄雲かゝる遠山の、
綠を分けて空高く、　白帆流るゝ川に落つ。

虹の彩色天の弓、　染めて美くし七彩の
夕ゐる雲に天使立ちて、　希望の橋をうち渡る。

世の色くらき黃昏の、　悲嘆に沈む詩人よ、
涙はらひて空たかく、　天使のはなつ征矢を見よ。

見よ天の矢のゆくところ、　靑雲遠く晴れゆきて、
ゆふべ輝く日の影に、　大靑野原けぶるごと。

さめよ世の人雨ふくむ、　夕美くしき雲のはて、
希望の彩をふり仰ぎ、　かの天使を胸に呼べ。

所謂天女式なるものなれど、清高絶韻、虹の美くしきにふさふ。

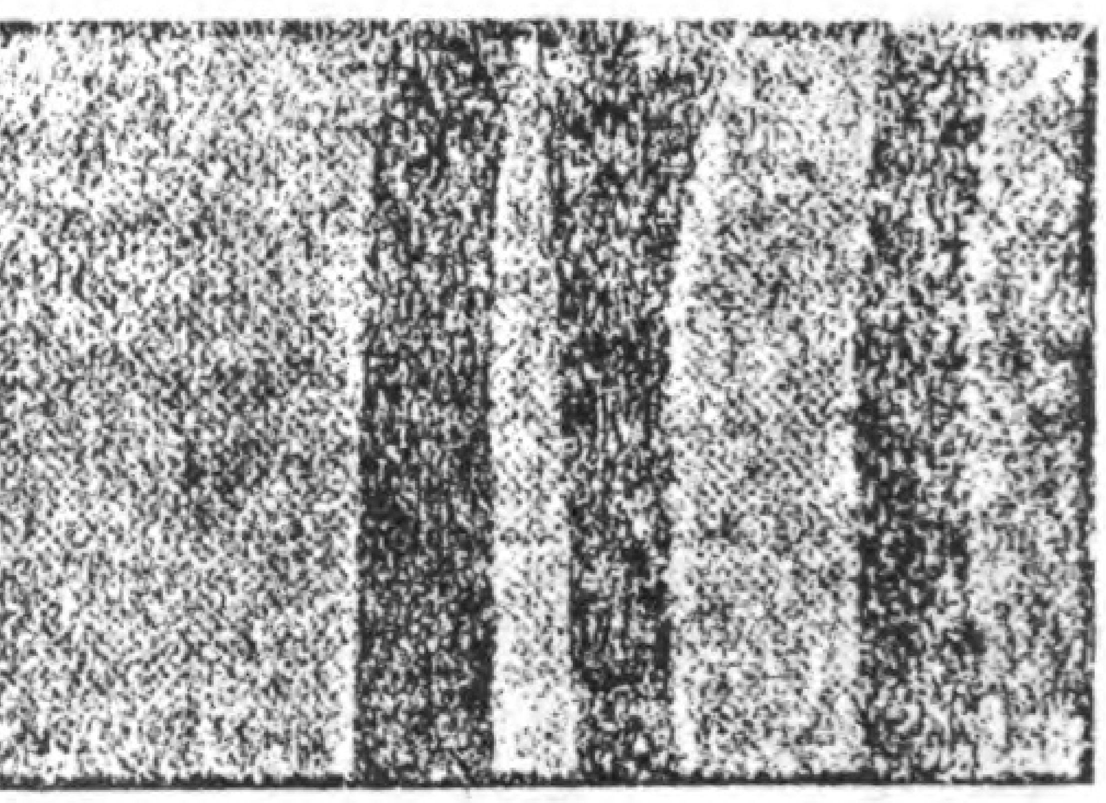
人

○我がひと日

韓國釜山港南濱町二八、伊藤屋方　池田都子

けたゝましう鷄鳴きぬ
　これぞ魔を攘ふ神の勝鬨
天地は今別るゝ氣配
　東のそら彩雲なびけ
希望にみつるあさ日影
　活動の世の幕は開く
渦巻きうづまく塵の底に
　しばし戀なく悶えなく
天帝の勅かしこみ
　罪の子と競ひ鬪ひ
有我無我に十ときのつとめ
　かくて活動の幕は閉づる。
寂寞を破りて鐘鳴りぬ
　あな美はしや理想の國
あな樂しゝや詩歌のめぐみ
　頸寒からぬ褥に入れば
やがて魂魄むくろを脱けて
　おもひ其まゝ夢より夢に

畫以外、蝶以外、此詩境あることを忘るべからず



秀逸

○春　譜

麹町　重田春子

長き袂をそと取りて、
　望むがまゝに彈けよとの
君がゑまひにさて暫し、
　首をふりて我笑みぬ。
春暮れ方の樓の上、
　すゞろ霞のおばしまに
わがひく音は夢の如、
　靜かに更くる花の夜半。
双の紅振ゆるがせて、
　肩にかけたるバイオリン
彈く手は白く聲ちさき、
　君忘れじの『愛』の曲。
おぼろにけぶる天地に、
　奇しくもふるふ絃の音よ、
我と我が手を疑へる、
　頰に散りくる花の笑。
相思のにほひ胸と胸
　情はこもる樓のうち

包むに餘るうれしさに、　あゝ彈く『愛』の春の譜よ。

東京式とも謂ふべきや、最近の或る一派の詩風を能く代表せり。

○晩春の感

上毛　西の窓

花紅の梢はも　甘き香慕ふ胡蝶はも
緩く流るゝ小川はも　今青春の習いづこ
人々花にあこがれて　世はさながらに春の宴
胡蝶の如く野に山に　醉ひて狂ひし影いづち
若き盛りの佐保姫も　時の過るに勝たざりき」
われ葉櫻の下に立ち　靜に默思に恥くるとき
前の小川によどみつゝ　花片白く漂ひぬ。

詩調も何となく行く春のかなしき調を含む。

○春野吟

能登　池野いさみ子

まだうら若き春姫の、　宮のとばりをそともれて、
吹き習ぐらん春の風、　優しう眉に泌むばかり。
菫たんぽゝ若小草、　たとへば若く綸だくみの、
彩の繪筆の痕のこと、　美はしくも咲けるかな。
詩歌にうみてつと立ちて、　坐ろ逍遙ふ春の野や、
吹きくる風のゆるふして、　美はしき夢結びよき。
空優しき淺綠、　春の譜もらすうぐひすの、
聲は何處までひゞくらん、　少さけれども花やかに。
あゝ霞濃き朝ぼらけ、　菫のはなはちさくして、
蝶ひら〳〵と下る時、　其處に詩人や生るらん。

春の詩、まことに斯くあるべし。

○夕ぐれ

兵庫　三浦久子

闇に砦を望むごと、　森は黑くも聳えたり。
靜にさしる落日の、　殘る光の白きかな。
羊追ふ子のそびらより、　夕の色はせまりきて、
鐘にくれ行く野べの色。　月まだ出てず、山うすく。
歌にかはきて詩にうゑて、　想冷き胸抱きつ、
一人靜に空戀へば、　かげなき者がさゝやくよ。
なれ才うすき人の子よ、　高き思想にあくがるな。
とはに開けじ秘事は。　ふしてたゞ行け人の世を。
神の啓示か。つと立ちて、　仰ぐみ空に月出てぬ。
彼方に灯かげ、二つ三つ。　あゝ我とはに人の子よ。

形容凡て清新の致あり。

○度守

岐阜　きよ子

青やぎの枝垂るゝいとを、　わたしもり野川の岸に、
まれに乘る人をまつまの、　手よさびに結びつ解きつ。
花浮かぶきよき流に、　影うつす山のみどりを、

ちりの世のけがれはしらぬ、たなぞこにすくひつゝありし
世はなれて氣高きすがた、一葉のふねにのせては、
つながれぬ尊きいのち、ひとふねの棹にまかせつ。
里川は流れてやまず、
歳月はめぐりて行けど、
渡守昔ながらの、
面影にあゝ若いかな。

渡守はいつも詩材として能く歌はるゝが、此の作の如きも平凡に似て實は上手。

○舞殿

信濃　安孫子美子

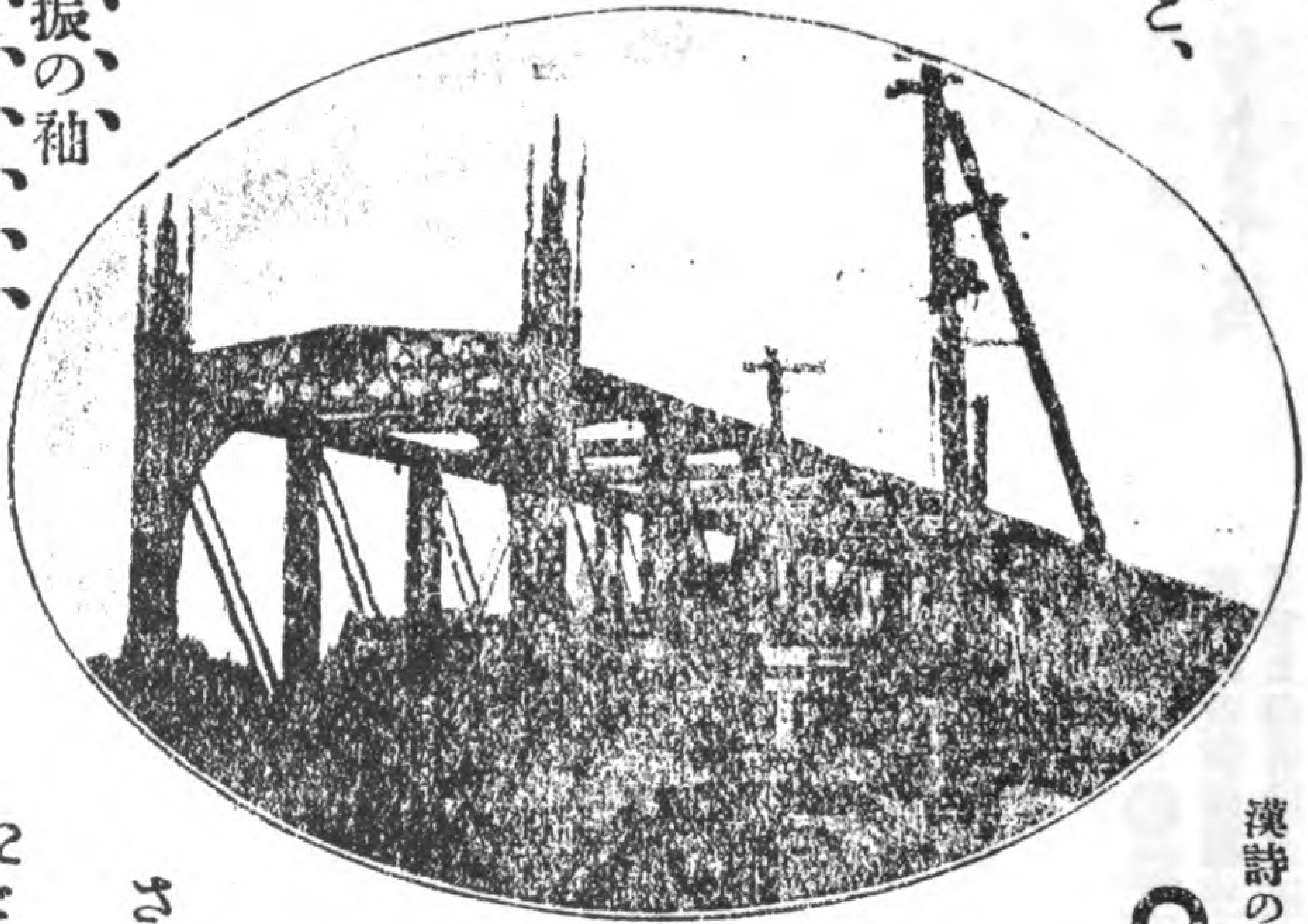
銀燭まばゆく更けわたれり
うたげに醉ひし高樓に
君が御言に小皷の
今一打に夜は明けむ

伶人、樂を奏するに
三尺長き振の袖
嫋として力なく、
「榮華」一さし舞ひまつる、

有心をなれも世に媚びて
雲流れよる曉の欄
なよび姿の舞衣に
白粉溶かす手もたゆげ、

あゝ花散りて花咲きて
大君逝きぬ人去りぬ
紅欄雨に崩れては
まばらに生ひし青草の
夢を鎖して永劫に
舞殿の春は暮れてけり

漢詩の面影あり


吾妻橋

○煩悶

長野　都築薫子

星よ菫と叫びつゝ
埒なき戀にあこがれて
夜ごと日ごとに悶へつる
嗚呼愚しきわが身かな。

妾は未だ學び舍に
敎へのまゝをいそしみて
希望の玉をみがくとき
そらあこがるる折ならず。

さ思ひながら情慾の
迫る胸先抑ゆれど
たゞよはさるゝ一葉舟
いよゝあやふきわりなさよ。

救ひの神よとく來ませ
悶ゆる吾が手をとりて
菫笑まざる野邊に行け
星なき里に導けよ。

亦一個の述懐、必ずしも詩の埒外に逐ふべきものにあらず

○なぐさめ　　大阪　田中萩雨

天の扉高う閉されて、　世は常闇の谷小徑、
光明にもれて迷ふ身の、　攀ぢんに弱き腕や。
若き額ににじむ血の、　痛手よ何の咎なりし、
涯なき虚空に彩雲趁ひて、　ならぬを戀ひし罪からぞ。
天の神秘の嚴めしく、　永遠闢き得ぬ靈の扉を、
説かん希望の崇き子が、　智惠を求めて狂ひしか。
さはれ默せる靜寂にも、　神の慰藉は罩り居て、
天路啓示すと咲く花に、　靈の誇りよ榮ありな。
闇にも開く奇花の、　妙香は天の大彩か、
なやみ發ずる偈ぞこれと、　おのづからなる額は下ぬ。

確かに詩に造詣深き人の作と見たり、只新しき詩語の並列をまなぶは必ずしも詩人の能事にあらじ。

○緋牡丹　　美濃　柴田淸美

春暮れゆきしみどり野に、　花にはぐれしてふ／＼の、
雨になやめる姿こそ、　わが身に似たるさだめなれ。
戀のもだへのありてこそ、　花に涙をそゝぎては、
なやみの生みしわが歌に　哀れながらの興得しを—。
涙も詩もかれし今日、　胸も破れんのつく息に、
室の小さきをうち佗びて、　夕べの庭にわれ立てば。
いかなる神の惠得し、　王者のごとくほこらしう、
咲きて匂へる緋牡丹に、　あゝねたましき思ひ哉。

新派詩家の心を得たるものか。

○少　女　　埼玉　渡邊きく子

まき繪の硯美はしき　蓋を貸してと妹の
乞ふまゝやがて與へしが　返さずなりぬいつまでも
蓋はと問へば蓋は猶　貸し給はれとうつむけり
母のかたみのすゞり箱　そこなはれなば何とせむ。
ある日ひそかに渠が居間　のぞいて見れば眞白なる
片頰を見せてすや／＼と　春のひる寢の罪なさよ。
蓋にはみごと紅白の　摘みたる花のうづだかく
花の底にはひとひらの　母の寫眞ぞ埋みたる。

いしくも好詩材を捉へ給ひしよ。

○織女　　紀伊　高橋嘉子

流れの音は絶ゆるとも、　あらしの聲はやむ迚も、
やまぬは賤がはたの音、　さびしき冬の山ざとに、
破れ戸の隙を通ふかせ、　更けぬる夜は身にしみて、
手足凍えんさむさにも、　厭すきぬ織る少女かな。
少女しづかに思へらく、　「去年の明日は母うへが、
永き眠りの日なりけり、　思ひまはせは早や一歳、

今宵は眠ずきぬ織りて、明日母うへのおん前に、
供ふる燭のしろとせん、手向る花をあがなはん。
病み居給へるちゝ上の、口に適はん物を得て、
心からなるまことをば、捧げまつらん明日の日に」。
かくて心をはげまして、織り行く梭の音たかく、
猿鳴くこゑぞ冴え〳〵て、夜はいつしかに更けてゆく。」

○摘草

愛知　水野スヱ子

うら〳〵あくる朝ぼらけ　吹くとしもなき朝風は
下もえ出てし若草の　葉末の露をちらしつゝ
鳴くや雲雀の聲たかし　かゝる境にもろともに
手をひきつれてこゝかしこ　心長閑に若菜摘む
其たのしさは如何ならん　聲もさやしく歌ひつゝ
胡蝶を追ひつおはれつゝ　踊るも知らで遊ぶ今日かな

○やせ馬

和歌山　やす子

片かげもなき夏の野に、渇き弱りしやせ馬の、
何かほしげにいなゝくに、おゝ株をとてなげやれは、
なさけをしらぬ飼ひ主は、いたづらすとや思ひけむ、
姿にむかひて眉をあげ、何か口にてつぶやきぬ。

○われ願くは

岡山　秀芳女史

われ願くは百合の花　試白き色に咲き出てゝ
君に摘まれて美しき　其唇にふれてみん
われ願くはばらの花　紅きつぼみと身をなして
君に折られて暖き　その柔胸に夢まなん

○鼓の主

秋田　浦井松子

櫻匂へる此夕べ　春月軒にさし入りて
書院の窓にたゝずめば　觀世が謡の小鼓か
高き調子のゆかしくも　花の木間をもれきては
曲も亂れぬ小鼓の　春にちなみのゆやの曲
姿も人も知らざれど　あらしたはしの鼓の主

○星の露

廣島　堀田温子

夕とばりを洩れ出てゝ、有情の光溢れつゝ、
輝く星のきらめきや、澄むはそれかや瑠璃の空。
風はるかより吹き下りて、星が秘めこど呼けば、
草葉に清き露の玉、星と露とは結びたり。
茂る小草の葉の上に、愛の光はうつされて、
うすむらさきの色たゝへ、生れ出てたり露の玉。
み空に光、美はしき、またゝく星に啓示あり、
下界に凝りし清らけき、しづくの露に理想あり。
嗚呼その星を仰ぎ見よ、嗚呼その露を掬びみよ、
悲哀、歡樂さま〳〵の、くしき運命を悟りなん。

○君と我

横濱　寺田光子

くれなゐ匂ふ花の園　菜匂ふ花の野邊
君と我との囁きを　知るは河邊のすみれのみ
みどり色こき里川の　清くさゝらぐ木の下に
心ときめく君と我　知るは涙の泉のみ
理想の國を夢みつゝ　自由の野邊に憧れて
同し笑み志ばし君と我　終に消えざるこの思ひ

○小猿のなげき

備前　松本もと

深山の奥の木の間に、生れし我は幸うすく
寛よりも怖き人の手に　日ごと呵責の鞭うたれ
四や東とさまよふて　身なれぬ藝の苦しやな
甘き餌食に飽くとても　寒からぬ床に眠るとも
生ひし山こそ戀しけれ　山に木の實の甘きあり
山に清水の清きあり。

○通り雨

埼玉　伊東なか子

車軸を流しふる雨を、蝙蝠傘にさけかれて、
にげ込む軒の玉すだれ、通して見ゆるたをやめの、
かなづる妙の琴の音に、心うばゝれふとみれば、
あなたの空に鮮かに、斜にかゝる虹のはし。

○菜の花

愛媛　天野八重子

菜の花の色や何、あやうげに翼ひろげて、
白き蝶さゝやくは何、春神の御命のまゝに、
菜の花に口僻するよ。

○雲雀

茨城　滑川止米子

雲の宮居に舞びのぼり、天女と舞を競ひつゝ、
暮るるも知らて歌ふなる、汝のこころの清きかな。
黄なる菜種に青き麥、汝が雲間に歌ふとき、
畑をたがやす少女子が、日々のつかれをわするらむ。
峠にやすらふ旅人も、なれがやさしきしらべには、
つかれし足を癒さなむ、

○春の夕

豊後　家原なか子

乳房ふくめるちこのごと　静にねむる大空の
うす紫にそみゆきて　血潮ときゆる西の空。
黄金の光りおさまりて　野は沈默にかへりけり
花の香こめし夜の風は　絃おのづとひゞかしむ。
たまたま直き額わけて　星なみ空に仰ぐとき
その星のごと高絜うして　清き一人を偲ぶなり。

○幽居

尾張　春水

さゝら川水さらさらと、なにを頼みて流れゆく。
はやしの小鳥おのづから、何を求めて鳴きめぐる。
愁憂多き現し世は、靜けかるこそ樂しけれ。
ひと足うとき山もとの、おりゐる雲のそが中に、
かすかに烟るわら家こそ、塵にましらぬ我すまゐなれ。

○春野の稚子

本郷　齋藤ぬい子

若菜つむ利根のほとりの　春の野に、
二ッの白き蝶とびて　菜の花輕く手ににぎり
草の香にすやすやと　無心にねぶる緑り子よ
何か夢むか眞紅なる　唇、笑みを表はしぬ
日はうらゝかに峰とびて　利根の白帆は霞みけり、

○古宮

四谷　立花道子

里のうなひも近よらず、聞けば幽魂迷ふてふ、
草刈るおぢも休らはず、きけば鬼の氣にうたふてふ、
珠と飾りし大いらか、碎けて落ちて草深く、
嚴然閉ぢし戸びらさへ、はかなく朽ちて螢飛ぶ、
汀の芦荻亂るれは、池の水草の影沈む、
春萬紅の花もなく、秋錦繍の氣も見えず、
只颯々の風の聲、往古語るや此ゆふべ、
只蕭々の雨の音　往古語るやこの夕べ、

○百合

宮城縣　保志とし子

ゆかしき花の　歩々にひらき
奇しき香りは　谷にみてり
妙なるしらべは　流るゝ水か
優しき小鳥か　木の間がくれ
飛びこう羽音の　靜かなるよ
中に咲き出し　百合の一本
いと美しふ　匂ひ渡りて
清き姿を　葉がくれに
人里遠く　はなれては
鄙の子らにも　手折られず
幾年か　谷の花園に
咲き出てゝは　ひとり萎む

○夕の祈

常陸　かつら女史

虹の輪、空に消え行きて、彩雲西にたなびけば、
終焉のいのり祈る如く、たそがれ、鐘にうなだるゝ
此時天つ御ん宮の、彩の帳をそと捲けは、
馬把をすてゝ若人も、少女も老も幼子も、
ふりあほきつゝたなそこを、正しき額に押しあてつ、
神を稱ふる姿こそ、まことと聖なる繪のすがた、

○藻の花

草にあふれて湧き出づる
清き姿をうつしてし
止めし名殘の戀しき
皐月の空に影うつる
靜にすめる水ぞここに
清き極みよ塵の世に

○露

ゆかりの色の紫の。
とはの情としたひては。
運命も、知らて、ほゝ笑つ。
果敢なき、いのち、なつかしと。
もすそに、くだく、草露の。
あゝ一すじに、君を思ふ。

○白百合

いとすさまじき谷川の
一本たてる白百合の
戀しきあまり手折るべく
見ればいまはし花陰に
己が願ははかなくも
されど向ふの岸に咲く

○虹

かぎりもあらぬ大空に、
北より南にそりかゝる、
遊ぶは天津をとめらか。

○蝶

花散りはてゝ青草を
眠る胡蝶の夢路をば

○夏の夕

三河　はくきむ女

森の泉の水の面に
君いづちにか行きにけむ
汀に伏せばそゞろにも
蟹の一すじ葉をわたる
ゆらぐは魂かほの白く
ひたひけに浮く藻の花や、

大阪　露香女史

花にかくれし露の子を。
雨にくづるゝ、緋牡丹の。
殘の花におく露の。
夢の花野を、さすらひて。
さだめも知らて、一すじに。
これや、この世の戀かそも。

上毛　いくさ

向ふ岸なる岩陰に
花の姿の艶やかさ
裳裾かゝげて渡らんと
白き蛇こそ眠りたれ
さまだけられぬ白蛇に
百合は我手にいつか手折らむ

富山縣　田中きよ子

輝き奇しき色たへに
虹ぞまことの神はしか

常陸　川並　鶴子女史

褥となして露まくら
如何なる神の誘ふらむ

志摩　君代女史

一人思にたへかれて、
さまよふまにも水は行き
其一聲に暮れ初めて

○夜汽車の音

夜汽車の響なつかしく、
若き盛を東京の、
夜な／＼響く汽車の音に、
今は却つてうらうへに、

○招魂祭

あやに貴き大君の
戴きまつりて勇ましき
君は戰の庭に伏し
今日しも君が靈魂を
亡君が紀念の幼子は
光榮ある手向の香を捧げ
折しも空に湧きいづる
山の裾より吹きさきたる
並ゐる人は默しつゝ
靈を抱きぬ袖の上

○兵士の妻

星は點々空にあり、
北風寒き此夜頃、
如何なるゆめや結ぶらむ、
針を手にする窓の內、
あるは子を守る夕ぐれも、
思はぬ時とてなかりけり、
空ゆく雁よ心あらば、
あゝいかなればかくばかり、
君のゆめぢやいかにかと、

○噴　水

立神川の橋の上
雲は流るゝ時鳥
鐘の響ぞ殘るなる

大和　みどり

過し昔のしのばるゝ、
學びの庭にありし時、
そゞろ想ひし故鄕の、
東戀しき夜汽車の響。

福岡　片岡文子

あやにかしこき大宣
門出をなしゝ君はしも
血汐の閨に永眠けり
我同胞の慰むる
小さき手をば差しのべて
首垂つゝぞ見送りぬ
雲に淋しき韶きあり
風に悲しき調べあり
息をも忍び音を秘めて
靈よ亡き君知るや君

群馬　狩野蘆淚

月は皎々地をてらす、
草をしとれにつゝ枕、
くつわを肩にす路すがら、
我背の君の身の上を、
彼の地の君につたへてよ、
妾に物を思はする、

相州　內野すゞ子

池の眞中に噴き出ずる、　水は園生の松よりも
なほいや高く昇るなり、　水はなびきぬ吹く風に
霧となりては汀なる、　たゞずむ人の袖ぬらし
雨となりては築山の、　そてつの葉にやそゝぐなる

山口　原　まさよ

○春の夜

みそらにかすむ月かげの、　塵をよそなるさま見れば、
罪ある吾のはづかしく、　木の下かげに立よりて、
むかしをしのぶ袖の上の、　露に光のおつるとき、
我は眠りに誘られど、　愛あたゝかき床のうち、
人ま靜けくやすらけく、　ゆめむすぶらん春の夜。

長崎　林田滋枝

○春　風

花のかをりを傳へ來て、　家の中まで匂ふなり、
長閑にうたふ鳥の音も、　誘ひ來るなり春の風、
居ながら野山の心地して、　こゝろ樂しくなりにけり、
賤が伏屋の春の風、

野州　五味きん作

○濱の眞砂

濱の眞砂の磯づたひ、　夢をとりて佇ずめば、
岸うつ浪の音たかく、　汐かぜつよく千鳥啼く、
あゝ我が戀ひし少女らや、　はじき友らや今いづこ、
磯吹く風と白浪の、　よせては返す音ばかり。

安藝　中村東雲子

○花

平和輝く詩の國に、　あや織り亂る野の花や、
匂は高く色清く、　吾世樂しき榮はあり。
晨靜かに浮きいづる、　霙の粲か露の玉、
花の懷出づる時、　如何に光の尊きよ、
天に理想の光みち、　地に歡樂の花は咲く、
罪とけがれにもだゆる子、　暫しだに聞け花のさゝやき。

秋田　松田せい子

○孤　兒

晝は木蔭を宿として、　夜は軒端に露しのぐ
食は戀しくなりぬるも、　求めんすべもあらなくに
垢はだえにつもるとも　洗ひ清めんときもなし
つゞれし衣は一重にて　笹吹く風も吹き通ふ
親もなく又た家もなく　便ると云ふは人の門

徳島　住友とき

○野　遊

岸の野花の香うかべ、　ゆるう流れるさゝ川や、
何をさゝやくせゝらぎの、　妙なる琴のしらべして。
みどりにけむる青柳は、　春の女神がたもとより、
吹き來る風にやさしくも、　みだれて寫す水かゞみ。
はるかにかすむ山なみの、　とほく麓に咲きつゞく、
花の木蔭にをと女子が、　うたふは何ぞふし長く。
空にはたかく揚雲雀、　こゑうらゝかに囀れば、
魂もかすみの奥ふかく、　引かれて遠き思ひかな。

秋田　今立いま子

○すみれ

ひばりなく野に、　すみれ花
つむべき程にぞ、　なりにける
いざ〳〵來れ、　我が友よ」
草葉わけつゝ、　露ながら、
庭もせにさく、　すみれ草、
眞袖につまん、　諸共に」
あなうるはしや、　こむらさき、
あな氣高きや、　濃むらさき、
色もむつまじ、　榮えよや」

岩代　服部貞子

○牡丹殿

齋静かなる高殿の、　朱塗りの欄に窮りまして、
姫君牡丹見そなはす、　侍女の五人の口々に、
紅の一片ふくませつゝ、　纖手に輕ゥみ手拍子、
胡蝶の舞に興じます、



叙事文

日本女子大學教授　櫻井文學士選

地

○東山紀行

神奈川縣都筑郡新田村新羽　中村三重子

毎日降り續いた春雨の、今日は珍らしくも、名殘りなく晴れ渡つて、見渡すかぎり、露は、緑野にみちて、希望の光りあふるゝ若葉には、一點の塵もなく、野路の眺めの心地よさは、中々拙筆にてつくされない。今日は丁度日曜日、どうして空しく薄暗い一室に此の日を過ごされ樣、同行が無くても仕方がない、今から獨りで東山の櫻を見て來やうと決心したのは、實に四月の十八日である。

其の時、一人の友人が尋ねて來て、丁度云ひ合せた樣に、「東山の櫻はどう?」と云ふので、妾は大得意になり、「今からつれ無くても行かうと思つてたのよ」と云へば、「それてはすぐ」と云ふので、二人は午頃草の庵を出懸けた。足元から續く菜の花に狹められた細道をたどつて行くと、いつか里川の堤へ出て。芝生の上に花束の落ちてあるは、花摘む少女が捨てたのであらうか、道の傍に鎌のあるは、草刈る童が置き忘れたのであらうか、などゝ思うと、大俗の妾も、徐ろに浮世をはなれた氣になり「腰折の一つもやりたくなつてよ」と云へば、友の愛子はおほほとけなすを、自分は一心に自慢の俳句を初めた。新羽から小三町も行くと、小机と云ふ、町といふ程でもないが、一寸した通りが有る。それを模樣に貫いて、又一面田畑の世界へ出た今度は蝶が菜畑からとび出して、二人の案内者となつた。心愈愉快に、足ます〱進み、知れる限りの唱歌を歌ひ悉した頃、漸く東山の麓へ着いた。實に今は自分の想像とは大に異つて、風もないのに、絶えずはらはらと散つて居る其樣は、又一入て、何とも云へない心地がする。少し右の方に、大きな池があつて、其水が輕風に驚かされて、漣岸を洗ふ序に、一面に浮いて居る花片を、載せては引き去り、又持て來る抔、眞に一幅の畵で、二人は畵中の人物の樣な想がした。此日は見物の人も殊に多く、此方には、愛らしい少女の、落花をかき集めては、まき散らしてるのもあれば、風

雅な老人が、月に瓢簞を懸けてるかと思ふと、叉下の方には、海老茶式部が手を引き合つて居るのもある。二人は其處此處と逍遙つて居る内、春の日永も早暮れんとして、花の梢に懸りたる朧月の影は、到底妾の筆て形容は出來ぬ。二人は暫く、木の下蔭を去るにさられず、遂に月見を約して歸途についた。並木松の影は暗く、藍黑で隈とつた畵の樣に見える。天は清く、地は靜かで、實に此の廣い渺茫たる景色は、妾等二人の自由に任せて居るのではあるまいかと思つた。いよいよ家に着いたのは八時半。不相變の四疊半が、俄に狹くなつた樣な思がした。

（雨評）筆に元氣の心地よきものあり。また、才氣の愛すべきものあり天とす。

地

○幼兒

兵庫縣明石東魚町四七　三浦久子

咲き亂れた櫻の木蔭、搖籃に可愛い幼兒がすや〱と……。うら〱かな春日は、弱い暖い光を顏に與へて淡い〱陽炎が……。雪の樣な白フランネルに包まれて、配合の好いとき色レースの涎掛、其の中に眠る靜かな顏。女だからか、否、どこやらに見える凛としたけはひ、やはり男の兒だらう。爾やかな羽二重の頰は林檎の樣に、閉ぢた眼、小羊の和いまなざしを包んで居るのだらう。雪中の紅梅に似た口からもれる寢息しづかに、今にも笑ひ出さんけはひ。

根元に眠つて居た美しい洋犬、足音に耳引き立て、我れを熟視する事しばし。やがて安心した樣に、幼い主人の寢顏を見やつて、再び耳をたれ、目を閉ぢた、顏を前足にのせた。ねむつてるのだらうか。

白い蝶一つ、菫のあたりを彷徨つて居たが、いつしか幼兒の胸にとまつた。丁度、神の使命をさゝやき傳へる樣に、何を夢見てか、微かな笑がほのかに……。

小鳥の折々囀る聲に、洋犬は物憂さう、微かに眼を開いて、耳をそば立てた。あゝ、靜かな晝。

のどかな春風が櫻の枝をゆつたので、花びらが無心の寢顏に二つ三つ。小さな拳が、僅かに動いた。つゞいて、身を一ゆすり、手のおもちや、すべつてガラ〱蝶は飛んでしまつた。洋犬は立ち上つた。無心の寢顏は何平かに、まるで聖き美しい神の宿つて居られる樣に。

（雨評）可愛げなる幼兒のさま、誠に美しう描かれたるかな。筆にやゝ幼きところもあれど、それは、題の幼兒のとがにして、地とす。

人

○籾あげ

秋田縣仙北郡金澤町小原方　大越幹子

まだきに起きて、曉の星や、涼しい朝風を浴びながら緑色てきた千草の露をふみしだいて、妾は今し妹とたつた二人、秀でたる麥の中を、白地の手拭もて頰かんむりして、かはる〳〵追分節を謠うて行く。

やがて、蛙ががは〳〵とないて、目もはる〳〵の青田に來ると、こゝになつかしい妹と別れて、各々に畔を傳うて、昨晩漬けておいた籾を、手探りしてすくひあぐると、水がちよろ〳〵と田に注ぎ落ちて、泥鰌は籾の中に、はた〳〵とはねてゐるので、それが誠に小氣味よい。

東雲の空が、白う、うす紅う、染められた頃には、はや妾も妹も、再び同じくなつて、元來た麥の中を、うねり〳〵と戻る。妾の天平棒には籾が凡て九つ、妹のには凡て七つ、中には泥鰌が幾疋入つてゐるか、それは、家へいつてからのお樂みぐさ。

こゝかしこの百姓の家よりは、ふとく細く三筋四筋烟ものぼりて見ゆれば、家にても母上が朝餉の仕末をなさつてゐなさるだらうと、妹と共に家路を急ぐ頃には草刈りの歌も聞ゆれば、馬のいなゝきもすれば、野寺の鐘の音などもひゞいてきて、世は刻一刻に賑かになつてくる。

この様に妾等二人は、毎朝心をそろへて、籾あげにゆくので、それは〳〵、實に言ふに言はれぬ面白みがある。塵をはなれた奇麗な神世の風景を、毎朝ほしいまゝに眺められるし、おいしい泥鰌汁を毎日食べられ、その上、赤い帶や羽織などを、母上の細腕にかゝらないで、容易に買ひ求められる。

（雨評）ホンにゆかしげなる籾あげ、評者も一度はお伴致したき心地致し候。人とす。

秀逸

○卒業

備前御津郡石井村島田　松本茂登

八年の月日は早かりき。赤き毛糸の羽織の紐に、中の

くぼみたる硯持ちて、父上に連れられ村の學校に入りたるは、近頃のやうに覺ゆるに、髮徒らに長くのびて今日は目出たくも、八年の學び終へて卒業式に連ることゝなりぬ。一度の落第さへせぬのみか、恥しながら優等生の列にも加へられぬ。されど、妾は最早、再びもの學び得ぬなり。友のなつ子さま、よし子さまなどは、女學校へ入らせ給ふとの事、羨ましくもあれど、家のことゞも思へば、八年の永き間敎へ授け給ひし、父上のみ慈けの有り難や。いかでこの上の敎へ受けんこと望まんや。

さるにても、八年の月日は早かりき。今日限りにて、師の君の御顏も拜し得ず、學校の庭も踏み得じ、敎室にも入り得ぬなり。鞠つきて遊びたる柳のかげに立ちては、感慨之を久うし、共々に唱歌歌ひたる室に入りては、なづかしさに堪へず。

鐘鳴りぬ。列びて式場に入れば、正面、國旗の下に、綻びかけし山櫻の一枝瓶にさゝれて、そが側には、高く賞品のつみ上げられたり。右に村長、學務委員等の來賓居並び、左に校長はじめ六人の師の君立たせ給ふ後には、袴の裾高さ、リボン美しき妹たちの並びてあり。校長靜かに立ちて（過去の成績、將來の心得のかずくを、靜かに語らせ給ひ、續いて、來賓の祝辭、在校生總代の祝辭、卒業生總代の答辭ありて、二十一人の卒業生に證書は授けられぬ。やがて、二百餘の弟妹の口より「螢の光窓の雪」と靜かにくゝ唱ひ出されぬ。あゝ、愛らしの聲、淋しの聲、去年まで何心なく妾も唱ひたるに、今其聲の悲しきことよ。社會てふ怖ろしき大海に、今出でんとして、送らるゝ歌、嬉しきが如く、悲しきが如く、二十一人寂として、眼に露を宿さぬものなかりき。

式は終りぬ。一室に入りて在れば、校長美しの髯ひねりながら、永の年月、子の如く愛でゝ育てし汝たち、今日世に放つとなりぬ。思ふに、社會の大海は浪いと高くして、時に颶風もあらむ、時には暴雨もあらむ。今迄敎へたる敎を羅針盤として、花咲く彼岸に着けよ暇もあらば遊びにもこよとの給ひて、淚ぐみ給へり。一言一語みな胸にこたへて、何言はんとして得云はずされば、師の君さきくておはせとばかり、室を出でぬ校庭の櫻笑はんとして、未だ笑はず、硝子窓に夕日さして、淋しや。

（雨評）　文整ひ、情景も一通りきこえたり。

○海邊の夕暮

落花一片

福島縣

ありとばかりの風が、枝垂れ柳をゆら〳〵と吹き、日はもう餘程西の空に淀んで、菜畝の黄波静かに、あたり飛び交ふ蝶の影も見えなくなつた、平野を隔てゝ遠く霞の裡に聳えて居る湯の嶽は、空と山、同じ色にまぎれて、どれがどうだか識別がつかなかつたが今は沈む名殘りの光に、山の秘密も暴露されて、森や、岩石や、谿やが分明となつた。其れも暫時で、峯を彷徨ふ紫淡き夕雲が見えてからは、それに美しい〳〵薔薇色を呈し、刻一刻と濃艶の度を增して、あたりの空一面、さつと流す臙脂の色鮮かに、せゝらぎゆかしう流れゆく小川の水の深碧に映ぜしも、やがていつとよりともなく、次第にせまる夜衾のためにあせ行きて、夕榮も漸く納まつた。妾は今は此の平和なる夕暮の神が慰藉の懐ろに抱かれて、超然俗を脱し、意志の羈絆を逃れ、現實を遠ざかり、芳薫限りなき高き理想の香に醉はむと、徐ろ宿を立ち出でゝ、ちよろ〳〵と小波打ちよする小名濱浦を、緒つたひにぶらついた空を仰げば、此の世を掩ひ行く夜の神が御袖を洩れて夜の平和を護るべくや、一點二點又三點次第に見初むる新星の光、彼方の岬を眺むれば、今宵まとゐの膳を照すべくや、淡々輝く漁村の燈。さては、閃々螢火の如く、波間に瞬く漁火三ッ四ッ、實に造化の神華に成れる有形詩篇、我が心は早や化して仙となつた。



静に耳をすませば、澎湃として磯邊に寄する漣波の皷、蕭々秘曲を奏づる磯松の琴、餘韻嫋々として遠く消え行く遠寺の鐘、波にゆられてゆかしく聞ゆる欵乃の聲、實に天が靈筆を揮へる有聲畫幅、心は再化して神となつた。うち出でならぬ思ひになやむ身の憂さは、いづちともなく消え失せて、不識我は汀をあてどもなく彷徨ふの

であつた。折しも

蝶よ花よと年月待ちる……
いつかあたまにつもるゆき

さも心地よささうに、節おもしろく、ひな唄を歌つて行くは、躍りをいそぐ馬方であらう、いと靜まり返つた夕暮松の木間からもれて、遠く／＼消えて行つた。

（選評）忠實苦心、文に熱心なる人の心がけ見えて、ゆかし。

○櫻狩

横濱　光子

花園家では、今日七十七の祖母樣の御祝をするといふので、上を下へのさわぎである。

朝から晴れやかな春の日は、さらでも美しい花園家の大廣間に、長閑かな靜やかな光りが漂つてゐる。

床の間には、緑色濃き松をいけ、掛物は鶴龜の美しいもの、何一つとして目を引かぬものはない。

障子は皆開かれてゐるので、庭が眞面に眺めが美しい櫻は風もないのに、はら／＼と、池の面に散りかゝつて、繪のやう。

祖母樣とよばれる方は、白髮の品のいゝ、やさしい御顏に、たへられないやうな笑みを浮べて、若々しい白赤黑の三枚重ねふき厚う。客人は美しい奥樣、羽織袴の紳士など居列んで居る。

「孃は何うしましたか」祖母の君が言ひもあへず、襖は開かれて、此家の令孃は靜に入つて來たので、客人は皆等しく目を見はつたのである、

三人の姉妹の君は、同じやうに美しい中で、上なる君は、少し低やかな丸髷に、透き通るやうな艶々しい御顏、少し御目のつれてゐるので、一際氣品高く、犯しがたい色が見へる。黑に白との重ね着に、白茶の丸帶高う。此君はもう梅園の夫人となられた方。中の君は御召物は上の君と對のを、御髮は高々と大きやかな丸髷。あゝまで白い御顏の目元涼しい君。此君も去年の春、桃園家に御婚入になつた方。末なる君、祖母君のいとしがらせ給ふ。此君は、少しはおちひたる御顏に文金の高島田根高う。こぼれるやうな豐よかな頰に、笑みをたゝへて、小豆色の御召物に、たてやのじ大きう。

「琴を早く持て來」と、母君の御聲に、小琴は列べられた。三人の君は琴に向つて、姉君のみ聲につれて、調べ合す妙なる其音は、丁度天使の音樂ともたとへやうか。

やがて、櫻狩の一曲は、節面白く彈き終つたのである

「オ、御苦勞〳〵」と、祖母君はうれしさう。客人からは感謝の聲が聞えたのである。

三人の君はやゝ、上氣した御面に、設の席につかれた。折柄蝶二つ何處からともなく舞つて來たと思ふと、末なる姫の袂をかすめて、又庭へとび去つた。

酒宴は開かれた、て目出度今日の喜の字の祝を終つたのである。

二三日たつてから、末の君も亦、藤園家の若君と結婚の約がとゝのつたのである。

姫は今更に、かの日を思ひ起して黙れたが、何思つてか、美くしく微笑まれたといふのである。

（西評）先づめでたし〳〵と申さんか。

○春の女神

相州鎌倉　磯崎あさ子

雄々しき冬の男神、疾く其の征衣を收め玉へば、奇しき白雲の一片、二片、らうたき日影にふつくりと、小暗き迄に茂り合ひし神木の梢にかゝれば、あたり只寂として、夜行く人の微けき足音程の音も聞えざる千仭の断崖、上平かに柔かき草生ひ生れり。

遙に看やる南の方、一刷毛に描きし苔とも見るべき山々の峽より流れ出づる溪川の、二つ三つ集りて廣き野をうねり行く、其の川下の僅に光れるをも指し得べし點々たる村、平和にこもる人家の幾群をも望み得べし云ひしらぬ香、譬ば甚に渦卷く清き香の、いみじう人を酔はすよ、と見る間もあらせず、忽ち湧き起る奇しき望春の神の曲、妙へなる響の、深山の微翠に木響すれば、紫の幌りは垂れて、薄紅の羽衣輕う、綵綾のみ裳長う、そと渡る薫風に綵遊と靡せて、今下りたゝすあやにかしこき、くはし女神の一柱。

女神は、軈て生絹の扇振り翳しつ。

『香は居ずや、露は如何にせし？』と息吹きうるはしく呼び立て玉へば『應！』と答へて、御前に跪く美しき神の子二人、白羽負ひしは露、黄なるは香とぞ呼ぶなる。

『今ぞ下界に春の望みの草々を植ゑん、露よ、香よ、植うべきものをや用意したる？』

女神、山吹の一枝をとりて立ち給へば、香は、眼もあやなる花籠を、露は、さゝやかなる銀壺を、提げて抱きて、羽風輕う、女神の後を遙か麓の方へ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

若々しき野の氣吹に眼醒めたる野守一人、綠淺き春の

花野に、暖き日の光うけつゝ、ほろ〳〵とちり行く露の姿に、いしうも驚きの眼をみはりぬ。

（雨評）何にとなう氣高げなるふしの感ぜらるゝは、題の「春の女神」との故のみにもあらざるべし。

○夏の夕暮

愛知縣中島郡豐田村西溝口　平野俊

夏の夕暮に、ひとり後ろの小山に上り見れば、太陽は地平線上三四尺許の所に、眞紅に輝きてかゝれり、我が村には、夕煙一面にたちこめて、あたりの山々、遠紫にかすめり。夕風そよ〳〵と柳の葉を動かし、蛙はしきりに早苗の中に鳴く。馬は半腹を夕日に照らされてかなたの堤の下に草を喰ひ、農夫は鍬を肩にし、鼻うた唄ひながら、夕霧の中に入りぬ。沼の上には、あしはらの下より己が足下迄、金色の橋かゝれり。漁夫は今柳の下に舟をつけぬ。籠の中をのぞけば、鮮魚潑剌たり。暗澹たる雲は、次第に太陽をつゝみ、今や全く掩ひ隠しぬ。紅の橋はそれと共に消え、漁夫は既に見えず。風は止み、蛙の聲も消えぬ。馬はいつしかひき去られぬ。今は早、家も山も柳も舟も、只だ一つの黒塊となり、沼の色は濃き鼠色を呈し、西の空も色さめて夜はいよ〳〵來たらむとするとき、三宅のあたり、燈火二三點、清音寺の鐘は、この靜かなる沼を、或は高く或は低くおとづれゆく。

（雨評）あつさりとしたるところに味ひあり。

○初夏の一日

越後長岡町　前崎照子

とふ人もなき山住の庵も、日毎に繁る青葉の色、山時鳥の初音に、あかざりし春の夢、遂に〳〵さまされぬ庭の面見渡せば、扨も〳〵、變り果たるもの哉。我がめでしみぎはの藤波、いつしかうつろひて、今は名殘も留めず、小波靜によする池の面には、あやめの花のこゝに二つ、かしこに三つと、見るから涼しげなる、白、扨は、ゆかり色こき紫など、青々と美しき葉陰に咲そめたるに、やどれるは露か、玉か、其の清らかさ貫き留まほしきやうにて、八橋そのならねども、中々に、捨がたき風情あり。七重に八重に、山吹のさきみちたりし垣根の邊、時ならぬ雷かと斗り、夏しり顔にも咲き出でたる、この卯の花の、今年は、中々に思ひ出て多き事よ。去年、世になき人となりし、我が無二の友は、人しれぬ悲しき

運命の中に、年頃過しゐたりしが、そが慰藉者たりしは、わらはとこの卯の花となりき。友は、いつもわらはに、「見給へ、この清く美しきを。わらはゝ櫻のゑんなるより懷かしきはうの花と云ふ名の、又ゆかしからずや。世の人心も、かく清くあらんには、わらはが、この悲みもなきものを」と、花見つめつゝいはれし事幾度なりしか。友のはかなくなりしは、この花の雪と降りそむる頃なりしよ。友をしれる誰れ彼れ、一人として惜まぬ者なかりしが、わらはのみはかへりて悶えつゝ、ながらへてあらんより、いか斗り心安うおはせんと、悲しき中にも、我れと我が心を慰め居たり。一點の汚れなき友、今頃は、彼の國人ならんには、エデンの花園に好める卯の花を、心のまゝにめでゝや在はせん、恐ろしき人のかゝる思ひもなければ。

折しも折戸の方にて、人の音なふ聲するに、立ち出て見れば、なき友の妹なる君子の君なり。佛への手向に卯の花一枝たまはりたしといひ給ふに、直によきをえりて、二枝三枝手折りつゝ、今年、この花の手向にならんとは思はざりしがと、何心なくいへば、君は、早涙にむせびつゝ、わらはをして思ひのまゝ泣くを、免し給へ。たゞ一人の姉に別れしよりの心細さ、なにはのよしあしにつけ、悲しきとのみにて、樂しきとはたえてなく、誘はれし花見にも、ゆかざりきなどゝいひつゝ、よゝと斗り泣き給ふに、あしきといひけりと、悔ゆれど、せんなし。なだめつ、すかしつ、やう／＼にして、涙をさめ給ひければ、日暮れぬまにと、折戸口まで送りまゐらすれば、あと見返りながら、家路をさしてゆかせ給ふ。其の後姿の、なき友にやとあやしう胸とゞろきぬ。いかにはらからとはいへ、よくも似通ひ給へる事よ。なれど、姉上の不幸には、似させ給はぬやうにと、思ふうちにも、おつるは涙の一滴。

あゝ、もし君子の君の、姉上がつらき思ひにたへて、つひにはかなくならせ給ひきとしりまさば、この上、いく重悲しませ給ふならん。いな狂ひに狂ひて、つひには、姉上のあとおひ給ふもしれず。妹へは、わらはがなき後も、この事は、必ず／＼しらしめ給ふなと、重きかしらをもたげつゝ、いひのこし給ひしも、とはりなるよなとゞ、又もや臨終の折りの事ともくりかへしつゝ、折戸をしめんとする折、かの垣根のあたりの空にて、ほとゝぎすの一聲、さながら胸に針うたるゝやう、あはれ血になく思ひとは、かゝるをやいふならんか。

（雨評）心づくしの夏の一日、苦心のほどは見え申して候。

○外凪

山口縣豐浦郡豐西中村　村田節子

荒れ荒れし昨日の横雲、名殘りなく晴れて、今日は稀れなる夕凪の、松風淸きのどけさよ。玉藻の香りは、輕う袖を撫て丶、賤が苦家に網干せる漁夫の、高らかなる舟歌もおかしう、もれて聞ゆ、水か、空か、空か水か、漫々たる玄海洋の潮水は、天女のかざす羽衣ともまがふ夕榮の、光を浴びて、恰も金波銀波と漲るなりき。一帶の白砂靑松は、金線に射られて、さながら乙女の恥らふが如く、いにし昔の三保の松原それならて、羽衣今は、松半分に霞みなん計りなり、さらさらと、小波は音低く、弓なりの濱邊に、寄せては返す自然の小琴の、音色しめやかに、憂さに惱める人の子の結ぼれ糸も解けぬらし。夢より夢に入るが如き、戎祉の石鳥居より、磯馴松の下かけて、三々五々海士の子の、脛も露はに、立貝拾ふも、ほの見えて、天涯一望繪ならざるはなく、詩趣ならざるはなし。水上に躍る魚の一跳、あなやと見る間に、鷗の幾群、四、五、波上低く、飛んで掠めて、夢さながらの、霞に消えぬ、あな面白の今の樣や。仰ぎ見れば、早六連島に燈火瞬き、蓋覆島、其他の島山眠れるが如く、霞深うして、夜色は我かイむ足下に、其の黑影を拋つなりき、夕凪に、と渡るあまの小船は、渚近うこぎ寄せて、早おり立つ漁夫の、二人三人、獲物多きに浮かれげん、家路に向ふ足も躍るめり、あはれ、浪上一片の漁舟に棹さして、憂きを外の生活は、掬び來つて餘情深し、ふと心付けば星影點々、陸も家も墨繪の樣、山は默し春潮語らずして、無言の中に、斯くて靜かに、靜かに暮れて行く此の蕭條たる夕よ、いざ家には妹の待てるあり、暮れての後の沈靜に、醉ひぬる心打さまして、歸らなん哉、歸りて今日の櫻貝を、妹に與へて、ばらと輝くほゝ笑に、我も打ち笑まん哉、

（雨評）多少の文才は見ゆれど、筆のなほ錬熟を缺くものあり

○春の夕暮

鳥取市銀冶五町七　上山千重子

「姉樣！姉樣！」と、せはしい聲が、植込みの彼方に響いて、「ヤー、見つけた、お池のそばに居るよ、ソレーツ」と、太い勇しい弟の聲。前者を霞陰れにうたふ雲雀とせば、後者は古木に來なく四十雀か。バタバタ足

駄の音、ハッ〳〵と呼吸はづましながら、姉様とばかり双袖にまつはる、今しも暮れて行く池の畔、サッ〳〵と吹く夕嵐に、花月巻のおくれ毛を弄ばせつゝ、夕榮うつくしう綾織るさゞなみの奇しさゝやきに歌おもひする腰、斗らずも折られて「マーいやな人達だわ、驚いてよ」と、一寸一睨する我れを「ホ……」「ウフ……」と、桃色の唇と櫻色の頬に、惜しげもなく笑はれて、はては「ホッホ、」と我れまて……。學校がへりの儘、互に嬉々と戯れつゝ、散歩に出た二人の行手は問はねど、今朝結びやりし妹のおちご髷、いたく傾きて、しをれたるすみれ二本三本插されてある。「姉様、これあなたへお土産」と、今まで脊の後に秘してあつた妹の、左手我前に出せば、シャガとやらんいひし淸き花一束。「マーーと見とるゝを、「姉様いゝだろー」と、



弟ははや鼻うごめかす。折りしも、サッと一陣、稍强風が吹くと、恨めしや、花のこずゑ〳〵がゆるいで、ヒラ〳〵と落花の雪。「オーさむい」と、一様に首ちゞめて、ドット笑ひつ。花の二三片池の小波に漂ひて、四日の月はやおぼろに、奥のはなれて、父様の圍碁仲間三四人、酒にもなりしか、にぎはしく、おもしろ氣に語るは、上戸の戸田様の聲、高崎様の高笑ひ、とり〳〵に癖あるものよ、折から蛙のなく聲しきり、大方明日は雨か、三人は手をとりあうて、蛙の歌にあはせつゝ、お池の蛙はガッガッガ、何というてなく、ガッガッガ」。

（雨評）まづ整ひたり

○病床日記の一ふし

麹町　重田春子

午前十時。障子をあけてもらッたので、枕元にある藥瓶や、西洋菓子の瓶に日がお照りかへッて、まばゆい。庭を見ると、花壇の花は眞ッ盛り、櫻草や、パンシーや、吾妻菊や、金仙花や、色の配合よく咲いて居る。一番

はしの小田卷草!!!、昨日來た文子さんの、「學校時代のあどなかりしを思ひては、葉うすき庭の小田卷と共に、靜やしづくりかへす胸の小田卷!!!」なんて、しやれたことをかいてある手紙が思ひ出される。暫らく見て居たが、今度はふと床の間に眼をやッた、そこには、姉樣が今朝、いけて下すッた矢車草と山吹とがある。山吹のきいろいのを見ると、私は忽ち、去年の今頃、さうさう、高等女學校の最上のクラスの生徒として得意であッた時、私が髮に山吹をさしていッたら、文子さんが笑ひながらオヽ可笑しい、山吹はミッセスだわ、色がきいろいからッて、云ッて、やをひやかしたことがあッたのを思ひ出した。私は一人でうなづいて、やをら半紙に筆を取ッて、寢ながら文さんへの御祝ひの文句を並べた手紙を書き出した。そして、その中に山吹を一輪入れて、「ミッセスの色のこの花を親友の眞心から送ります、どうぞ丸髷にさして下さいれ」と、殊更大きくかいて、封をして、さて、私はほゝゑんだ。時計を見ると、丁度十一時二分程前。オヽ文子さんはどんなに笑ふことだらう。

○二人連れ

佐世保　横山汎子

わしが心はれ、！わしがこゝろは舞子が濱よ！、

ほかに氣はない、まつばかり　　サヽホーカイ

凸凹な田舍を、鉄弓と尺八との合奏で、覺束なげな節に、哀れをこめて流して行く編笠の二人連れ。背の小高い方は男で、十字絣に大柄な袴を高くからげて、毛繻子の脚絆に尻切れ雪駄の、眉の秀てた、色の淺黑い二十七八、女の方は汗で賞めたやうな縮の浴衣に、同じく白地の袴、傘かなんかであらう、筒袋に包んだのを、肩から斜に背負つた、色の勵然と白い鈴張眼の二十前後、水色天竺の襷を、キリヽと小氣味よく綾取つて、これも脂で色褪せた緋毛斯の袖口が、その眞白い、纖弱さうな腕に絡みついてゐる。

合奏の音が、絶えずこの閑寂な田舍の空氣に、微妙な振動を傳へて、何處からか鷄が一聲、消魂しい聲音を立た。と、男は何思つたか、急に合奏の音を止めて、つゝ慳貪に、尺八を一振り高くふつて。

「厭になつちもう、れいお秋、今更望月が想ひ出されるだろうれい？：：「何んだれい、この人は、今更お前さんのやうにもない、人、笑はかすなさんなよ。……

これはまた一向平氣に云つて、その艶麗な、寧ろ凄い顏で男を覗き入つた。

「へム、これも戀故かれ、……

と嘲けるやうに云つて、今度は自暴に一聲高く、

これも戀故れ、！　これも戀ゆゑ、お前ゆゑ、

今じや、家ごとの、軒にたつ。サヽホーカイ

やがて、二人は彼方の土橋を渡つて、まばらになつて居る草屋の小道をづゝと縫つて、一きは高い大きな榎にその歷史を語つてゐる立派な白壁造の門前に立ちどまつて、見るともなしに見あげた。燒物の標札には、麗はしい手蹟のそれて、農學士望月逸也。？・

二人は、何がなしに立竦んだまゝ、少時は身動もしないで居る。

○戰時の運動會を見る

宮城縣　二階堂貞子

聞くもうれしき戰時の運動會は、中學の校庭に催さるゝとの知らせありこれは見ものと、午前の十時頃、友垣の誘ひにまかせて、歩を急がせたり、門に入るや、眞先に目にうつりしものは、委れかゝりし十字形水色の旗標木高く掲けられ、遙か向ふに据ゑられしは軍艦らしうもの、三つとやかうそこはかと眺め居程に、勢すさまじく走せ來る十五六名の選士我先きに過ぎ行くよと見るまに、臺を踏み、木に上り、滑るあり、落るあり、うらめしげの旗を守ふ樣、後に浦鹽陷落の技なりしと知らる。やがて階上に起る銃聲、如何なるはづみにや、飾りつけられたる船艦は惜し氣もなく沈沒の始末、折柄響く進軍のらつぱ、各整ひたる勇士の扮裝、喉もはりけん許りの鬨の聲、足並みそろへての突擊、思へば、遠征の同胞もかくやあらんと、女ながらも壯壯の感にぞ打たれける。其の他千種萬態、稱するに餘りあり。あゝ、愉快なる今日の一日。

○夏の夕暮

赤阪區　森ふさ子

まばゆき光を山の端にをさめて、太陽の圓き姿も、お供一つ留きたる如くなりぬ。しばらく休んで居た路傍の水道、お庭の車井戸、お勝手もとのはれつるべなど、何れも大繁昌にて、つるべは彼方此方と忙しく、お米とぐお女中、お水汲む車夫、中々絶えず。やがて、追々お勝手の御用もすみてか、井戸ばたも、一人へり、二人行きて、中の水もやうやう少し

おちつきたりと思ふ間もなく、大路、小路のほこりおさへにと、汲みに來たりて、又も一しきり賑はへり。それも追々手桶納め、じようごしまひお家のお掃除も終りてか、何所ら靜まり、新しき絣飛白に着かへ、手足のちりも取れて出て來るお子供達、赤のリボン愛しく、お化粧美しき少女のむれ、これも洗ひたてのゆかたに着かへて、皆、橋の上の風とほしよき所に集りて、又もおにごと人取りに、汗を流して遊べり。山の上に置きしお供、天上のおれずさらひ行きしか、いつの間にやら影もなくあたり追々あやめもわかずなりて、はや稲黑く染まれば、子女の群れも一人、二人と去りて、水の音やうやう高く、そこここととやり水に冷しく橋の上にはいつか、圓き月、人と共に納涼めり。

○田園の初夏

小石川　近藤愛香

枳椇の花も今は實となりて、ゆかりの藤は只木の間に二房三房殘れるばかり、牡丹と並べ植ゑられし芍藥のみ眞盛りなり。哀れ春もくれよ、初夏の急しさは、人々皆田づらに出て、何れの門の戸もとざされつ、いとひまなる里の眞晝、なく庭鳥の聲も長閑なるに、前の藁屋の棟くろに黄色く咲ける鷄草の花、首うなだれて睡けなり。ドッコイショ、どれ行つて行きますべえか、腰は梓の老の弓、杖を力に立上る翁につゞきて、我も亦小籠を負ひて家を出てしが、坂を下り、小橋を渡りて、畷を辿れば農事は今をいと忙しけ也。脛かゝげて早苗とる男、笠傾けて挿む早乙女馬に田かゝしめ、牛に苗運ばしむ。岡を過ぎ行く旅人も、同じ畫中の物たるべし。川端に出づれば、幼き子らが川狩に餘念なし。柳の幹に身をよせて、四方の景色を眺むれば、此の世は青と綠りの世なるらし。山も空も濃き藍色もて染めたらん如く、其の餘は、目に入る限り、若葉青葉に鎖されつ。眞向ふの雨に、一群茂れるは、大杉の森か。やゝ左なるは樫林にや。我が目は忍東の岡にそゝがれつ。彼處の墓所には、哀れ、我が妹輝子も眠れるよ。春去れば鈴菜の花、すゞ白の花咲き亂れて、藤つゝじ山吹も、小さき墓邊を飾るめり。夕暮空の風涼しく、あやめ提げて踊る乙女の影も、漸く遠くなりて、野守が家の燈のみ、きらめきたり。

○夏　月

紀伊　高橋嘉子

風はあれど、水はあれど、月こそ夏のいのちにはありけれ。雪か霞かとまがひし山ざくら、あとなう散りて、庭の若葉は、うすみどりの色をたゝへ、軒のわが竹もいつしか卷き葉ひらけて、夕風に露みだるゝそれより、ほのめきそめし三日月のかげ、まづ見るからに、いとすがすがし。日れもすいそしみて汚れたる身、心の底をも洗はゞやと浴みすれば、げに躁みがへりたる心地になむ。そゞろにうかれたちて、庭の面をさまよひつ、前栽の草木などに水そゝがせたる、空にしられぬ夕立のなごりおぼえて、木々の下枝より、おり散る露のしづくさへあるを、影あはれなる夕月の、青葉が中にちらつき見ゆる、たとしへなうをかし、うちあふぐばかりの高樓の、水にそひてたてられたる、いと涼しげなるに、いよす高くかゝげて、年若かき少女の月にむかひて、玉琴かきならしたる、いかに心ゆくらむすさびにかと、よそ目にもいとなつかしうこそおぼえしか。』

一年旅にいでつる夏ばかり、眞晝はあつさのたへがたければと、夕つかたより夜のみかけてあるきけるをりなりき、い行くほとある村ざとにつきぬ。村は山と山との間にあり。蚊遣たくにやあらむ、家毎にたつる烟のほのしろう、うちなびく中を、なほたどるに、村のつきむとする片ほとりに、杉の生垣めぐらしたるあり、うちには何ならむ、いと物睦ましう語らふ聲のきこゆるに、罪えがましき業ながら、かいま見れば、めをとゝおぼしき男女の、咲き匂ふ夕顏棚の下陰に莚しきて月見つゝ涼むなりけり。二人とも年うら若く、男は肌なかばあらはに、烟草くゆらしたる、女は蚊追はむとにや、團扇もちたる、をりをり高やかにうち笑ふ談、いと睦じげなり、なほよく見しに、その傍に二つ三つばかりの幼兒の、眠れりける。あはれ、いかばかり樂しき身の上ならむと、今も猶おもひ出てらる。』

定めつる田植のわざも、はやなしをへぬ。日はいつしかかくれて、月さへのぼりたれば、いざかへらむなどいひつ、年わかき賤の女の三たり四た

り、野川の水に手などあらひて、家路にかへるうしろかげ、いかに長閑けき心なるらむ、ふく夕風に亂れし髮をくしけづられつ涼しき月におくられて、田歌うたひつゝ行くさま、鄙ならではとぞおもひし。』

暑さたへがたき夕つかた、吹きおろす山おろしの風とともに、一しきりふり來し夕立の雨、跡なう晴れ渡りて、夕殘の露の消けきに、晝の暑さは、とみに忘られて、はしちかう涼みするほど、向ふの山のかげより、雨にみがかれし月かげの、ぬるゝばかり涼しきが、さしのぼりたる、何にかはたとへむ』

ほたるの光にひとしきともし火がいとゝ、ひとり文机にもたれて、歌おもひをるをりしも、門の戸たゝくおとするに、誰ぞといらへて、窓おしあくれば、あたりもの靜かに、それと見らるゝものもなきは、例の水雞にはかられつるにやと、うち仰げば、月は中天にかゝりて、影高く、庭にうつろ竹影、さながら墨繪の如し』

○くさぐさ

福島町　八巻なつ

梅も櫻も一つらの青葉の林となりにし公園の小徑、心地よき朝風を追うて吟歩すれば、新緑の雫冷めたく、白妙の袖を濕す、あゝ、清新なる初夏の朝よ。

降りつゞく梅雨に、訪ひくる人もなく、水かさまさりし小川の音のみすさまじう、さらでも青葉小暗き窓の、うちよむ文にもあきて、障子おしあけて見渡せば、時を得顔なる蝸牛の、庭のとび石に角出すも、にくし、軒端の梅の實の色づきたるが、しとどにぬれて落ちんばかりなる、垣根のうばら、花かつみの咲きもあへぬに、雨にやみてうなだれたるいぢらしさ、はるかに見わたす田面、簑笠まとひし男女の苗うゝるが少くみえ牛馬などのたゆげに畔道をひかれゆく樣など、ゑにもかかまほしき景なるに、しばしながむる折しも、一しきり吹きくる風にきこゆる田歌の細うやさしきは、女のうたふなるべし。「雨は天から横には降らぬ、風の吹き樣で横になる」

○

葉櫻影をやどす池水を低きに落せるやり水の、ちよろらよろと流るゝ積垣のもと、うの花の斑かとばかり咲き匂ひたるが、折からの夕風になびくもをかし。かゝる時にこそ、時鳥の一聲もがなと、端近う出て、空うちあふげは、月さへほのかにさしいでゝ、草葉の露にやどれる影清く、なにとなき虫のたえ／＼にすだくなど、一しほ風情そへたるに、名のりいづるまではとて、庭のをちこちながむるほどに、いつくか夜も更けて月も早かたぶけり、あはれ、かくまでつらき時鳥かと、いとゞかこたるゝ折しも、さやかに名のりゆく一聲、心も空に、うれしさいはんかたなくて。

○

夜の暑さを、一浴の下に流して、端近う出づれば、青葉を渡る涼風に、軒の風鈴やさしき音を立つ、池水は月を浮べて、銀波をたゞよはし、庭の面はうち水涼しげに、苔の緑新なるながめには

○朝の堤

山口縣　堀　龍子

殆ど一週間にも餘る日々夜々、天地を洗ひ盡くしし春雨の、今朝珍らしくも晴れ渡りぬ。今床を離れし計りの、上氣せし顔面を、爽やかなる朝風に吹かせつゝ、小川に沿へる堤を、二本の古櫻が下に歩みを運ばせたり。どう／＼と音する方を見れば、美しきまさごの奧に、星のまたゝきし宿して、神の秘密をさゝやきけん小川のせゝらぎも、打ちつゞきし長雨に、水いとゞ増して、浪さへ高き水の面、落花の幾片高く低く、水晶の山をすべりてぞ來る。怒れる勢たくましく、白沫を吹きて待ち構へ居る白龍の口中に、あなやと見るまにのみ去られぬ。とみれば、ひるがへりたる水玉、する／＼と浪の上を、五寸ばかりすべりて、水底に消えたり。やがて、彼方に現はれし花びら、葦の群にたゞよひしが、又水に誘はれて、見えずなりぬ。

おゝ、逝きにし花よ、何處よりと、見上ぐる彼方の二もと櫻、あはれ散りけり。馳せよりて見れば、まだ散り殘る花の、雨になやめる樣、一入うるはし。燃え立つ如き緑の芝生に、千ひらもゝひら、打散ける樣、唯世になき錦の心地して、そゞろに彳み居れば、塵なき春風、さつと花を掠めぬ。落花霰ふる如く、頭に袖に手に、足下の緑は薄紅もて、おほはれぬ。花びらかつぎたるすみれの一もと、紫重たげなる露は、はら／＼とこぼれつ。

すゞしき春風よと、目を細う開きて、今一度と顔つき出せど、春風再び訪れず。いつとび來りしか、白蝶一つ、手中のすみれに、とまるにまかせて、

短歌

佐々木信綱選

天 ○

東京京橋區木挽町二ノ二山中方　萩野雅子

玉輿の過ぎ行く小路花小路
　嵯峨野に近し朧夜の月

〔評〕王朝時代の繪卷物を見る心地す、うつくしき歌

地 ○

陸奥一關大町四丁目　黒澤美津子

み像刻む鑿の手とむるしばらくを
　庭の紅梅またみだれちる

〔評〕結句原作又みだれたりとあれどよからず

人 ○

美濃國加茂郡伊深村　柴田清子

雨ほそき庭の牡丹に傘させば
　しばしを蝶の出て丶舞ひけり

〔評〕花ぬらさじとかささせるは、心もうつくしき少女なるべし

記者曰く、第五號本欄天位に入選せし歌の下句「朝な／＼を小鳥來る／＼家」は「小鳥來なく家」又た同しく人位の歌の上句「朧夜の花の御空に忘れたる」は「花の御堂」に誤植につき玆に訂正す

秀逸

○ 秋田　浦井松子

小鼓の調べも絶えて夕風に
　観世か庭の梅の花散る

〔評〕今までうたひゐたるは何なりけむ、東北にかはた舘にか

○ 鹿兒島　雪枝子

ちきりてし君は來らす暮にけり
　かきの卯の花た丶雨の音

〔評〕雨のおとむれにしむらむとおぼゆ

○ 佐世保　横田汎子

十とせ憂きゆめのねさめかいまこ丶に
　としふるさとの夏の月見る

〔評〕月のでらせる面わ、十年さすらへの旅にいかにやつれたらむ

○

梅さげて小原にかへる尼君の
　あとしたひ行く眞白蝶かな
埼玉　花舟女史

〔評〕結句原作游かすみ哉

春月

うたにくれし園生は春のかにみちて
　夢さなからの朧夜の月
なぎさ

〔評〕おぼろけなる中におもむきあり

牡丹

たをやめが振のたもとに日は斜
　長者が庭の牡丹くづるゝ
熊本　羽田すみれ

〔評〕振のたもと長者が庭にふさはしかるべし

待花

散りゆくを惜む思ひにくらぶれば花は待間ぞたのしかりける
千葉　花市女史

渡良瀬の春

春來れば寛神のひそむ渡良瀬の水にさへ浮く櫻花かな
栃木　菅谷よし子

病の床に

梅ちりぬ白桃ちりぬさくらちりぬあわれ我身のちる秋やいつ
愛知　北條ますみ

折にふれて

夢さめて胸に愁への滿つる夜半を梅の實二つあへなく落ちぬ
千葉　小川武子

梅花

わが家の庭の小梅の花咲きて朝な〳〵に小鳥囀る
青森　新谷竹子

殘春

塔の上を鳴かぬからすのとぶ見えて殘んの春のゆふべ淋しき
神奈川　佐久間芳子

暮春

桃はちり水は流れて今年またいたつき癒えず春ゆかんとす
千葉　芳文女史

○

觀音に牡丹二ひら散りつみて石のたくみの技を頌ずる
靜岡　古見きつき

○

春牛ば母が案内の吾が畑や大麥五寸雲雀鳴くなり
大分　元重操子

折にふれて

何となくわかぬ思に亂されて花の木蔭に月を見るかな
和歌山　柳本朝枝

○

露營の夢むすびかれては古里をおもふこゝろのなきにしもあらず
島根　くれない子

○

君が船は海原とほく見えずなりぬいつかしの戀又かたるべき
北海道　森野きよ

○

おさな子のいくさ遊びやはてぬらむ征露の歌の遠ざかりゆく
大坂　田中千枝子

○

戀たりと鏡に笑める姫若し紅梅かをる朧月の夜
新潟　米山春子

○

琴に倦みて歌書ひもとく午さがり若葉の芭蕉雨細降る
宮城　大槻竹子

○

青白き漁火一つほの見えて海原遠く千鳥鳴くなり
大阪　板橋董子

○

今しばし袂別ちて一人ゆく東の空のそゞろ淋しき
千葉　翠蹊女史

郭公

山にかく尋れわびつゝ空しくもかへる門邊に鳴く郭公
和歌山　高橋嘉子

○

まごゝろをこめて賜ひし一もとの花うつくしき白薔薇かな
群馬　かれ子

遠征の人を懐ふ

さゆる夜もつゝとりもちて滿州の廣野の末の月や見るらむ
山口　寺内あまつき

○

ふりなれし五月雨はれて青葉もる月のひかりのなつかしき哉
靜岡　たか子

讀書の樂

友なくもいともたのしき友とちは文よむ外にわれなかりけり
三河　榊原きく子

海邊を散歩して
三河　柳原しづ子

楽しげにもすそかゝげて海人の子が貝ひろふ様の愛らしさ哉
長崎　桂枝

○更衣

あかざりし花のたもとと惜むとて今はかひなき衣更へ哉
岩代　服部貞子

○

紫の深ほり傘のおぼろ／＼また卯の花の花吹雪する
東京　近野榮子

○颶風

風やみて島の小村の長閑なり畑打つ人もうすく霞みて
上總　御園生美枝

○

あめしと／＼遠く水鷄の聲すなりひとり餅焼く樋の守か妻
群馬　萩原かなえ

○折にふれて

春ふけて契りし君はあらずなりて獨り悶ゆる夕くれの窓
京都　橋本たつ

○星

常闇の浮世の罪をきかむとてか雲間のそきぬ美しの星
大阪　露香女史

○

さぞやさぞ嘆きますらむいたはしや仇のちかやにとらはれの君
豐後　矢野しづか

○

手を握りて立ちし花野の夕月夜影美しう夢にも似たり
上總　十六夜女史

○

胸にしむ聲はあられど白百合の亡き兄君のおやつぎにさへ
千葉　小川芳竹女

○折にふれて

宵の音の月の宮居をもろゝ夕べ團扇そよ／＼ひとり興ずる
千葉　都司友江

○避暑

たつねより都の夏を忘れんと帆影涼しき千鳥かふちに
本郷　大田治子

○

只獨り文よみくらす春の夜もまたもとぎれて友の妻琴
赤坂　森ふさ子

○時鳥

雨に明け雨に暮れ行く夕暮に鳴く時鳥の聲も細りて
神田　高橋清子

○

木魚の音寂うきゆる山奥の雨もろ寺に梨の花ちる
本郷　齋藤ぬい子



小杉榅邨君筆

はなれ島のともしび瞬とふけゆきて東の空しばし白みぬ
茨城　矢口豊子

○
平和てふ戰の庭に照りはえん我眞生来のあやの光りは
千葉　亮子女史

歌の道
春の花秋の夕の月よりも樂しきものはこの歌の道
千葉　蛍江女史

折にふれて
奥山の小川さゝらく我が庭に夏に知られぬ黄鳥のなく
京都　松田ゆき

折にふれて
たそかれて柴笛吹きつ牛おひつ、歩み過ぎに夜はふけにけり
栃木　秀子

○
なつかしき君訪問のゆめさめて、闇もる月の影のすゝしき
岐阜　白井安子

夕暮
尼寺の夕べの鐘の音絶えて、靜かに暮るゝ野はづれの村
豐前　四萩子

○
折り取りて妹がかざしに送らばや、色美しき庭の白百合
岩代　杉原たか子

○
朝な夕な心をこめし撫子の、にほはぬ前に別れ行くとは
伯耆　酒林智子

○
去きし春君と花見しこの袖に色まだあせぬ花のひとひら
栃木　木村みどり

○
やつれたる君がかんばせ見し今宵十年むかしの戀しのばれぬ
千葉　鵜澤花子

花見
日暮の里に日暮れて花はまた飛鳥の山に明日を尋ねん
鳥取　天野清子

わが歌
かぐはしきわか葉の風にふかれつゝ夢に得し歌王者も知らじ
千葉　鳥海つる子

山畑
山がらのつどふ山畑夕日うけて傾く唐蜀黍の房美しき
滋賀　辰井雪子

折にふれて
うらぶれの我にまひよるこの蝶のやさしきなつかしきかな
筑前　小野兎白子

春曙
黄金矢に似たる彩羽ぞ皆ふるふ孔雀か園の春のあけぼの
福岡　水野芳子

牡丹
めでし人はいくさの庭に散りぬるを知るや知らずや牡丹花咲く
福島　入卷なつ

夏山寺
松風にかよひてひゞく谷川のせゝらきすゝし夏の山寺
兵庫　三浦久子

○
旅に病みて故郷の便りよむ夕べ柳しづれて小雨そぼふる
千葉　伊藤美智子

○
紅き紫紫の雲西に湧きて桑の畑十里黄昏れぬ
群馬　吉田きみ子

○
百鳥の聲おとしろく入千草の花うつくしき園のあけぼの
橫濱　寺田光子

○
思ひあまり君が御膝に泣きたりき海棠の雨風さむき夕
岡山　秀芳女史

○
朝な夕な育て給ひしこの子等をせめての君がかたみとや見む
横横　岡千代子

○
二ッ三ッすみれ流れぬ川上のうなゐの話のせて來ぬらん
北海道　森野きよ子

○
今宵見る月に名殘を惜むらん髯の士官の艦橋に立つ
秋田　浦井松子

○
病床の母の御腰をさするかな燈火うすき北窓の月
群馬　里子

太田道灌
實のなきと花を出せし乙女子に習ふ心の奥ぞ床しき
岐阜　碓井邦子

○
人里をはなれし軒の梅の花今朝も來て鳴く鶯の聲
丹後　世傳育栄子

百合花
美くしと植ゑて開きし百合の花稚児にせめられ惜しくも摘みぬ
志摩　小林君代

○
春の暮入相告ぐる寺の鐘花に響て花ぞ散るなる
京都　奥村葉名子

孤獨の友
ひとり身の訪ふ人もなき白河の君が志しおもひやらるゝ
美濃　臼井虎子

○

わが宿は丘に添ひて江に添ひて遠ち近ち桃の花盛りなり
○　越後　露　子

笛いたき一人花野の夕まぐれ甘き香に酔ひ蝶をおひけり
欧反古の中より　越後　蘭　女史

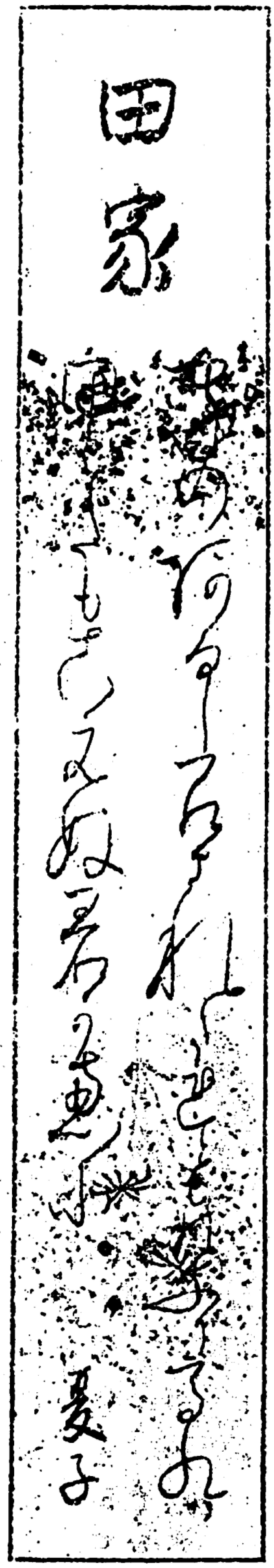
こもりゐの栄えなき庭に書きすてし反古に夕の雨寒き哉
菖蒲　伊豆　内田文子

菖蒲剪る妹か姿に夕日映えて虹美しき水の欄干
閑居山に遊びて　茨城　石崎照子

瀧の音梅桃櫻つぎ〳〵に鳥の聲さへのとかなる
折にふれて　和歌山　山東かなる

燈籠のともしみうとく鐘消えて夕べ小雨の花の香にふる

酒井伯爵夫人
夏子筆



（三條實美公女）

卒業生の心を　札幌　小山かく子
はて遠き旅路の空に向ふとも四年の教あだにすごさし
○　武蔵　小寺花女史

鳴る神は大山つみの怒りにや矛杉さけて見るも凄まし
雷　鏡　備中　高月靜惠子

たをやめの心の奥は見えれとも鏡にうつるかけ美くしき
春夕暮　豊前　原しづ子

風あげて遊ふうなゐの影たへてかすむ夕日の馬子唄り行
友の寫眞に向ひて　伯耆　伊藤春子

ほゝ笑めば笑みますがごとみ名よばゝいらへますがごと君がうつしゑ
○　群馬　いつさ

花ぐもりいつしかはれて吾が家のわら屋の上に夕日さすなり
○　越後　稲井綾子

友に今別れてかへる獨り道菜の花つゞき蝶の追ひくる
○　遠州　中村秀代

朝まだき松原たどる旅僧の菅の小笠に霰寒う散る
○　越後　藤岡とめ

月姫の舞の手振や風となりて露かとばかり花の亂るゝ
折にふれて　八王子　永瀬らく

初男子のぼりかざりて祝ふ今日君がいまさばうれしからまし
牧場の春　岩代　根本松江

小羊の靜かに眠る片蔭に散りくる花は粟よ櫻よ

思ひ出より思ひいてこの夜半を形見に泣きぬ香たきて見ぬ
○　山口　村田節子

富士の嶺の涼しく寓る田の面に晒襷の少女苗さす
○　武蔵　岩田たか子

日うら〳〵シベリヤ原の露消えて日の丸旗に朝風なびく
○　岐阜　田中たへよ

古寺の鐘の音深く日は暮れて松風清き鎌倉の里
○　相模　川崎靜江

備散きて横笛奏づる若武者の鎧に涼し夏の夜の月
蛙　淡路　露子女史
備後　春海靜子

山吹の散りて流るゝさゝ川に聲もをしまず蛙なくなり
姫路　毛口正子
○
宵の君かうたれし時の雄心の御製歌聞きし日顔をほひて泣きぬ
宮城　櫻井ときよ
春日
東風吹けば我が文机にたゝならぬ梅の香ぞ送られにける
美濃　大野秀枝
○
雨の夜も風の晨も雪の日も故郷思ぬ日はなかりけり
韓國　野口辰子
○
世渡りは里の小川に流れ行く木の葉に同し浮きつ沈みつ
下谷　加藤瀧子
靖國神社
いづくより御前に行かむみやしろのみ庭賑なき山櫻花
巣鴨　田中舞月子
○
春はいづこ君と二人の春はいかに野なる一人に夕日冷たき
下谷　江口春子
折にふれて
業の山學びの海を打ちこえて御國のために力盡さん
小石川　杉浦きよ
陣雨夜
たきすてしかゝりのけふりあはくしてねなから逆きつゝ音をきく
麻布　人見まさ子
○
思ひあまりみあくる空に星消えて沖のかゝり火いと朧ろなり
大坂　角野富子
庭前花
まち〳〵しわが庭さくら咲しより野邊にも出ずなりにける哉
千葉　小川恭興子
○
旅の窓思故郷に通ふらん若菜にそゝく五月雨のあめ
山口　原まさよ
百合
賤の女がま草かる野の百合の花かへりて妹が家つとゝせん
徳島　住友とき子
○
花の下に歌ひ別れし君はあらす都の花はいま盛りにて
越後　村松芳子
○
一村を見なから下る緑路の青草の影に郭公なく
群馬　田中くめ子
後園村
雲をこひ鳥をうらやむ身となりて遠きたよりをまつ外そなき
上総　小川文子
○
時鳥鳴きつる方を眺むれば野寺の奥に有明の月
兵庫　柳田良子
田植
降る雨にぬれつゝ里の少女子か小笠ならへて田植するなり
下野　花畫女史
○
春の日をそゝろ椅とる南窓風あたゝかに桃の花ちる
千葉　平川遊幾子
折にふれて
都には朧月の薄やいかならんすきし三年の夏そ戀しき
和歌山　池田まつゑ
山寺の淋しきを見て
花ちりて人影きえし山寺のかれ身にしみて興さむき頃
長野　節子
亡き兄を思ひて
風そよぐ夕を一人野にたちてたゝかこちけり花のゆくへを
山口　下田きよ子
すみれ
春野邊に今を盛の百千草ひとりゆかしきゆかりの花
羽後　松田せい子
折りにふれて
心澄みぬ夜半にわれ聖書を繙けば今宵の月に神やとりまさむ
伊勢　廣瀬ため子
花賣少女
露深き花籠背負ふ少女子の歌聲涼し岡崎の里
山口　大井滿滿
螢
絵にやせん歌にやせんのたゆたびに湖の松原霞みはれゆく
千葉　ゆき子
春月
いつはあれどたま〳〵訪し故里は昔こひしき春の夜の月
美濃　梅村たい
夏の月
戦の後しつかなる海原を清くも照らす夏の夜の月
茨城　大部小粲子
水鶏
城あとの一本松に月おちて荒れたる堀に水鶏なくなり
茨城　小泉はま子
○
折々は若菜つみにし此のほとり今日は青菜に五月雨の降る
奈良　武田久子
○
琴の音の洩るゝ南の窓の外に桃の花散る夕まぐれかな
上野　今井入百子
○

其まゝに只其まゝに折らでやみぬゑみうらわかき姫百合の花　越後　土田哲子

折にふれて

めでましゝ君は在さでいたつらに樒かをる五月の宿　栃木　鈴木松子

地久節をことほきて

大空にそゝりて立る松か枝にたつか音高く千代祝ふなり　佐賀　照子

清水の瀧

清水の瀧のあたりは夏も猶ほ憂世をしらぬ秋風ぞ吹く　兵庫　利子

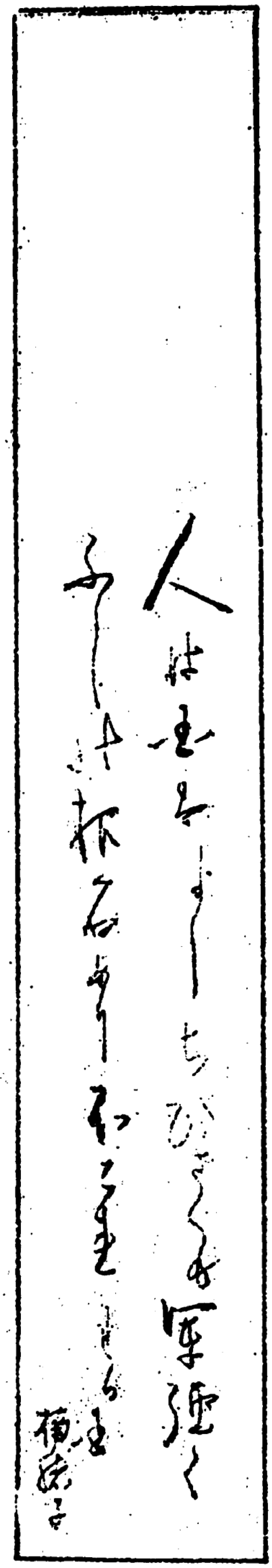
○

露とけの庭のとび石ふみなから初蘭草に詩をこたつみる　日本橋　植松ひさき

○

色あせし樒花ちり落ちて物おもふ窓に夕日冷たき

大塚文學博士夫人
楠緒子筆



惜春月

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の月おぼろなり磯のまつ原　大和　綠子

○

あやめ咲く里のさゝ雨晴れそめて夕日の影に燕むれとぶ　能登　杉下ふみを

寄船枕

しきなみにはこぶ常世のみつき舟數をつくしの海にこそよれ　下總　鈴木茂子

戰勝國の櫻

男夫のほまれと共にかされかし日本島根に名も高き花　東京　すゑ子

○

椽に出てゝ何を思ひの若き葵花心なくしく夕べ　磐城　熊町松子

落花

せかるともした行く水の通ひ路はたへず忍はん淵となるまで　神戸　小西ふさ

○

夕風に香る瀧の櫻花散らしてひゞく山寺の鐘　廣島　飯村夢子

折にふれて

紫は君にふさはじにつかはし白き小百合のそれひめませな　四谷　立花道子

○

丸まどか琴かきならす手弱女の玉手をみだす春雨の音　高崎　靜子

田家之春

越の男は心のどかに畑うちぬかゝる里より春や立つらん　紀伊　木村小糸

○

夏暑さ冬の寒さの折々に心ひたすら君のしぬばゆ　美作　竹内くま子

○

錦着て歸へる夫を待ちながら留守守る妻の心如何にと　奥辺　宮部俊子

○

夕まぐれ小川の邊りさまよへば小草の上を螢飛び交ふ　美濃　白井安子

兄の戰死をきゝて

病む母に兄の戰死を告げ兼て枕べちかき夕しぐれかな　群馬　金庭はる子

折にふれて

ますら夫はしこ草かりにいてませりわれとゆかんを男の子なりせは　筑前　豐田飛佐子

櫻花

我が惜む心を知らで櫻花浮世の風に散りはてにけり　茨城　栗山松波子

○

伊勢　白汀女史

みたらしに顔をはてゝ鯉を見る巡禮若し花の下かげ
下谷　太田あきつ

○
松原にふな歌遠く霞みつゝれんじ丸窓月になりゆく
常陸　川韮緑子

夏月
露とのみ影をし見れば夏の夜も寒さおほゆよる月の涼しさ
京橋　早阪さた子

柳
青柳のうちたれかみをけづるには下行く水や鏡なるらん
本郷　堀内直枝子

○
病ませる君をみとりの夜はふけてをり〱聞ゆふくろふの聲
東京　大澤璧子

○
梅の實のうみては落つるこの夕なにとは知らす涙こほるる
越後　花野てふ子

春雨
ありあふ胡蝶の羽袖しめやかに鈴菜咲く野に春雨のふる
上野　とく子

久しく逢はさる友を思ひて
花すみれこき紫のなつかしき君はいつこの野邊におはする
福岡　松の露子

寄花述懐
住み馴れてめぐみの露にうるほへど匂あせゆく花の色かな
岩代　大中小牧子

○
牧場にて消き月日を送れども歌しらぬ身を悲しかりける
愛知　水野すい子

折にふれて
うなゐ子にゆり落されて里川を胡蝶と共に花そ流るゝ
豐前　佐藤秀子

衣更
あかなくに今朝ぬきかふる夏衣春のかたみの花のうつり香
伊豫　坂梨雅子

五月雨
くれなゐの薔薇の花瓣散にはに玉露とする五月雨の朝
福島　小林美武子

○
ちきれ〱雲は五彩の色をすてゝすゑたゝよふ暮れむつの鐘
富山　房子

避暑
山荘に暑さゝけますあて人を田草とりつゝなかめやる哉
和歌山　藪中くら子

友を悼みて
世も春も夢にこそあれ櫻花散りのまがひに入もかくれぬ
磐城　鈴木粲子

○
みどり濃き牧場十里黄昏て歸る小徑に春雨けぶる
安藝　中村東雲子

○
聞くからに思出多き初雁や君住む里を通り來しかも
埼玉　小暮きん子

○
君かため手向の池の花あやめ折らばや袖に露はおくとも
下總　岩瀬信子

○
愛てましゝ姉逝きましぬ姫百合に思ひ出多き雨の夕ぐれ
茨城　石崎女史

○
暮雲靜かに物を思ふ夕庭の海棠雨にみたるゝ
越中　永瀬きみ子

寄松戀
逢事は五葉の松のいつとしも知らて常磐のつれなかりけり
越中　翠操女史

折にふれて
去年の夏ともに愛てにし撫子花の花見るたひに我せ何處と
千葉　文子

折にふれて
御戰のありにし後は殊更に待たさるかな君が玉章
千葉　伊佐岡澄子

○
咲く花はいつもなからに香へとも君世にまさす春の夕暮
上野　美津多滿女

○
青々と茂れる若葉ふみつれて草つむ少女愛らしきかな
山口　孤瑩女史

折にふれて
おばしまによりて眠れる少女子がかさしゝ薔薇に胡蝶たはるゝ
麻布　白露女史

○
夕榮への色もいつしか消え果てゝ枯野十里に夕風寒し
鹿兒島　野崎女史

船涼み
いさよいの月に流るゝ錦江に心のせたる船涼みかな
豐後　加藤のぶ子

櫻
二つ三つ笹舟浮ぶ泉水に櫻の散りて緋鯉浮びぬ
千葉　渡邊昭子

若菜摘
幼子の唱歌ひくゝ歌ひつゝ若菜つむなり深草の里
埼玉　中村龍子

○
梅の花に名高き寺に亡き友を祭る梢に花ちりかゝる

抒情文

日本女子大學教授　櫻井文學士選

天

○亡き妹

神奈川縣菊見町五四一　佐久間芳子

春日暖かき南の椽に、香箱ひろげて、ねゝ樣ごとよ、まゝごとよと、ともに〳〵遊び興ぜし亡き妹がおもわ、今も目に見ゆる心地ぞすなる。

あはたゞしき人の知らせに、心も身に添はで、學び舍より歸れば、見るも涙。などとく知らせ給はざりしと、母樣つかまへての吾が恨みも、詮なや。せめてはと、硬ばりし妹が唇に、口うつしする末期の水、一雫だに通りたらんには、いかに嬉しき思ひならましを、あはれやんぬるかな。呼べばとて叫べばとて、逝きてし魂のかへるべくはあらねど、今一度は此眼開きても見ませ、此の口笑みても見ませと、冷えかへりし頰に額に、唇あてゝくつをるゝ、我れを、さばかり嘆かんは、亡き人がよみぢの障りともなるべし、と母君の、これも涙ながらにたしなめ給ひし、堪へがたかりし其の夕も、今は四とせの昔とはなりぬ。日を經るまゝに、逝きてし折りの悲しさは、忘るともなく忘れつれど、月に花に、たのしかりし思ひ出の忘れがたきを、いかにせむ。

幼きはらからの、いさゝかの事に、角目立ちては、弱き妹泣かせつゝも、いとほしき學してけるよ、嫵な我れをば恨みてんと、心の中に人知れず詫びて、日頃切にと望めりし人形、小ぎれなど、妹が手箱に、そと入れおけば、斯とも知らぬ妹が、開けてのよろこび、ちさき胸にかき抱きて、ねえ樣、有りがたう、と嬉しげのほゝゑみを、共に笑みつゝ、堪忍して頂戴よと吾もやさしう。扨、それよりは又、南の椽に香箱ひろげ、小ぎれきざみて我が縫ひ出づる小袋、紐つけくゝるは妹がつとめにて、長き春日もこゝにのみは短かきものとあかず興ぜしいとほしの妹、その妹をまた世に見ずなりて、こゝにはやも四とせを經たり。

四年の月日は流るゝがごと、我れをして、乙女十九のはなやけき春をむかへしめぬ。紅の帶や襦袢の衿や。今の我れには、あまりに派手にすぎたるを、妹あらば

彼れあらば、あれもゆづりて、これもゆづりてと、かへらぬ嘆きに袖ぬらすも、おろかしき女心といふべしや。

よとせの月日、あはれ四とせの月日は、美はしかりし妹がむくろを、いかにかへしぞ。天にや昇せし、土にや化せし、あはれ妹。

（雨評）妹を慕ひかなしむ姉のやさしき眞情、自から讀者の袖を濡らさしむるものあり。天とす。

地

○唱歌の聲

上總長生郡一宮町　御園生　美枝子

太陽は今沈まうとして、名殘を惜んて、山と云はず、空と云はず、森と云はず、轉つて居る草鞋の切れまで、黄金色、否寧ろ紅色に染めて居たが、日が沈むにしたがつて、山々は紫色となり、紫色は藍色となつた。これが所謂暮色蒼然たるものであらう。

折りから、遠山寺で撞き出す入相の鐘、日の光りを追うて、寂寞抱く夕暮をふるはして、餘韻長く〱、二聲、三聲……、第六聲は遂に茜薄れゆく大空に、一つの夕星を生みだした。

處々の森や、川の向岸の山際の百姓家から、夕餉の烟の、うすく濃く立ち迷つて、遂には靄と化してしまふ。あゝ、其の豐けく立ち上る烟のもとを尋ねたらば、洋々たる和氣は、軒傾きし賤が菜屋にも見ることを得るであらう。

もう五反田のあたりには、田植女の影が黒く、あちに二つ、こちに三つ、歸つて行く。

薄緑なす葉櫻の若葉を滑つて、入日ばかりの月は、澄み渡つた空に、銀の小櫛を投げつけたかのやう。その光が、きのふ植ゑ付られた稲田の水にうつりて、そよ〱と吹く風に、稲葉の搖るぐたび、小さき稲妻を走らせつゝ、蛙の鳴く音はみだれて、雨かとうたがはる。向うの村に百姓家の灯の火飛び〱に、南の方に一つ、北の方に二つ、

田の畔傳ひ、靄を縫ひ來る童一人、はつきりと澄み切つて、尾花に唧く鈴虫のそれよりも涼しく、さも愉快らしく朗かなる聲あげて、

「柴の戸扉に、父母は、今や吾等を待ちまさむ。淸けき小川、青き山、思へば夜目にも見ゆ……」、

自分はふと耳を欹てた。それは、自分の家と竹藪一つを距てゝ、ちらほら瓦葺の家の見える、それが此の歌の主邦雄の家で、邦雄は今やつと十一高等小學の一年生なのである。夕暮、煙が家々から上る時、何時もあの清い歌の聲を聞かぬことはない。それは極愉快な調子ではあるが自分は何とはなしに、ある悲しい思ひに落る、それは、自分の境遇からではなくてその歌の主に對する、一片の同情からである。邦雄の家は、こゝから山一つ越えて、その先の村で、五里ばかり離れて居る。早くから父母に別れて、今は唯一人の孤兒である。御隣の御祖父樣とこゝへ來て居るので、こゝから毎日村の小學校に通つて居る。



あのやさしい可愛らしい顏容と心にも、哀しい歷史は持つて居る。

「今や吾等を待ちまさむ」、無意識に歌ふのであらうが、邦雄は待たるゝ父母を持たぬのである。其聲を聞く時、御祖父樣の耳に何と響くであらうか。

外の自分でさへ涙が自然とおちるのに……。もう自分は先を聞くに堪えぬ。あゝまた聞える。

「稲葉そよぎの秋風の、……」。

人

（雨評）　前半の叙景、少しく長きに失したりとおぼゆる嫌ひはあれど、寂寥なる夕ぐれ身にしむ唱歌の聲ときこえ申し候。文才も確に見ゆ。地とす。

○別れ

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

今しも辭し去り給ひしなづかしき友の姿、松の並木に小さくなりて、果ては唯一點の黑き影となり、幾度か霞の内に沒せんとしてなほかすかにそれと認めらるゝを、見失はじとひたすら守りつ、いつしか眼うるみて溢るゝ涙、拭ふ間もあらせず、友の姿は見えずなりぬ。よろ〳〵と、なやましき病後の躰を。其處門前の柳の幹に預けて、ふと耳とむれば隣の柴垣を洩れて、瀏喨と響く尺八の音、柳の糸を結びては解く東風に低く高く……。心ゆく計り澄み渡りし笛の音も、妾が心には、たゞ悲しう「アヽ春子樣は、愈明日御上京遊ばすのだつて。そして、遠からず御結婚を。だから、此の上もないおめでたいのだけれど、私は……アヽこれからどんなにか淋しいだろう。」妾は斯くつぶやき、こしかた行く末を想ひぬ。實に春子樣と妾とは、又なきスクールメートにて、また音樂の友として、離れがたう覺えし。忘れもせじな、去年の夏、驟雨の後、心地よき夕、青簾卷きあげし離れにて、君は妻琴、妾は風琴、互に微笑みつゝ、今や青柳の曲を合奏せんず折りしも、木の間にさしかゝる片破の月、月の淸さはいはずもがな、葉末にやどる露のきらめき、さながら星屑のごと、その露か月にかよへと、一きは心をこめて彈じたる時の嬉しさ。嗚呼、いまはその樂しみをだに、繰り返すことかなはずなりしよ。妾のみはこの片田舍に忘れられて、君は花の都の人となり給ふか……。仰げば日はいつしか西に傾き、あかねさす夕雲、こそなう美しく、二日の月淡く山の端に……、あはれ今日も遂に暮れ行きてか。明けなば別るゝつらき日、かなしき朝。せめて今宵は訪づれて、つきぬなごりを惜まんに、病の躰はいかにせん。

（雨評）其の情は遙にきこえたり。人とす。

秀逸

○てふ

紀伊海草郡和佐村　木村小糸

さびしいかな、夕ぐれの墓畔。白露いとゞおもげに、手向けの萩におきて、枝もたわわになやめるが如きさま、骨にまでしみつ。苔むせる石碑には、無言のさとしありて、われは、唯何となく

涙こぼるゝをおぼえぬ。此時、かたはらの小路より、白き蝶、羽力なげに飛び來たりて、墓前の花によりそはんとせしが、そよ吹く風に、露のはらはらとこぼるゝにおどろきてにや、またいづこへか飛び去りて、かげもみえず。

あゝ、心よわき蝶よ、汝が其のよわき羽もて、いづちまでゆかんとする。おそろしや、松の小枝には、さゝやかに網をはりて、よき餌かゝれかしとまちつる敵あるを忘れたりや。森かげの小川をわたる夕の風は、汝が羽うごきもえぬまでつめたきを知らずや。あゝ、ゆくをやめよ。いかず、かへつて、靜かにこゝにねむらんには。

此、萩の香と甘き露とは、おどろける汝が身を慰むるに足らん。もしまた、此の花の床に、冷めたき夜半の月にえたへで、はかなくなるとも、墓の前を若き繪師の過ぐる時、繪筆とりて、汝があはれのさまを吊ふべく、若しまた詩人のさまよひ來らん時は、汝が運命のはかなきに、清き涙をそゝぐならめ。あゝ、汝がねむるには、こゝこそ安すけれ。あゝ、汝が死するにはこゝこそ榮えあれ。

されど、胡蝶は遂にかへらざりき。

墓をめぐる草むら、そゞろに虫はなきいでぬ。わが思ひ、沈みに沈みゆきて、目をとぢてうごかねことしばし。薄霧は、われをつゝみて、日は全く暮れたり。さらば、いざかへらんと、たちてあゆみおこせば、うしろの方、山寺の鐘は、細う、長う、ひゞき渡りつゝ。

（兩評）苦心せられたる趣向は、確に見とゞめ申して候

○清怨

長野市狐池一八　安孫子美子

彼方此方、墨汁に汚染れた文机の上、暗淡孤燈の光線を浴びて、多想い土產入の信玄袋は正整と依然置かれてある、如斯でも若しや、失念でも有りはせまい乎と、妾は再度袋中を、撿閲て見た。——芳香が馥郁鼻を突く、百合花の挿頭！現品は可愛の小妹にと、各種々七本迄も包んだ、東京は眞便利な土地、低價で高尚な腕止があつたならば、這般の夏期休に、何卒一組、持參ては吳れまいかと、‼義兄の賞揚の手紙が、妾は妙に滿足て、匆々買入た、此腕止——高價な物とては、以上二品しか無い?!が雖然、吾人は現今、光明ある彼岸の成功を希望て、白雲幾十里の客舍に、苦學しつゝある可哀一個の女學生では無い耶？如是を、——虛飾に、苦しい學資の半金を投割て大々的土產を贈與たとて、夫れが何功にならう……、と斯う、妾は故意と御兩堂へは、名物の甘諸を入れた、彼是少時と——一覽了つて、各自元所に收納やうとすると、忘れて居たが、

然而現品も!!!天涯故園を後にして、目下は信濃の寒山村に、移住て居る、芳江君なる親友の襟に裝飾と、殊更買ひ添へた小形な襟飾、！田舍とは雖、想ひは誰女も有同無異、少時も早く都門の珍品に、芳江君が誇的の笑顔を見よう、而上君我が手を携へて、五城樓下の山河に、望郷の感想を相語らうと、……然矣、自分は、明日一決信濃に芳江君を訪ふて、翌明日は君と諸共、流れ變らぬ袞瀬の河畔、五城樓下の客となるのである、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

郊原と回轉り、山谷と變現て、疾馳驅行く幾多山河、——都門は既に濃綠の最中を、信濃は又奈何たる後夏ぞ、仰ぎ見る山嶺斑々、晩春櫻咲き、俯して見る原頭面々、生ひ出し草の、綠色も少淡い、斯くして映る、異郷の風光は、旅馴れぬ子の双眸を愕かせて、日影も淡れた、當日の夕昏、芳江君が侘住へる、村里へと、到着た、疲勞た身軀を腕車に走らせて、友が、以前、語つた叔母なる婦人の住所を訪ふと、微笑げに迎へたのは、可憐如な、其叔母——非常も妾の旅途を慰藉て、さて、徐ろに「お報告せうと思ひましたが、……芳江は過既逝去まして、——」「えつ、⁉芳江さんでございますよ」「はあ、芳江がでござんす……」

噫重疊の山河を超えて、長途、もたらした東都の珍品も、斯くして妾は、誰人の胸襟に裝飾とは、するぞ、!!半年音信の絕無たのも、起思ば此故であつたのだ、眞乎、芳江君は、其美しい單純胸底から、靑春神聖な戀愛は湧出て、有例⁉人生を悲觀だが、純朴い、同村の若者と、月夜の千曲江に相抱て身を深淵に沈ませた、——遮莫友よ、其江頭に、俯仰で、天空なる月を仰視だ瞬間！東、六十里、同運命な吾人を偲ばなかつたか、否々、我友は其刹那！悉皆浮世の煩悶を解脫れて、泪の中に笑み交はして、如此て、美的永眠に就いたのであろう⁈其樣を、都會の浮戀などに、比べたならば、果然、幾何の差別があろう、男性一人を信賴として、實在の身靈を捧盡くした、芳江君の熱戀——

多感の妾は、もう堪へられぬ、當夜、々汽車で高崎迄、戻つた、月光は淋しく車窓を照らして、再現去來る信の山！信の水！彼月夜と、當月夜……妾は終生!!!多恨い月夜の曲水をば忘れぬ、胡爲乎忘却られやうぞ、信濃は我友の靑山である、

（雨評）苦心せられたる文なるべし。されど情熱の足らざるものあり。また、詞あまりに男めきて、時々妾といはるゝが、あはぬ心地す。

○草枕の露

熊本市明十橋通　富重利夫

旅行の途次、阿蘇戸下なる客窓の燈火に對して。

よもすがら、おのれは終に眠り得ざりき。眼はいよいよ冴え輝きぬ。これ抑も何のためぞや。枕にひゞく、宿下を流るゝ奔流の。岩石にあたりて、激する音にか。

吹きしきる夜嵐の、宿の上なる峯に、荒れ狂ふ聲にか。はたまた、隣室の客どもが、語りさゞめく聲の喧しくてか。あらず、皆あらず。かの激浪の音、夜嵐の叫び、また隣室の笑ひ聲などは、いま少しも、おのが耳にきこえざるなり、否、きこえざるにあらず。それらは、皆おそろしき胸の焔に巻きこまれて、感ぜざるなり。あはれ、おのれは、いたくも悶えけるなり。何故の悶えぞ。心の底深く〳〵秘まりて、終には、われさへも、忘れ果てつ。心の琴線は、亂れに亂れ、胸の風波は、いたづらに立ち騷ぐ。

心づけば、いつしか枕はしとゞに濕ひて冷たく、隣りなる友の鼾の聲のみ、いと高く、一犬遠く淋しげに吠えて、始めて激浪の音を覺えぬ。

あゝ、おのれに何故の悶えかを問ひますな。また、何故の涙なるかを説明せしめたまふな。たゞ、おのが心の弱くしての、よしなきかりそめの悶えと合點して、首肯きたまへかし。

せめてもの心やりに、この亂れたる心のあとを記して、とゞめ置かむものをとて、ひとりうす暗き行燈引きよせ、書きもてゆくに、水莖の痕、しどろに亂れて、綴ること能はず。

あゝ、おのれは、これより筆をつゞくるを得ず、ゆるしたまへ。こゝにて筆をさし置かむ。しかして、この悶えは、とはに、おのが心の底深く秘めて、再び語り出でざるべし。



（雨評）朦朧なるところに味ひあり。

○歸省前の夜

武藏多摩川の邊りにて　小寺杜留

あゝしたはしき古里、自分が翻然志を立てゝ上京したのは、それよ、今より三年前の秋、落葉物の哀れを語りげな、それは、さびしい夕であつた。忘れもしない、あの里の土橋を渡つて、今日は白い霧

中のものである吾家、さては、吾作が裏の水車の響、其れ等を見返つた時の自分の心つたら、眞に甚麽であつたらう。其れは、言ふべからざる悲感の念に打たれて、いつそ、……既う思ひ止まらうかとも思つた位。其の時、若しも自分が心弱くも素志をまげて居たならば、今日のやうな成功、いや、殆ど成功に近いそれを見る事は出來なかつたのであらう。

あゝ、嬉しい。どう考へても嬉しい。よしや、其れが小成功であつた所にしろ、取りも直さず、己が希望の理想の、それに近いたのであるを、嬉しき思ひを什麽して禁ずることができやう。況や、常に浪あらき世の逆境に遇する自分に於てをやである。

おゝ、明日は樂しい歸省だ。

重たい様な鞄、帽子洋服、さては、櫻のステツキに至るまで、凡て明朝の支度に狼狽へぬやう、枕元に侍らして、さてまた眠りに付かうと、するのであるが、思ひはいつしか、故郷はるかに慕はしき父母の膝下にはせて、とても睡むられないので、幾度か寢返りを打つたか知れぬ。一昨日あげた手紙は、今朝ごろ御覽になつたであらう。そして、此度、明日の我が歸省を待ち焦れて居らしやるに違ひない。えゝと、妹は今年で七つだな、石版は格好であらう。あの爾よかな笑みを湛へた頰、自分を見知つて居るか知ら。「兄さん」つて縋がられたら、其の時自分は奈何しやう。犇と斗りいつか己が胸に抱き占められて、熱き眞情からの接吻は與へられるであらう。

なつかしい白鷺山、したはしい揖保川、共に微笑んで自分を迎へるであらうよ。あの土手八町の並松木を車上で。あゝ、眞個に愉快だな。

枕元の其れ等は、恰度今鈍い蘭燈の光りを受けて、漠然たる影を壁に映じて居る。

仲の間で、ぼーんと眠たさうな、大時計が、闃寥たる家内に、鏘々として正に十點鐘。

いつしか自分は眠りに入つたのである。

（雨評）其の情は饒にきこえたり。結果は今一入の苦心ありたき心地す。

○金水仙

東京麴町區飯田町　重田春子

なつかしの君よ、戀ひしの君よ。

君が御情にたまひし金水仙の花は、あゝ、高き香をわが文机に投げぬ。幽闇と、陰欝との身にせまる今宵しも、一人その花の清さを眺めて、双の腕拱きつ。嗚呼、我れはそも、何をか思ひ、何をか感じつらん。……そよ、慕はしの君が御姿、おぼろならずこの眼に。……そよ、なつかしの君が御聲、ひくからずこの耳に。

……ォヽ、君よ、許しませ、暫しこのちさき魂の、君が御あたりにさまよふを。。。。。。。。。

歌あれとたまひしこの金水仙の、高き香りに、はた黄金の色美しきに、すゞろ、胸は戀々の情に驅られて、歌もえ詠まず、詩も賦し得ず、只々この花送りましゝ君のみぞ忍ばる。春雨しとゞなるに靜けさまさるこの宵を、ォヽ、君は、バイオリン肩に、……双の振ゆるがせて彈きまさん曲は『ローレライ』か『須磨』か。……

只一度、只一度、その音聞きまつりたさの心切なるを、あはれませたまへ。

こゝに封ぜし花は、春風あたゝかき朝に、三日月細き夕に、わがちさき詩材たるもの。やさしき詩才あふるゝ君にしも、このふかき心こめてまゐらするを。……花のいろいろ異れど、こもる心は只このわが胸一ッ。

……花の色はあするとも、香は失するとも、送りし人は、昨日も、今日も、さては明日も、あらず百年千年まで、變らざると知ろしめせ。

ふかきこがねの花びらに、無言のさとしをこめて、ほそき葉に、神秘をひそめて笑めるこの金水仙。あゝ、送りし君のやさしき、美はしき、御心そのまゝならずや。

さても、なつかしの君よ、戀ひしの君よ。

(雨評) 當世風にと工夫せらるゝはよけれど、氣取りすぎぬやうに注意せられよ。

○思ひ出

長門　孤蓮女史

おどろが下に、何をかこちてか、鳴く虫の、今宵はわきて物怨しう、そゞろ都にゐます兄君の忍ばれて、懷かしさに堪へず、何となう胸おぼめくに、讀さしの書なげすてゝ、やをら立出て、窓の戸押せば折りしも、十五夜の月晃々としてみ空に高く、颯と吹くる風に、草葉の露ほろ〳〵とこぼれぬ。

あゝ、思へば、三とせの昔、戀しき兄君と手をとりて、そよふく風に、四つの袂を拂はせ、小川の邊りを逍遙ひつ、樂しくあこがれしも今宵の如き月の夜なりき。兄君が笛、妾が琴に、南窓の下に、好める曲の數々合奏せしも、今宵の如く虫の音しげき宵なりき。あゝ、懷しの兄君よ。樂しかりしも一睡の夢。今は遠く幾百里の西と東に隔てられつ。又相見ん時の、果して幾年の後ならん。さても、慕はしき兄上よ。今宵を如何に眺め給ふらむ。孤燈の下、文机にもたれ、妾が編みて參らせし肘付して、ひとり詩想にふけり給ふか。はたまた、感情ふかき兄君の、此の月に對し、同じ思ひに、樂しかりし其のかみ、忍びてもおはすらんか。花に月に、片時忘れずと、のたまひし妾が上、こよひも思し出で給ひてか。あゝ、懷かしの兄君よ、翼あらば飛びても參らんものを。思ひ得たへて、めを閉せば、髣髴

としてあらはる、そがおもかげ。あな、慕しの兄君よ。ふと仰いで、空をのぞめば、月いよ／＼冴えて、夜はます／＼更けぬ。折りしも、友にや後れけん、はらからにやはなれけん、かすかに聞ゆる孤雁の聲、いとも哀れに身にしみつゝ。

（雨評）筆は整ひたれど、少しくふるきをなしむ。

○あゝ妹

京都府乙訓郡
大原野村善峯　岩村義子

夜は既に更けた。机にむかつた自分は。遠く幽かに聞える鐘の音に思はず身ぶるひしたが、火鉢の火はもう螢ほどになつてしまつた。あたりはひつそりとして、枕時計のセコンドを刻む音が、僅かに耳について來る。つゞいて、ランプの油が盡きかけて、ヂー／＼と音をたてゝ居るのも聞えて來る。と、今まで眠むかつたのは何處へやら。目は冴えて、心の底まで澄み切つて來る。ふと上を仰ぐと目についたのは、妹の寫眞、亡き妹の寫眞である。ふくらかな頰には、ふさ／＼した髮の毛がかゝつて、愛くるしいその目には、溢れるやうな笑みを湛へて、我が顏を見て居るので、覺えず光子／＼と叫んだ。光子は答もしないで、やつぱりにほやかに我が顏を見まもつて居る。思へば、一昨年の夏、兄樣と光子と妾と三人で、螢狩に行つた。あの時、學校の前で、兄樣が、光子兄樣の學校此處よと仰しやつたら、光子はあの黑い目を見はつて、こんな近ければ、光子だつて來られるはといつたのが、如何にも愛らしかつたので、兄樣も自分も思はずほゝ笑んだつけ。それから、田圃で螢をたくさんつかまへて歸つた。そして、それを庭へはなしたらば、池の中や草の中で光つて居るのを、光子はうれしさうに見て居たが、一と晩毎にその光も減つて、僅か二ッか三ッ程になつた頃、光子はふと病にかゝつたのである。その後は、もう云はないでも。あの臨終の時、姉樣／＼と呼んだ聲は、まだ我が耳の底に殘つて居る。光子光子、今頃は何處をさまよつて居るであらうか。一人で淋しくはないか。イヤ、光子はきつと天國で、神樣の御手に抱かれて、樂しく暮らして居のだろう。それにしても、母上や父上や自分の事など思ひ出したら、さぞ家へ歸りたいだらうに。

あゝ、天は、天はなんで無情だろう。罪もない神の子のやうな清い少女を、蕾の花を散らして、うれしいのか。あゝはかないのは、果敢ないのは、もうたまらなくなつて、机に打ち伏してしまつた。

（雨評）其の情はきこえたり。されど螢の二つ三つになつた頃の一節の外は、別に新しく取り立てて見るべきものなし。

○墓詣で

廣島縣　堀田温子

春逝きて、世は獨り青葉のうら茂み、はかなき花の露に袖の色あせし鶯の聲、いと衰へぬ。深草の蔭に、いとしき菫見るにつけても、何となう涙のこぼるゝに、亡き妹の事思ひいでられ、夕日西山に名殘の匂ひをさめんとして、蛙の聲暫くしげき黄昏の頃、妾はたゞ獨り粲然として、瑞雲寺なる其の奥津城に詣でぬ。

青茅の蹤うす闇う暇けるそが中に、一本の年ふりたる杉、淋しげに立てり。あはれ、その側こそ、わが亡き妹の墳墓なりけれ。

黯然として少し佇む折しも、無情をこめたる入相の鐘は、音淋しう響きつ。寺背何を愁ふるにか、暫し撞木持つ手をやめて、黯然たり。

懐かしき墓に進みよりて、持ち來たれる薔薇の一枝、手向くれば、風なきに、白き花瓣、はら／＼とわが手に散りかゝりぬ。

あはれ、妹よ、世は春の夜の夢の如く、人の命は朝の露の如しとはいへ、美しく咲き匂へる汝が心の花、かくも早く、かくも果敢なく、散りはてんとは、嗚呼夢にだも思はざりしを。去年の春、汝が高等小學の業を卒へ、優等の賞品さへ得て、父上はじめ妾等を嬉ばせしも、今はなか／＼に涙の種。まもなく無情なる病魔は、可憐なる汝を襲ひて、一家が日夜悲歎の溜息も、號泣の聲も耳にもかけず、吁、遂に／＼、優しき汝をば、妾等の手より無理に奪ひて、あはれ落花を誘ふ風に乘せて、冥府とやらに連れ行きし。泄も涙には消えぬ恨みなれや。

それより、秋立ち、春來たり、汝とともに散りにし花は咲けども、獨り汝の逝きて歸らざるに、妾の胸には常に愁雲漾々とみち、眼には悲雨點々と浮び、快々として樂む事なきを、如何にせん。思ひ出だす野呂が丘の櫻、可愛が原の桃、さては、庭苑四季折り／＼の花、小窓にさす朧月、やり水の底に宿る月影、あるは蜂が峰に澄み昇るさやけき月、これみな汝とともに眺めしところ。さるを、今年は妾のみ存へて、汝は世に亡き人なりとは、あゝ。

あはれ、月や花、往時は娛しましめ、今は妾を悲ましむるよ。

露かあらぬか、手向の花に、はら／＼と滴りつ。胸は限りなきの思ひにせまりぬ。名殘は盡きじ、さらば、奥津城に別れを惜みて、立ちあがるに、二聲三聲彼方の森に啼き叫ぶ梟の聲。山の端近うかゝりし、ほのかなる一痕の弦月に見送られて、とぼ／＼と歸れば、伴ひ來る妾が影、默然として夢よりも淡し。顧みて再び見んと思ふ折りしもあれ、流星一つわが頭上をかすめて、妹が墓の側なる杉のしげみへと消え失せぬ。

○袖の露

神奈川縣　小野露枝子

今日は花、明日は月にと、種々に樂み給ふ貴き人も、手植の花を見、星を戴きて歸り、寢ながらにして月を見る賤の夫も、末は皆荼毘の烟りとなるこそ、果敢なけれ。あゝ、人の命ほど賴み少きものはあらじかし。

思ひ出づれば去年の秋、夕の綠も消えはてゝ、千草にすだく虫の音の、いとゞ愁を留むる頃、恩愛いと深き妾が父上は、芒尾花の風に堪へ得て、悲しくもかへらぬ空に。

妾が父上は日頃殊の外簫を好み給ひ、花の朝月の夕には、椽の邊りに出てられ、妾等を膝許近く招かれて、いとも心地よげに奏じ給ひて、山を思はるれば、何となう聳えて山の如く、水を思はるれば、海原の如く、其音の爽なこと、鬼を泣かし猛り夫をも哭せしむばかり。あゝ此愛で給ひし簫が、手向の水に影を映つさんとは思はざりき。

其後ふと病に冒され給ひてより、日增しに重らせ行きしかば、好み給ひし簫さへも、函にありて出でざりしかど、ある一日、畫の熱にかへて、十三夜の月すみ渡り、草葉における露白く、いと涼しかりければ、涼しさを喚ばんとて床を出てさせられ、常の如く椽に坐し玉ひ、軈がて簫を奏じられけるが、永のいたつきに、常よりはいたく苦しう思はれけん、太息の中より、是れ今世の奏じ終りなるべしと宣ひしかば、奇しき事を宣ふものかな、などて然る事のあるべき、心確かに持たせられ、一日も早う癒えて給へと申ししが、是れぞ遂はず奏しられける終りならんとは、神ならぬ身の知るよしもなく、其音をいたづらにきゝつることの口惜ちよ。是を終りと知りたらんには、心して聽くべかりしものをと、悔やみ喞ちつ、花を見月を仰ぎては、在せし昔を偲び、獨りうら悲しうなりて、

輝きまさる月も綾を綴りなす錦の花も、唯妾には愁をのみぞ增さしめぬる。温なる父上が容ちは、目のあたりに彷徨へども、精靈は遠き彼方に去き、優にやさしき言の葉も耳にあれど、嬉しきも憂も告ぐるに術なし。如何にせましと思ひめぐらせば、心亂れて麻の如く、朝露の欺なと思ひ出されて、さめざめと咽びつ、東に馳せ西に奔りては、山にもまさる高恩の一端だに報いざりしこそ、かへすがへすも惜しかりけれ。あゝ今はいかに我を恨み給ふらんいかに叱り給ふらん、此篇を見るにつけては、身も世もあられず、よゝとばかりに泣き伏して、胸裂け腸の寸斷寸斷に切らるゝの思ひしき、あゝとのみ姿と姿を嘲つばかり。姿が憂きの遣る瀬なきにぞ、せめてもと斯くは筆に物しつ。

○欸乃

淡路　岡田貞子

晴れりや極樂、暴風れば地獄、
　命うかべた板の上。

今し方。黒う茂れる蘆荻の蔭より現はれ來し小舟。舟に人あり。人は是れ妙齡の乙女。切々嚶々怨むが如き一節を、空行く雲も暫し脚や止むらんが如き、美聲張り上げ張り上げ。そが餘韻嫋々縷の如くして、舟は再び蘆荻の蔭に消えぬ。

日は全く西に沈み果てて、夕の海宛然鏡の如くにして、寄せ來る男波女波、靜かに汀の白砂を洗ふ。

見る陰暦五日の月、くしくなかしく磯馴松に懸りて、光り淡く、淡く、夢よりも淡し。

……晴れりや極樂、暴れば地獄……

又もや舟の乙女は、環を轉ずるが如き聲、張り上げ張り上げ。再び現はれて、又、影の暗きに消えつ。

おゝその聲の如何に清く、哀に冴えつるよ。如何にわが胸を剜りしよ。やる方なき胸の思ひに痩せて、碧浪洗ふ汀に、佇める我の耳には、この一節！百の迅雷と響くなりけり。さるにても、我が一人の兄上は何處如何なる浪の上にか漂ひ給ふらむ。

過ぐる月の五日、あゝ、その五日、同志の友九名と遊灣の途に上り給ひてより、月は一たび移り、上弦の月一たび滿ちて、亦滿ちむとはするに、未だ歸り給はず。

おゝ、それよ、ABと胸に染め拔きし親衣勇ましく、一葉の舷端、オール揃へて、クラッチの音高く、漕ぎ出てけるも、この濱よ。あゝ、その人、その船、今見る心地ぞするに、そは行方もわかぬ浪の上……。仰げば、月は利鎌の影蒼く、猶ほ松が枝を離れざるに。折から、皐月の空に不如歸一聲、三こゑ。

忽ち胸を劈く哀調！
　……晴れりや極樂暴風れば地獄、
　　命うかべた浪の上……

○曉の鐘撞

靜岡縣　芙蓉女史

仰げば萬天の星斗に拭ふが如く、一輪の殘月は杉の梢に懸りて、僧房のあたり、ほの白し。

物の音も聞えず、萬籟默して、四顧寂寞、たゞ下手の溪谷の水の音の、重く冷たき曉の大氣を透して聞ゆるのみ。實に數千尺の高山の頂、一千年來の古鐘樓、而も、清き清き春寒の朝、吾はしも一人高き鐘樓の上に立てる也。寂しの曙よ。さはれ、高き清き美くしの曉よ。見ずや、彼方の峰に幾く白雲を。たとへば白衣の女僧が群れ立ちて、今彼方の峰より此の方峰へ辿り給ふそれのごと。

月影に白める淡す霧は、限りなき神秘を囁くとも思はれつ。吾は暫し恍惚として、天地の靜觀に打たれぬ。ふと想へば、吾はいつ迄もかくあるべき身にあらざりき、曉鐘をつくべくこゝに來りしものならずや。さなり、吾は今此の冷たき巨鐘に向つて、力ある撞木をあてざるべからず。よし、吾腕はいかに弱くとも、高き理想の胸の血汐を、一つに集めて、有情なる鐘の響にそゝがなむ。見よや、吾手の中には下界幾萬の衆生を、そが眠より醒ますべく偉大なる力の存するを。吾のふるへたる腕は、早くも撞木をとりぬ。

鏘として鳴り渡る一聲、左手の森を斜めに廻りて、遠く遠く谷の彼方に消え行く……。

あゝ、此の一聲、如何に莊嚴にして、而も力ある聲なるよ。恰も大慈の御聲が、其のあたゝかき心情をもて、あはれなる衆生に尊き啓示を垂れ給ふそれのやう。餘韻遙かに下界の衢をも過ぎて奈落の底に響き行く。下手の谷には猛獸の叫びも聞こゆ。

續いて一杵又一杵、吾は漸うやく定の數を撞き終へぬ。御堂の奧に燈火のかげ、微かに讀經の聲のきこゆるは住持の朝の任務にやあらむ。

靜かに眼を閉づれば、吾が身は一人、高き高き天上界に坐するの心地。

あゝ！

俳句

巖谷小波選

天

春の潮をとめの足を洗いけり　大阪南區東清水町一番地　杉田とし子

評　春とをとめ、潮と足、いづれも動かぬ配合、汐干の景見るが如し、老手ならではいかで。

地

夕顔や書院の呼鈴のゆるう鳴る　佐世保市下宮田町六九ノ九、三谷方　横山沉子

評　夕顔に呼鈴の取り合せ新しくて、而も趣あり、そのゆるう鳴れるは更に床し。

人

松に月玉追ふ龍の姿かな　靜岡縣小笠郡南山村　松下德子

評　想は決して新からねど、好い句は何時も好い句なり。

秀逸

此あたり柳斗りの堤かな　美濃　臼井安子
山吹や朝月淡き京の山　能登　池野勇子
春雨や簀の下を蝶二つ　京都　橋本辰子
才々の一寸沈むや草の風　神田　海瀨女史
春雨に藻を打つなり渡守　信濃　佐々木貞子

文裂いて思ひ斷つ附杜宇　岐阜　中島のぶ
四五本の櫻の中に小酒もり　仙台　石田ふみ子
春雨に兎飛び出す燒野かな　中國　青山文子
行春を黒髪切りし未亡人　盛岡　山田榮子
行く春を都へ上る僧一人　丹波　波多野松枝
田の畔に笠よび合ふ子供かな　上野　いくさ
瀟風やよき橋渡る人心　姬路　小野清子
散る花を追かけて行く胡蝶哉　美濃　臼井安子
海棠に蝶二つ來て止まりけり　美濃　宮部俊子
初雷の東は晴れて白みけり　和歌山　古賀百合子
丸窓に二本は若き竹の影　相模　内野すゞ子
初留に筆を落せし詩人かな　姬路　紫野まさ子
惱くゞろ泉や花の薄明り　廣島　中村東雲子
蟬ないて栗こぼるゝ山路かな　能登　杉下ふみな
蝙蝠や柳にくらき二日月　廣島　安達貞子
風呂敷に香の移りけり櫻餅　栃木　松本幽子
萩の露紫破布をぬらしけり　釜山港　池田謠子
化粧して凉みに出てし女哉　千葉　小川芳枝女
橋上の闇夜を凉む男かな　上總　五十石子
青葉若葉妹山背山ならひけり　陸中　黒澤美江子
櫻花テンスのまりに散りにけり　福島　水野芳子
薰風や牡丹を生けて支那料理　三河　白菫女史
藤の花庭千圓の價あり　越後　古澤つる子
向ふ處敵なし伊勢の風薫る　埼玉　渡邊きく子
夕陽や雲雀下りて寺の鐘　信濃　佐々木柳子
矢立にも殘れる春や京の水　大阪　杉田孤子
浦風や雲雀の聲の下を吹く　横濱　古山りん
詩人病んでものうき窓の若葉かな　攝津　藤原桂子
犬の子の戯れて居る柳かな　美濃　室部俊子
春風に傷病兵の白衣哉　磐城　渡邊正子
大川を前に柳の家二軒　大阪　小林春子
女躰山男躰山の若葉哉　埼玉　野口悦子
忘れたる笠て又のむ清水かな　群馬　久保田やよ
溢れ來て三千尺も清水かな　上總　鴻澤直江子
長き日や島のとまれる渡し舟　和歌山　やす子
夜さつたあゝゝ二度まで時鳥　大阪　今井千代子
蚊の聲や枕にかゝる月細し　常陸　川並義子
春山の江にうつりたる姿かな　美濃　白井茂子
暮遲し動物園の象のこゑ　尾張　平野はる
落ちさふな岩を根にして藤の花　志摩　波江

消息文

日本女子大學教授　櫻井文學士選

天

○都の友へ

長門國萩　孤鶯女史

落葉堆き金谷の宿に、露けき袂を別ち参せしは、猶昨日のやう覺え候を、流るゝ月日に關守なく、世は又も思ひ出多き春と相成り申し候。君には此の頃を如何に過ぐさせ給ふにや。綾織り亂す都の春に、樂しくあこがれ給ひてか。自然が生みし清く靜けき故園の春は、思ひ浮ばせ給はでや、君と共に繪筆洗ひし後ろの小川、昨日けふ、散りしく花に、掬ばゝ中や、たえなんの樣、見るにつけても、ありし其のかみ偲ばれて、君懷しさ思に堪へず候、さても、思へば、過ぎし春、共に睦みし花の下蔭、理想を語り、希望をのべ、少さき胸に樂しき未來を描きつゝ、互に行末迄もと誓ひし時の樂しかりしよ、あゝ君は今、彼の時の言の葉空しからで、滿々たる希望の海にのり出で給ふを、吾はあゝ、われは、一朝失望の淵に蹴落されて、再び昔の樂園を夢みんよすがもなく、徒らに果なき運命をかこちては、涙の袖を絞り居候。君よ妾を哀れと思召さば、花の朝、雁なく夕、折々の御たより惠ませ給ひてよ、それこそ妾が今の身に、こよなき慰藉に候へ。卷き込めし櫻花は去年君が色よしと自ら手折りて、妾が髮にかざし給ひし小川の邊りの、それにて候。去年にもまして、麗はしう咲たれど、君いまさぬけふは、徒らに涙の種にて候。せめてもの心やりにと、封じ込めしもの、妾が心を汲ませ給ひて、故郷の春をも思してよ。かしこ。

（兩評）筆整ひたり、且つ多少の花もなきにあらず。天とす。

地

○温泉より友の許に

備前御津郡石井村島田　松本もと子

都塵を避けて北に十七里。深山の奧の温泉場、まことに寂寞の境に候。高峰の雪はまだ消えやらねど、さすが春にて、花もさき鳥も歌ひて候。今朝よりふり出でし春雨の、糸より細く霏々として

音だに立てず、烟の如、空に舞ふさま、淋しきことに候。行きかひ繁き都路も、春雨ふりしきりて、花繽紛と亂れちる日には、淋しきものを、深山の今日、まことゝ淋しう候。ぼち〳〵と落つる雨だれ數へて、窓によれば、楷下の谷川、水かさまして、無殘や、散りし花びらのせて流れくると見れば、あはれ、どつとばかり瀬に落ちて候。日ましに延びゆく柳の枝にも、水晶の玉宿りて、美しう候。もはや春もゆくにて候か。

近來は浴客多からず、穢らはしき人の影も止めず候。宿屋は花家とて、丁寧なる内にて、山海の珍味としては、水清き流の小鮎、裏山のさわらびなど、中々の味に候。父上の御病氣も、程なく快癒いたすべく候間、土産には、名物の木細工を持ちて、十日頃には歸宅致す筈に候。先は一筆、思ふまゝを。

雨は今たけなはに候。

（兩評）才氣ほの見えたり。地とす。

人

○別れし友の許に

京橋區木挽町四丁目六番地　伊東幸子

悲しき思ひを胸に秘して、つきせぬ袂分ちまゐらせしより、戀しさ御懷しさは堪へがたう、樂しかりし過去の事のみ繰り返して、袖うるほし居り候。あはれ、君と、野に山にはた花蔭などに遊びし事も、甲斐なく名殘をとゞめ、今は却りて、去にし昔を忍ぶ涙の種とはなり果て候ひぬ。夜な〳〵の通ふ夢路にも、君の事のみにて、さめて果敢なき夢のあとのみ繰り返す事、そも幾度か、嗚呼思へば、去年のたしか今頃なりしよ。四つの袖をつらね、螢追ひして歸るさ、互に手をにぎり合ひ、清き月をあびつゝ、何をか語りて候ひし、はた何をか聞きて候ひし、とても浮世は夢にて候。空行く鳥を見るにつけ、われも翼あらばと、いとゞ恨めしうて、何卒君よ、雲井遙に隔つる東の空に、君戀しさに泣くわらはあるを忘れ給はで、花のあした、月の夕べ、折ふし毎に雁の玉章惠ませ給へかし、今しもさやけき月影は、松が梢をはなれて、文机の上を照しぬ。あはれなつかしき御許の君、此の月に對しての感、如何にかおはしてぞ。

（兩評）文すなほに整ひたり。人とす。

秀逸

田舎の友の許に

長崎市新橋町　栗田壽賀子

なつかしき君が御玉章、只今着。くりかへし〳〵拜見致して候。げにも早きは、月日のあゆみに候。思へば去年の今頃は、うちつれて植物採集に、一日をあくがれありきしを、今年は、はなれ〳〵に、若菜の色を眺むることの、いと悲しく候。あのをり、あの小川の土手で、つみし蓮花草、今も私の書の中に匂ひをり候。君よ、學び半ばにて、田舎に歸りし事の、いとはかなしと、なげきたまひそ。よし學びやに通ひたまはずとも、君があけくれにみがきたまふ心の玉は、やがて世をてらす光りのいで申すべく、殊に御兄上には大君の爲め銃とりて。萬里の外に御遠征遊ばされ、君には、人も空氣も清き地に、母上姉上とたがひに、茶つみに、御國につくしたまふ事、いと〳〵御うらやましくこそ、また、軒端の山の花の色は、君に御歌をお勸め申すべく、前の小川の水の聲は、君が手なれの琴の音に通ひ申すべし、これまた、いとも御うらやましく存じ候。日ましに暑さに向ひ候上、御忙しさもこれよりいやまし候へば、一しほ、御からだ御大事に、遊ばさるゝやう、ねぎまつり候。かしこ、

（雨評）其の情の掬すべきものあり。

戰地より妹に（戰地なる兄上に）を讀みて）

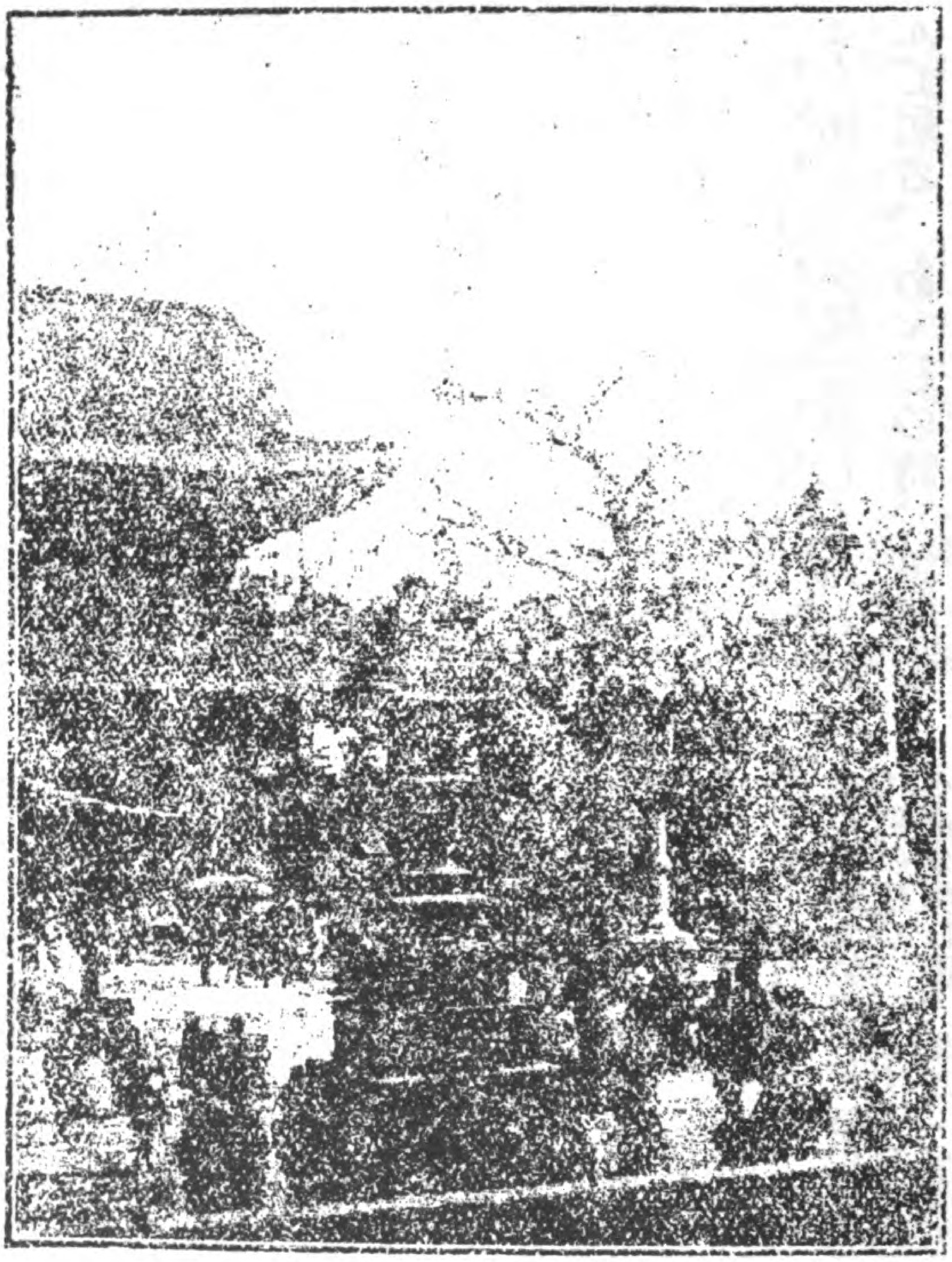
福島町第二小學校前古紺屋方　今村清子

俊さん、懷しき御玉章、今宵滿洲の月凍らん許り澄み渡つたその光の下に、嬉しく拜見致しました。實に流れて早きは光陰です。歡呼の聲に送られて、勇ましく父祖の國を辭したのは、思へば早くも一年の昔となつた。あゝ俊さん!!! あの時はほんにつらかつたよ。一人しかない妹に別れて、生還期し難き荒鷲狩り!!! 何んてつらくなからう。涙のある限り泣いたよ。オゝ、俊さんの形見のハンケチ。今も或る人の内衣兜に、大切に仕舞れてます、

あゝ、戀しき城山!!! 俊さんと登つたのは、それよ、一昨年の春でしたかネ。樂しかつたネ、あの頃は、そう〳〵あまり美麗なので、菫を一つ俊さんの髮に挿したつけ、あれが今も俊さんの御本のしをりに?? そうですか、色もあせずに? まあ驚いたネ、

俊さん、今更此樣な事を云ふでもないが、此の兄は、旣に一命は君に任せた身です。目前に迫れる奉天攻擊には、必ず人後に落ちん積です。俊さん、どうぞよく御勉强なさい、しをりも時々御覽下さい。間近く色香のあせる時がくるでせう。其の時こそは、此の兄か目覺ましく大君の御爲に一命を捨てた時です、あゝ俊さん、お母さんを!!!父樣の御墓を!!!一劍國に盡くさんとするもの亦家鄕を懷はざらんやです、噫!!!

（評）其の趣向、工夫のあとは見たり。


淺草觀音堂より仁王門を望む

○夏の日友の許に

岩代須賀川本町　服部貞子

只今の强雨何と御覽遊ばされ候也。さても、愉快なる雨にて候ひしかな。轟々とどろき渡る大雷は、何珊の巨砲の如、閃々たる電光は敵陣をさぐるアークライト、さては、彼我より打ち出だす彈丸の如き激雨かゝる間に、雷し巨砲は裝塡や終りけん、霹靂一閃、大地震動して、後の山の一本杉に落雷し命中いたし候されば、これよりは、此の木を露木とや名付け候はんか。雨戸繰りあけ、庭の面を眺め候ひしに、草々皆倒れ伏して、色を失ひ居り候中にたゞ、燈籠のかげなる白百合一もとのみ、惱みながらも淸き香を放ち居り候ひき、こはこれ彼の地なる健治樣のお姿となぞらひ、ひとりほゝ笑まれ候。されば、また快活なるお玉章も、近ゝのうちと存ぜられ候先は虹に向ひ、夕日を背にあびて、拙き筆を運ばせ申して候。かしこ

（兩評）才氣は見ゆれど、筆まだ大に練熟を欠きたり。

○戰地の兄上に（花を送られしかへし）

鳥取市西町　天野清子

兄樣！すみれの花ありがたうよ。これをおつみなすつた所は、小高い岡で、アノ、大兄樣が勇ましく御戰死なさいました近所ですつてね。アヽ、この花に問うて見ますわ。壯烈な〳〵御最後の樣子を……。瞳をこらして、じつと見つめますとね、紫の花の色が、尊い血しほそのまゝですわ。ほんとうに〳〵、大兄樣は懷しいのね。又女々しいとおしかりになるでせうけど、アヽ、この花をおつみになつた時は、美しい夕暮でしたつてね。やせ〳〵た高い楊樹の、木の間から、スーと薄煙が紫に立ちのぼり、遙か〳〵には、亡國の民が白い着物つけてるのが見えかくれて、あはれつぽいアラヽン節が、どこともなく聞え、夕陽は淋しくたそがれつゝ、山の端にやすんで居る、あゝその時、軍服姿の兄樣が、地にうつる長い御自分の影をふみながら、大兄さんの事や、今度の戰爭の事や、故里の妹！私や姉さんや、時チャンの事なんか思つて、お好な詩を、吟じ、ふと足下の紫、まあ可愛いゝこのすみれを見出して、幾百千萬の敵をも打つべき恐しい御手をのばして、そと半身を屈して、おつみなされた。花は滿足さうにほゝ笑んでゐたでせう。そして、しばらくの間に夕闇は山も、岡も、人も、家も、皆包んでしまつて、美しい星があの兄樣のキッスしてゐらつしやるすみれの露に宿つたでせう。ねー、みんなこのすみれが、私の耳に囁きますもの。筆をおきますと、佛壇の大兄樣が、りゝしい御顏に笑を浮べて、清を見てゐらつしやるやうよ。お線香のけぶりの中に、アリ〳〵と、ほんとに見えますわ。去年大兄樣と兄樣とがお植ゑになりました白百合の花、今朝咲きましたから、一ツは佛壇に、一ツは兄樣、あなたに送つて上げますよ。いろ〳〵この花に問うて見て下さいませ。

（兩評）苦心の文とは見ゆれど、なほ未だしきふし多し。

○他郷の弟に送る文

備後　春海靜

春の女神か迯受けて野山の景色もいと長閑に相成り候折りから、御身には例の通り、いとすこやかにて日々學の道にいそしみ給ふ由、誠に嬉しく安心致し候。此方にも皆々無事にて暮らし居れば、必心にな掛けそ。扨も、こたびの試驗には、百名近き内にて、第四席をしめ、ほまれの譽をうけて、一學年を越し給ひし由、御二方を始め一同の喜び、例ふべくもあらず、遥に賀し申し候。是れ偏に御身が一年の間蛍に盆にいそしみし功の、今日こそ現れしなれ。海山遠く隔て、兩親の御膝下に仕ふる事能はぬ御身には、唯々外物に迷ふ事なく、一意學の道にいそしま

んこそこよなき孝道に候はめ。されど御身が學の道は前途尙々遼遠に候今日は唯其の一歩を進みしのみなれば、つゆ今日のほまれを心に掛け、驕るが如き事なきやう此後はます〳〵長き前途を心の駒に鞭ちて、最後の月桂冠得給ふ樣、呉々も祈り候。さばいへ、學事に心を注ぐと共に身躰にも亦心を傾け夢等閑になされまじく、日曜などにて長閑なる日は、必ず野外に散歩をなし清き空氣に血を洗ひ、自然の景色に心を清め、健康をはかられん事こそ望ましう候へ。尙御望みの我日記の一節も、相添へ置き候へば、故山をしのぶよな〳〵の、慰藉ともなされてよ。先は忍にて筆止め候、

○峰まつ子の君に

越後長岡　前崎照子

名もなき小草に等しき身は、花さき匂ふ言葉も、露にきらめく調も候はぬを、ゆかしき花の里よりふりはへての御玉章、いか斗り嬉う拜し候ひけん、さながら共に睦びし机の島の友千鳥にとはれたらんやうにて、春雨にたれこめて在せし、柳の糸のかゝれる御窓の內さへ、夢ならてそゞろめに見え候も、お懷かしさのあまりにや候はん。さるにても、うら枯れし菅の葉草を、兎角の仰せは、瓦を玉と御覽ぜられしやうにて、余りにもお恥かしうて、いらへまつるべき言の葉も候はず。たゞ〳〵妹と呼ばせ給はゞ、嬉しうこそ存じ候へ。封じこめ給はりし瑞々たる若楓み情の程も思はれて、一層懷かしう、萎れ果てなん後迄も、文の林の道しるべにと、秘め置き候はん。あゝ、これが飾る五智の秋の錦、今も變らてか、春花と共に忘れがたく候がわらはの呱々の聲あげ候ひしは、程近き直江津にて、さる廿九年の一年も、ほゞ汐風荒きその濱べにと過し候中、春秋幾たびかとひし處、君にもゆかりのあらせらるゝやう、御さはりもなくば、御洩し給はずや。過日睦月の頃、得利寺戰後の繪端書に、なつかしきみ歌そへさせられし直子の君とは、もしや御許樣か御たはぶれにては候はざりしか、余りに御筆跡といひ、にかよひたる節々、いと多く候まゝ、失禮をもかへり見ず、伺上げまつるは、昨日今日ならで、古し昔の御友垣の心地してのすさびと、みこゝろにとめ給はぬやう祈りあげ候。

實はあやしげなる千鳥のあとながら、親しく御前にと存じ候ひつれど、御住居のいづこともさだかならす候へば、梅や櫻の中にかひなき小草のまじらんは、いとやさしう候へども、千々の一つにも、君が御目にとまらば、いか斗うれしからんとてのわざにて候を、あはれと思したまはりたく、かへす〳〵も御住居おしらせ給はらぬみ心のほど、うらめしうこそかしこ。

○戰地の我子に

羽後國　鈴木しゆん

昨日迄は、勢よく咲きてありし櫻花も、今日は、其の身の程をかへりみてか、何れも先を爭ひ散りはて候。人もかくあらむこそよけれ、死すべきときに死せざれば、死にまさる耻ありとか。そなたも、なき父上樣の子ぢやもの、まさかとは思はるれども、必ず〳〵、未練なことをばし給ふな。親の贔目かは存ぜねど、學問といひ、きりやうといひ、適れなる武士よと、陰ながらよろこばしく思ひ居るに、もしもそなたが、いくさのにはに、露ほどの未練がましいことがあつたとすれば、ひとりこの母ばかりの耻となることか、なき父上樣の御名まで穢す道理、父上樣も、嘸や草ばの陰にて、そなたをうらむであろふほどに、決して〳〵、精一よ、そなたは決して、父上樣の御遺言を忘れてはいけないぞよ。花は櫻木人は武士とは、こゝの事よ。死すべきときには、櫻花の如く、潔く散るこそ目出度けれ。必ずともに、再び歸るとは思はず、君の爲め國の爲め、其の身のつゞくかぎり、精一。妾はそなたに願ひまする。まづは、そなたの心得まで、あら〳〵申し入れ候、かしこ。

○仕合に勝てる兄の許に

芝　白木菊子

春風に柳櫻の音信よと、床しき御筆の薫りのみあこがれて候甲斐ありて晴れて嬉しきとの御文、轟く胸抑し靜めて拜しました。此の月日、積る怨みに、肌を燒く三伏の候、骨に徹る吹雪の空、只管球に棒に浮身を窶し給ひにし苦しき御心根の程は、其折々の御たよりに、妾は中々身を燒かれ、骨砕かるゝよりも痛き思ひせられ候ひき。さるを、天下球界の覇を握るも、時に再び起つ能はざるも此の一戰、との花々敷御手紙に接し候

節は、遠き蒼天の山野には、殺機漸く動き、吾が庭の楓橘を含んで、今一と息と云ふ折柄に候て、妾の胸は上を下へと大波小波立騒ぎ候。流石は花の此の心掬みてにや、一枝二枝匂しき笑み洩らすと見るまに、早や咲ぎ亂れ候に、歌案するとはなしに佇む今朝、立ちこめし霞を縫うて、勇ましき鈴の音。狂ひし胸か、花散らさじと思ふ間もあらせず、號外の聲。借てはと走り出づる出合頭に、郵便ッ……。祝捷會の歡聲湧くが如き都の程に、芽出度き月桂冠を得給ひし兄上の御喜びも、さる事ながら、今を盛りの花蔭に號外と御手紙、兩手に捧げて靜かに勝利の曲を奏ずる妾の樂しさも、中々に候。それよ、此の花こそ能く此の心知るものに候へばとて、一輪封じこめて、嬉しく祝ひ納め候かしこ。

○都の親友の許に

横濱　寺田光子

花の上野にみ手たづさへて、春の一日を憧がれ候ひしかの日、思ひ出しては、一人ほゝ笑み禁じがたう、其の日、かの時の君が染くしき笑顔はまだ目に殘り、君がやさしのみ言葉の節々は、耳に囁くものある如く、都戀しの念は、いよいよまさりゆくのみに候。

一人そふ櫻茂き丸窓の下に、つくづくと、何思ふとしもなく見守れば、花におくれて狂ひ舞ふ胡蝶二つ。やがては露深き牡丹の花に、羽を休めて、樂しげなる姿は繪の如く、恍惚と夢見る如き心地致し申し候。一時ときめし櫻の影さへうせて、春はますます深う、くれ行く様の、實にもあはれに候。さはれ、都は、大久保のつゝじ、龜井戸の藤なんど、何れ樂しからぬはなく、藤棚の下に會して、過ぎし昔を忍び、望多き未來を語り合はすも如何ならんと、只うらめしう。此身胡蝶ともなりて、君のみ袖の蔭にとまり、朝夕君と樂しき机並べて、共に學び共に遊び、嬉しき一日を姉よ妹よと打ち語らひ、煩悶や空想を忘れ、清き愛らしの天使ともなりて、エデンの園に遊ばなんと、夢に見現に思ひ出だされ候あゝ、そは實にも空想に過ぎぬわざと、君笑はせ給ふな。都はなれし淋うすきうらぶれの子を、永久に憐み給ひな。かしこ

○鄙より都の友へ

下谷　太田あきつ

都にても猶へ聽き遠さの、まして鄙はさぞや此の頃。いかに淋がせ給ひてぞ。其の後の御消息ふつに絶えて候へば、或は例の御頭痛にや惱まされ給ふらむと、たゞ御案じ申して候。扨ても、流れて早きは年月と、今更驚りしには候はれど、過ぎし頃、常なき世のならひ、御家の御都合にて都へ移らせ給へる事となり、辛き別れのいとゞ悲しく、只涙の目に一歩々々、遠くなりゆく御後姿見送りしは、まだ昨日のごと思はれしに、其れも今は早、三年の昔の夢。折節は、黄昏の窓に、故郷の空遠く多き思出に耽らせ給ふ事もやは無かるべきと存ぜられ候。此方にても、日暮京の方なつかしく、御うつし繪抱きて聞え暮らし候物を。

庭の常夏、今を盛りに咲き出で候。げにも其の昔の思出多き花、なつかしの花。給葉書にかきてまゐらせんかとも思ひしが、京に慣れて御目も高く成り給へるに、拙き物など何かせむ、御目に掛けては中々に後めたさの限りもなく候へば、寫せしにはあらぬ眞の花、數多き中より、心を籠めて選び取りしを其の儘、此に封じ込めて候。よろづは皆何も々々、此の花に問ひ給へ。吾を知る者は、たゞこの花のみにて候。

○文のゆきかひ

紀伊　木村小糸

野より

今や滿洲の秋は、冬の域に進みをり候。野火遠く吹えて、餘煙身にしみ朔風窓に音づれて、げに云ひしらぬ寂寥の味をもたらし來るにて候、かくばかり寂しさの胸にみちては、そゞろに御身のうつし繪とり出だし、故郷の宿を忍ぶにて候。さきつ日、送り給はりし、和歌浦煎餅、つれづれなる物語の末、同僚等とあぢはひ、いとよろこばせ候。敏ちやんに氣を付け給へ。いざさらば、

里より

あはれは冬の夜にて、秋にはなさなく劣り申さず候。孤園さびしく、夢むすばれかれ、情の源つきてわきくるかずかず、心はさえて、いよいよいねられず。思ひはそゞろに、空のあなたに通ひ、さき立つものは涙にて候これも女の愚痴御ゆるしたまはれや。坊は日の丸とサーベルを持ち、萬歳さけぶは、日々の仕事にて、そのあどけなき口調、幼き手ぶり、愛ら

しく候。昨夜仕立てしチヨッキ、今朝發送致し候、草々。

野より

奉天の南、黒雲低く、劍戟の閃き、砲火の響、忽ち殺戮の衢と變じ、血の川を流し、屍の山を築きぬ。されど、一命全く、身は鐵嶺を去る南方六清里の處にあり、心安くあれ。先づ。

里より

奉天會戰、我軍死傷五萬と、晴れやらぬ思ひせしなり、この悦ばしきおしらせにあひ、こよなううれしうて、とりあへず、武運の目出度きをことほぎ、併せて凱旋の日をのみ待ちをり候、かしこ。

○上京する友の餞別に

泉州　美派子

春べは駒うちならべて、圓山に花かざしもち、夏の夕は秋つられて、五十鈴川の凉しき風を追ひ、秋たてば、あべつ川に紅葉の錦を着て、歸るさに澄みわたる空の月を眺め、冬は時ならぬ花をながめつゝ、共もん〳〵に爐を圍みて、古への今の史どもかたりあひしを、今は八重の山路をかきわけて、遙か東の空に立ちゆかれんことの名殘り惜さよ。殘る妾が身は、草繁き郷が山邊にとゞまりて、夢にのみ見るは、君が面影ぞと思へば、今は別のやるかたなさ。あはれ海山はるけき地とはいへ、花のあした月の夕の折々は、美しき水莖の跡を給へ、今より切にまち侍るになん。

○摘草に誘ふ文

靜岡市　森下櫻子

學校の二階の窓より眺めらるゝ遠ちの山は、甲斐か信濃路にや候はん。まだ消えやらぬ雪、白妙にさえ渡り候へども、賤機山のあたり、薄がすみ立ちそめて、囀り合ふ百千鳥の聲々は、早もえそめし若な摘めとのやうに思はれて、佐保姫の織らめし野山の春のよそほい眺めやりたく幸ひに明日は日曜日にも候へば、わかな摘みがてら、或るはささやく小川のほとり、低う垂れたる柳の糸結びつときつ。或るは丘の上に小さういてし土筆つみて、ひねもすを蝴蝶と共に遊びくらして、なつかしき追風を袖にしめて、籠にあまるわかな家づとにせんなど、いかに面白くをかしう候はんと、今日學校にてはる子樣花子樣たちと、にはかに思ひ立ちに候ふ。御許樣にも、いかで〳〵まげて一日を此の行に加はりたまへかし、御許樣いらせられずばなど、むづかりたまふ君もおはするに。かしこ

○菫に添へて

麴町　榊原千重子

今日はいと朗かなる日和にて候ひしよ。君には何をかなし給ひつる。さぞや御美しき御すさみも候はんに、ものし給へる御文共洩し給へ。妾は君等が樂しみを以て、妾の樂ともなし侍らんかし。妾、今日は野狩を思ひ立ち候うて、をさなもの共うちつれ、終日野邊にあこがれ申して候。野中の小さき流に、小さき魚など群れて遊べる樣、こよなくやさしうぞ覺え申して候。此の菫は、其のほとりに美はしく咲き居り候ものにて、日頃より君が好み給へる花よと心付きて候まゝに、二束三束御目にかけ申し候。あはれ見ませ、此のこ紫匂へる花の色香、そも何にかたとへ申さむ。人はさめやすき色とや申さん、はたうせやすき香とや申し候ふべし。されど〳〵、妾は君よりの御さとしありしより、一人護ひ申すは此の花にて候。あゝ此花よ、君が愛深き御心もて、御机の上に、あるは御書棚の上にかざられ給はんには、花もいかに幸深き此の身と、さぞや嬉しく思ひ侍らんにと、花の心のいとゞあはれげに感ぜられ候故、夜に入りて候へ共、使の者はせさせて、み住居おどろかしまつる罪、いくへにも、みゆるし給はり度うて。かしこ

○京の友のもとへ

山口縣　藤井康子

花の都の御住居、日毎〳〵に嵐山、吉野の里へ櫻狩の御催しやし玉はふらん。岸の夕榮、さては霞深く朝露をふくみし樣や、如何に美しうしほうしうこそ候はめ。都ならぬ片山里の森の櫻も、かすみと共に紅深く匂ひそめて候。清らな風。去年の野邊は、今をこそと君待る頃に、美しう錦をきそひて、春香したゝる褥まうけて侍る芳草の樣ぞ、いといぢらしく候ふ。人こそとはれ、森のさくらも春を忘れかねてにや、色香も一しほ深う氣高うて、さながらに無垢なる乙女のそれにもまして、誠に可愛ゆく麗しく候ぞや。むかし、ゆかりの花にしあれば、なにとぞ〳〵哀れとたに思召して、御學び業もすみなんには、一日も早く〳〵歸り來ませ。世にならひ多き夜半の嵐の吹かぬ間に。

短篇小説

広津柳浪選

天

〇奥様の琴

岩代須賀川本町　服部水仙

内の奥様此頃はさつぱりお琴をお弾きなさらない去年の二月に旦那様が、お出征になつてから此方。丁度あれは二月の九日であつた、旦那様が明日はお出征と云ふ前の晩、大層よいお月夜の晩であつたが、旦那様と奥様と、琴と笛の合奏をなすつた。悲しい様な哀れな様なお歌で……陰で聞いてた私達も思はずホロリとしたのであつた。

其の時から少しもお琴にお手を、お觸れなさらない。何故とお聞き申ても、たゞ微笑なさるばかりて、それでもお琴は大層お大切になさる。毎朝お掃除の役はいつも私なのだ、それがまた私に取つて、此上無い樂しみなのだ、私の様な者がはたきて敲いてもコロンコロリンと優しい音を立てる。それだのに、あゝ奥様がお弾きなされたなら………

今年も最早秋になつた。相變らず毎朝お掃除するお琴は怨めしい音を立てる様になつたが、奥様は如何な淋しい日でも決してお琴をお弾きなさらない。朋輩のお竹どんはいつもこう云ふのだ「奥様は旦那様が丈夫でお歸りになつてまた合奏をなさるのを待つて居らつしやるのだと。

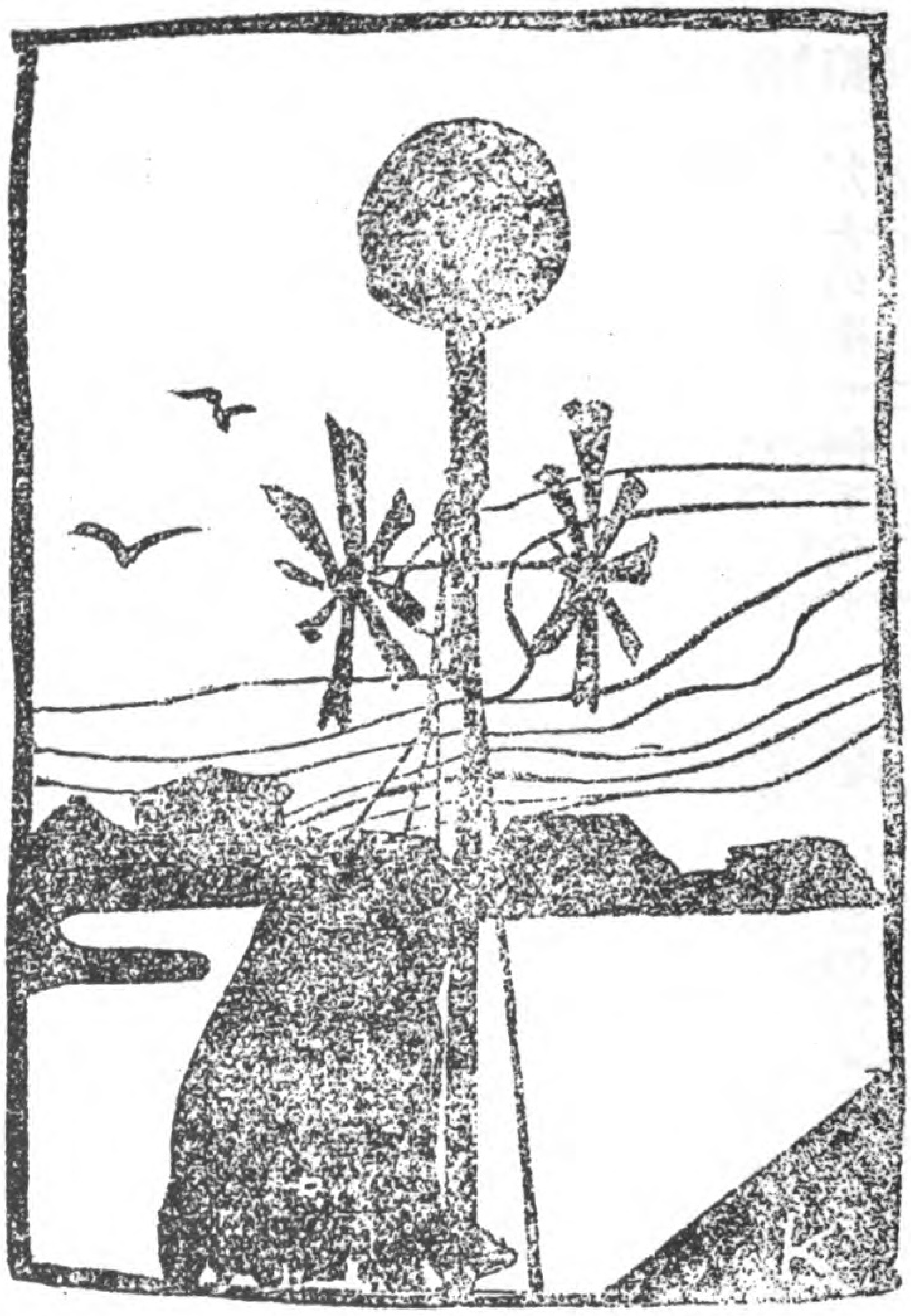
お庭の青桐の一葉がサラ〳〵と散つて、降りそゝぐ雨の音淋しい、何となくもの淋しい日であつた。電報！の聲に私が受取つて、机に向つて何か考ひて居らつした奥様の前に差出した時、その時、幽かな震がお唇に昇ると見る間に、開かれたみ手はワナ〳〵と震ひ、お顔は眞青になつて、ワツトばかり……あゝ、其時私は如何して宜いやらわからなかつた。やがてつと起つて佛間にお入りなされた奥様は、やがて現はれた奥様はあゝ舊の奥様では無かつた。彼の房々としたみ髪は、根元からフッツリと………………

あゝ旦那様は戰死なされたのだ！

奥様は切下げ髪の未亡人になられたのだ！一月許過ぎてから、旦那様の遺骨は、遺品と一諸に到着た。血に汚れた軍服、血糊の附着たサーベル、破れた軍帽、皆思ひ出の種なる遺品のうちに、彼の笛もあつた。然しそれも昔の儘では無い、弾丸の爲めとやらて、真中から二つに折れてあつた、奥様はそれを見て大層お泣きなさつた。

或る日の事である、いつもの通りお琴のお掃除を始めると、如何した途端か一本の糸はプッリと切れてしまつた、あゝ私は如何仕様お大切のお琴を……と泣きそうになつて居る處え、奥様はお出でになつた。私が涙を流してお詫するのを默つて聞えて居られたが、引出しから小刀を出されたかと見る間に、糸は怪しい音を立て、空に飛び上つた。お怒りの餘りかとはッとして、御袖に縋ッてお詫するのを「いゝえ心配するには及びませんどうせ用の無い琴ですから……」と微笑なされた其顔の淋しかつたこと………

（評）傑作なり、一種の際物に相違ないけれど、戦争を客として、奥様の琴を主として、着想の清新なところ、幽玄なところ、人情も籠つてあれば、詩趣も含まれてある、上乗の作。



端干「地賞」　麹町區平河町四ノ二　加藤豊子

人

○春の一夜

鳥取　遺花女

お隣りの清子さんがいつもの風琴練習、今迄聞えてゐたゆかしいマルセーユの調曲もはたと靜止しまつた

「お母さんもーお寢みなさいませな」

「はい、まだ十時も聞かんやうだよ、おまへこそ毎日の職務さぞ勞れたであろー今夜は私が後殿のお役するから先にお寢みよ」と、優しい母の言葉うけて、娘はたゞはいとばかり

五分心の洋燈の下で母と云ふのがいさゝかの縫物に指

を運ばせて居る、年の頃は四十路は五ッ六ッ越えし樣どことなう氣尚き風姿見える。其對向ひに机上てしきりに鉛筆を手帖に走らせて居る前髪ふつくらと總べて母に劣らぬ品のよき娘廿の上は未だ二ッ三ッと推察られる極質素な服裝凛とした所が備はつてゐる、今しも鉛筆の先削りながら、

『お母さん、敬一は本月に入つてから一度もよこしませんね、先度の手紙は廣島に修學旅行するとか言つて居ましたね、』

『さ、そーであつたが』とさも神經質の物愁の面もちて針持つ手は膝の上に憩はれて居る。

母は重げな口を開いて、

『靜さん、おまへに斗りつらい思ひさせてね、ほんとに私も一人の娘にと思ふと、胸は裂けるようだよ、昔のまゝならもう孫の顏見るのだが、おまへも知つての通りお父樣のご病性營養が第一だとの事で何も角も財産を入れ盡したが、今となつては其れも水の泡で女の私不甲斐なこと、せめては、敬一だけはどーでもして世に立つ人物にしたいと思ふのだが何を言ふにも先立つものはお金の世の中、おまへの緣談についても、恐ろしいは世の人だよ……』

と、微かな嘆息ほつと、果ては怪しの露眼中にうるほひ、折柄柱時計はチン〳〵と十時の報知、洋燈心は厭にヂッヂッと何か無形の意味ありげに……、靜子は母の言葉を聞いて浮世のそれと言ひ身の不運今更悟つたのではない、疾うに自覺して居る萬事の境遇共にアッと泣きたき胸中の苦しさを露顏色に現すまじとの覺悟。

『お母さん、私はちつとも我身のとなんか思やしませんよ、私の今の境遇、女には不相應な學問をつけて頂いたのですから、ご恩返しのほんの萬分一にもと思つて斯うして俸職してゐるんです何もそうお案じ下さいますな、あゝ、忘れて居ましたわ、少ないですがこれ丈敬一さんへ送つて置きましよう、』かと五圓紙幣一枚を母の前は出した、

凝つと見ていた母は、それは半分でもいゝがと、何となう遠慮の躰で……。なぜ『まあ皆な發送して置きませう、敬一さんは他人の中ですから不足勝てはよくないてしよう』と早や小爲替用紙の欄に明瞭と記した

『あの此間梅本さんが話して居たが、おまへ袴を調へるがよいわ、忠魂祭には職員一同が紫のお揃ひだといふだろう、人樣に後れないで早く爲るがいゝよ』

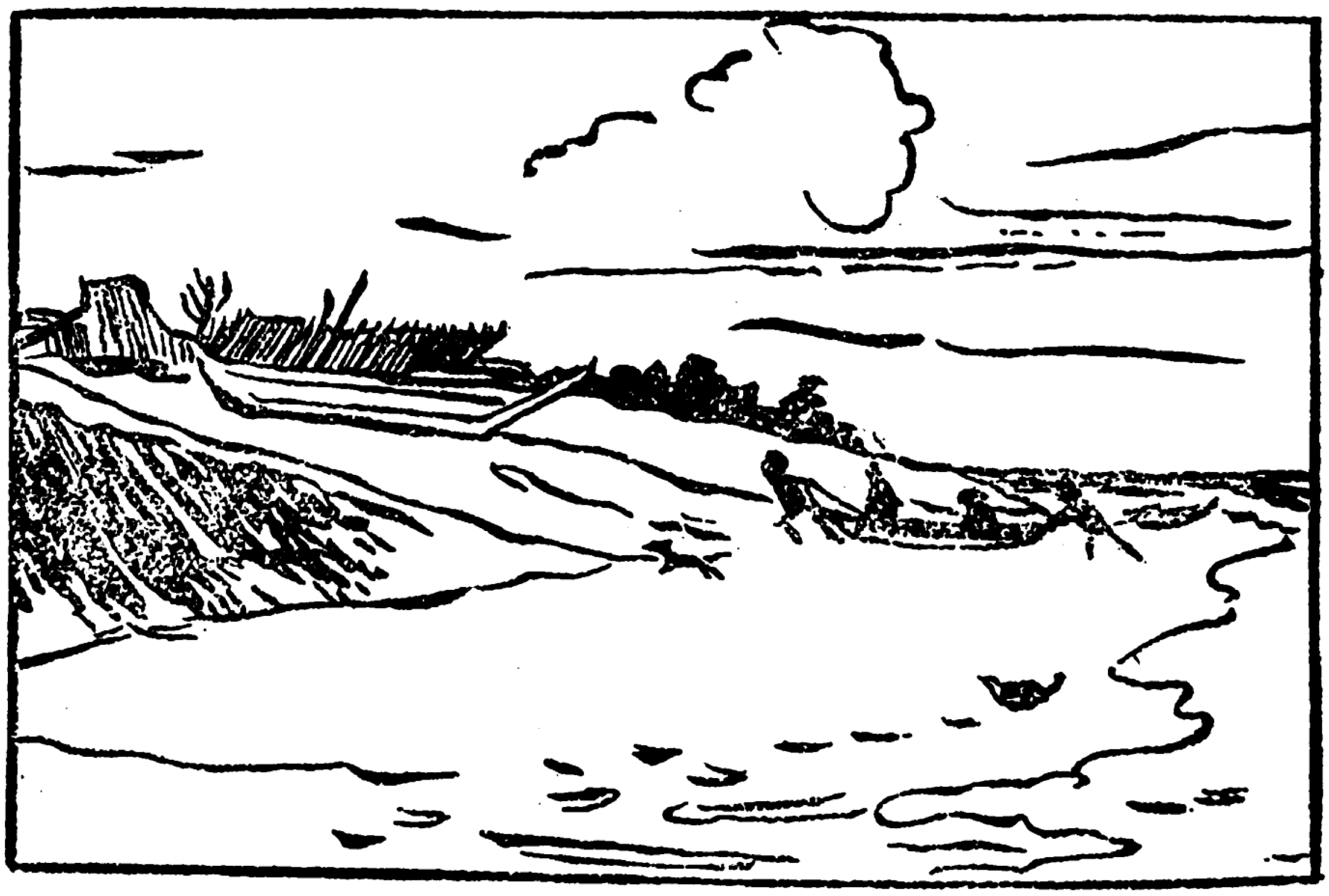
「ほゝゝ、あんな暢氣なこと言つて入被るんです、私ども人の先に立つ身ですから意氣な揃ひなんか、まさか爲なくても、神聖に酒灑なのか第一です參拜などに服裝は何でも構はんてす」といへば母は猶更に堪へぬ感情らしく、敬一が卒業の上世に立つた曉には親にも勝るおまへの恩はきつと報させるからね今暫時我慢して下さいよ

「あれ、お母さん、また其樣な事、お母さんこそ、召使ひも居ないこの生活と不都合でしようが時節の到來までお許し下さいませ」

「いそ〳〵私こそ、ほんの水入らずの親子二人暮し何一つ不自由も無い身て、この上は罰があたりますわ、」

折から鐵瓶の湯ぶつふ〳〵と沸へる音に氣づきて靜子は母の好みの玉子湯手早く調へビスケットと共に、召し食りませ、と進むる容姿とその心、……神は見透して在すであろう、敬への庭に鞭を取つてゐる靜子は終日ありし幼兒のあどけなき話、或は號外のそれなど專ら母の慰安につとめ共に臥床についた。

海邊「人賞」　埼玉縣北葛飾郡豐目招　伊藤仲子



（評）集る小說、多くは戀だの愛だのと男女の事が多い中に本篇の如き純粹の母子の情を描したものは珍しい、少し力が足りないやうだけれど、純潔に愛てゝ採る。因に云ふ、今回は『地』賞に相當するものがない乃ち之を以て『人』位に置く。

秀逸

思はぬ縁

神奈川　中村三重子

ねえ千代子さん、話して下さいな貴女と妾は昨今の友人と違つて幼い時から深く交り、人に云われぬ事迄打明けて姉妹も

及ばぬ程の間柄であるのに今度斗りは不思議でならないわ、そして大變やせてねえ、顔色も眞蒼よ」と云ひながら覗き込んだのは、千代子とは至つて親しくする花子である、「そう、そんなに痩せて？」

「あゝ病氣にでもなると大變よ。其に、あの、貴女はいよ／＼三和田樣へお嫁でになる樣になつたんだつてね、三和田樣は大そう名望のある方だつてそれは評判よ」千代子は友の顔を一寸見て無言の儘又うつ向ひた

「そしてあれは何夜でしたつけ、朧月の影を蹈んで日比谷公園を逍遙た時櫻の木の下で互に手を取りかわして誓つた事を覺えて入らつしやるでせうねえ千代子さん、妾は貴女の内部に屹度入り込んだ事情が有るんだろうと思ふから伺ふんですわ、千代子さん、樂を共にする斗りが朋友ではないでせう。何卒貴女の胸中の涙を妾にも分けて泣かして下さいな、ねえ千代子さん、聞かして下さいな。」

切も暖かき友の心かな、如何なればとて之が言わずに居られ樣。

「花子さん！貴女は其程迄妾を……」と犇と花子の手を握つてぱら／＼と涙を落した。「花子さん、聞いて下さいな此事は兩親にも話さないんですけれども…お話すれば何でもない樣な者の矢張り妾は氣が小さいのだね、いくら氣を廣く持たうと思つてもあの一郎の顔を見ると、如何しても泣かずには居られないのよ、あんな不具の身となつたも妾の爲め、如何に不自由だらうと思ふと、妾はもう堪へられないわ、それにいくら幼小な時からお父樣やお母樣の御恩になつたからと云つて妾には命の親ですからね、あの時一郎が來てくれなかろう者なら妾は燒け死んで灰になつて仕舞つたんだらうに……」と十餘年前の事を今更の樣に又呼起して身振ひした。それに今では下男同樣に働いて居るんでせう、妾可愛そうでならないから、母樣に話したのよ、そしたら「いづれ父樣に相談して遠縁の者ではあるし妻を娶つて別家でもさせるんだらう」と仰つて入らしつたら丁度いゝお嫁の口があつてね、一郎を呼んで母樣が話したら如何しても聞かないのですつて」「まあ何故でせう、そして一郎さんは何才？」「最う二十七なのよ、だから早い所ではないのに何と思つて居るんだか、一寸も分らないの」「そうねえ」「ですから猶氣になつて妾も一郎が身の條りを付けぬ内は緣付かないつもりで居るんだけれども……」「だつて一郎さんとエンゲージした譯ではないんでせう？」

千代子は一寸赤くなつて「そんな事はないわ」「それではいゝじや有りませんか」「でも何だか氣が咎める樣で」と又しほれた。妾は分かつてよ、貴女の胸中は十分にお察してよ、千代子さん！浮世はまゝにならないのねえ」二人は犇と抱き合つて、花子の涙は千代子の膝へ千代子の紅涙は花子の袖へ。

＊　＊　＊　＊　＊

去年の三月、巴里から歸朝した三和田子爵の長男、俊治氏は、貴族院議員松岡祐彥氏の令孃千代子と結婚の約整ひ、桃の夭々たる好期節をトして、大禮を擧げると言ふ事は、一家親戚知己ばかりではなく、貴族社會、交際社會、文學社會、それからそれと、波の岸に寄せて來る樣に、其處此處と到る處に傳へられてそれは〱一通りや二通りの評判ではない、それに俊治氏の執心は非常なもので彼でなくては、一生妻は持たぬと迄言つた位な娘を首尾能く妻とするとは、何たる幸福な事であらう。

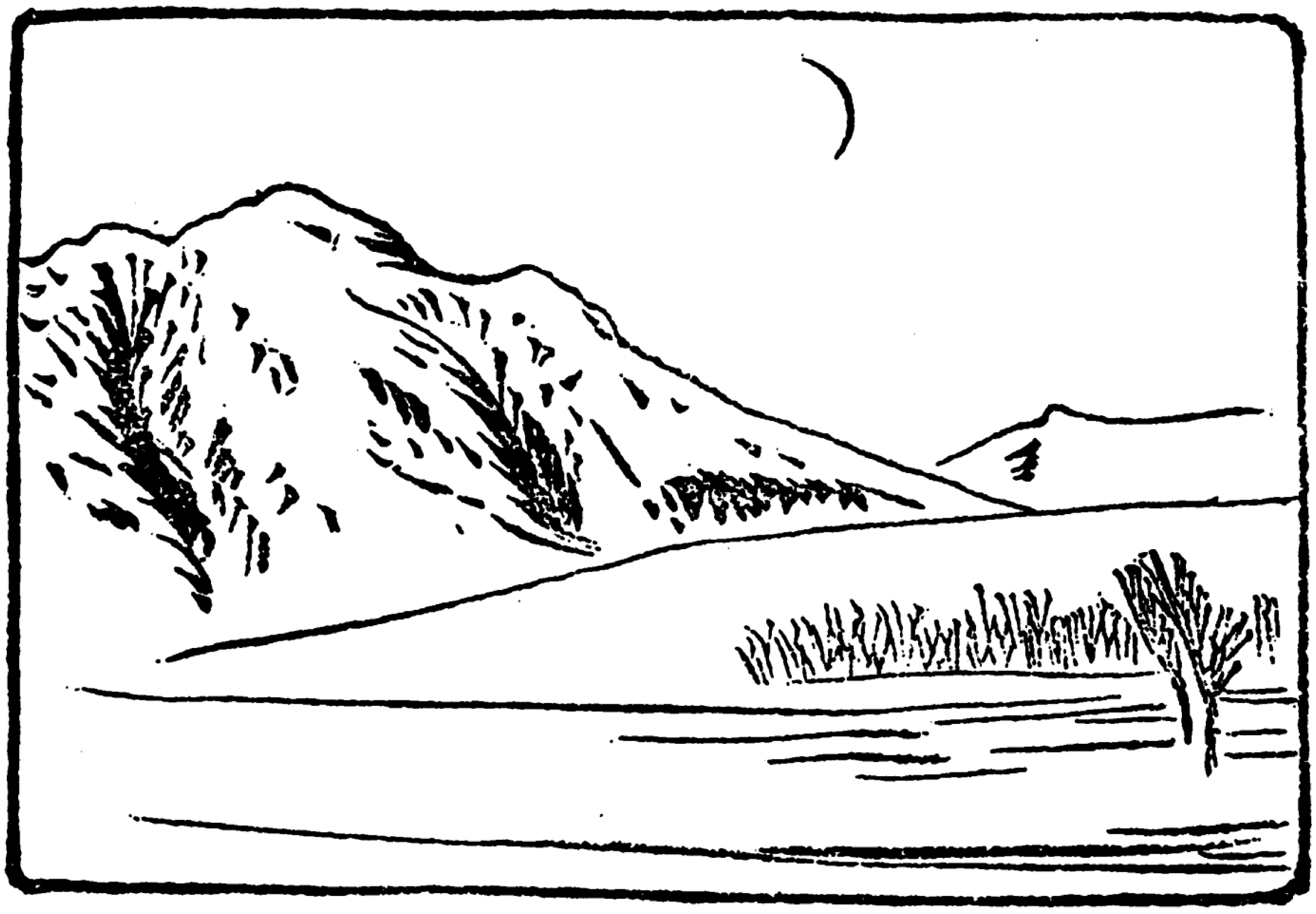
今日はいよ〱其當日となつた。千代子はしぶ〱仕度をすませ、迎への馬車へ打乘つたが、今更名殘りの惜しまれて、ふり返ると玄關の柱にもたれて、此方をヂッと見て居る一郎の姿、面色もさながら土の樣。千代子はハッと胸を打たれて。顔をそむけた

＊　＊　＊

其翌日、一郎は誰にも告げず、此松岡家を立ちのいた

部屋を探ぐれば（千代子樣）として紙包みが一ッあるのみ。これは幼き頃千代子が彼に與へた栞であつた

小牧山の冬　〔賞外〕　愛知縣豐田　平野俊子



（評）別に變つて奇拔な處も無い代り、すら〱書き下して筆致能く

竪って居る、一郎と千代子との關係をくどく書かない處に却って味が深い

○春の雨夜

越後　藤花小女

靜さんズットこちちへ御出なさいどうしたの大變顏の色もわるいし何だか考へ込で御出のやうだねー御母さんは御前の此頃の樣子を見ると私が若い時分一時の心の迷ひから生涯取りかへしのつかぬ今の身の上になつた其時の私の心の狂てゐた樣子によく類似て御出ので私は心配で心配でたまらないの

さして數寄を籠らしたといふ程ではないけれど何となくこぢんまりと淸楚た四疊半に身軀を前の方に少し出げて爪細の華麗な手を長火鉢にかざしながら透き通る程白い大理石で彫刻だやうのむつちりとした頰に首筋からかけて惜し氣もなく亂れかゝつた束髮の後毛を掻き上るでもなくうつむきがちに憂を帶びた眉の濃い二重眼瞼のパッチリとした下脹のどことなく愛くるしい人好きのする二九か二八ばかりの娘の顏をのぞくやうにして斯う云たのは花野蝶子といふ老女である

歇むだと思た雨が急に又思ひ出したやうにポトリ〳〵と如何にもだるさうな簷溜の音に今迄春の夜の暗を劈ついて聞えてゐた妻戀ふ猫の赤子の鳴くやうないやな叫び聲がハタと熄むで何だか襟もとから慄然と水かけられるやうな淋しい陰氣の氣がスーと部屋ぢう立ち籠るやうの氣がして思はず二人がソット顏見合せて暫し話が止絕えたが間もなく力のある重い聲で御前の身の爲を思ふからこそこんな恥かしい昔し話しもするのだからよく氣をちつけて御聞きなさいよ

私の娘盛の十七の時でした今から考へると其時分の私は何て馬鹿でしたでせう然し娘心は大概あゝしたものか知らんねー靜さん……まあ一寸した御話が顏を洗ふにも雨の日御琴の稽古にゆくにも水溜りさへあれば足駄の齒の水につかるを氣づかふ風して人が見るかと胸に波立せながらソット水鏡に自分の顏を寫しては自分ながら美しさに人知れぬ高慢の笑みをもらして喜てゐましたそして女は器量さへよくばどんな玉の輿にでも乘られるものとばつかり思てゐましたのに乳母が時々の自慢話しに御家の御孃さんは御美麗でゐらつしやるからよい御緣談が雨の降るやうに御有りなさるなんて聞せるものですから其度每に紅葉を頰に散らしながらも私の心はもう〳〵誇の絕頂にまで達してゐまし

た

するとゝうてせう忘れもせぬ私の十九の春しかも三月彌生のなかば錦の帷帳を掛け連ねたやうの常盤ゲ岡の長き花の堤に御近傍の娘さん達と私と供二人に乳母として櫻狩りに行た事が有りましたが嗚呼其時其時てした忘れがたなき深い〳〵或何ものかを小さき胸のうちに植ゑつけられたのは……其譯は御前大てい察しがつくだらふねーそれからといふものは性質が一變してしまつて、膽太くも親の許した許嫁の夫を嫌て〳〵嫌い拔てとう〳〵破談にしてしまいましたの其うちに重なる不幸が打ち續てそれを苦にして御兩親は引き續き、九、十、と一ケ月後くれに梧桐の一葉と共に私に心を殘して御逝去遊す人は相撲屋の我儘娘それみた事かと誰れもかまつてくれず遂ひ一年二年と自分の淺はかさを後悔してゐるうちに婚期を失てしまつたから自分も斷然覺悟して產れた許りの御前を貰て親が娛しみにとて敎へてくれた茶の湯で以て今日まで處女であぢきなき月日を過してきたのだから御前も爰は十分考へて私の意見通りに正さんを養子にする事におきめなさいねー爰まていひて老女の話しは途絶えた

降り出した小雨もいつか歇みて春の夜の沈として聲なき眞夜中すぐ筋向ふの寄が閉ねたのであらふ急にけたゝましい拍子木の音がしてやがて車の轢轢ときしる音にどや〳〵と足駄の音下駄の音が打ちまぢつてひしめき合ふ男女の聲が非常に騷がしかつたがそれも間もなく火の消え



裁縫【賞外】　能登輪島　杉下ふみな子

たやうにしづまりかへつた頃艶かしい雪駄の音チャラ〱とふだんきゝなれた咽喉自慢の平吉さんであらう家の軒並をすれ〱に通りながら

　親の許可したとのごを捨てゝ
　　なんで行末がめてたかろ

（評）對話も一通りであるが本篇の特色は間に挿んだ敍事にあるので なか〱實地にあたつた處がある。

○摩尼水莊

伊豆　加藤溜子

一

麥生の間から潺々流れ出て、末は菜の花の中に、消えて行く小川の畔に、此の村きつての名物藤の花が古句其の儘の姿で咲いて居る下を、二人の若い女學生の語り乍ら行くのである。

櫻木重子と其の友、小泉八重子とは此の日、友人高山磯子の、先頃から病を多磨川は、青山の邊の別莊に養つて居るを見舞ふ爲、重子は寫生帳を、八重子は樂譜の帳を懷にしていつた、重子は繪の道に志し、八重子は西洋音樂を學んで居るので、一人は春の意の美しいのを寫し、他は春の意の樂しいのを歌つて病む友を慰めやうと思つたのである。二人の國分寺の村はづれに來た時は、山を太陽が餘程遠ざかつて、路傍の草に朝露のまだ晞かぬ頃であつた。

同じ浮綾甲斐絹の傘に日をよけて、髮をエス卷にして白のリボンを結んだ重子は紫根矢飛白の紋縮緬に白羽二重の襟を正しく重ね、厚板小葵の地文に八ツ藤を金通しに散した帶を、高く結んで、樺黄色の扱帶を締めて居る、傍の八重子は紫根地雪降り笹の紋縮緬、青竹の地に金通し狂牡丹、模樣の思ひ切つて大きい繻珍の帶をやの字にメ、欝金縮緬の扱帶を締めて居る、夜會の髮に押した藤色リボンは時々風にゆらめいて‥‥‥

「好い景氣だこと八重さん」

「こんな好い景色はありませんね、重さん寫生なすつては如何？私はね―重さん、此樣な景氣を見る毎に氣が清々してくるのよ」

春の扇の夜更に蝶の夢をのせた樣に、心は早、邊の山に飛んで行つたのである

「左樣ね―、私、寫生は磯さんのお家へいつてから彼の池のそばの錦雲亭で爲ようと思つて居るのよ」

「本流に彼處の景色は別段ね」

多磨川の邊の村端に、繪の樣な邸宅が見えた、之こそ

高山晴幸が自から名を命じた、磨尼水莊である。

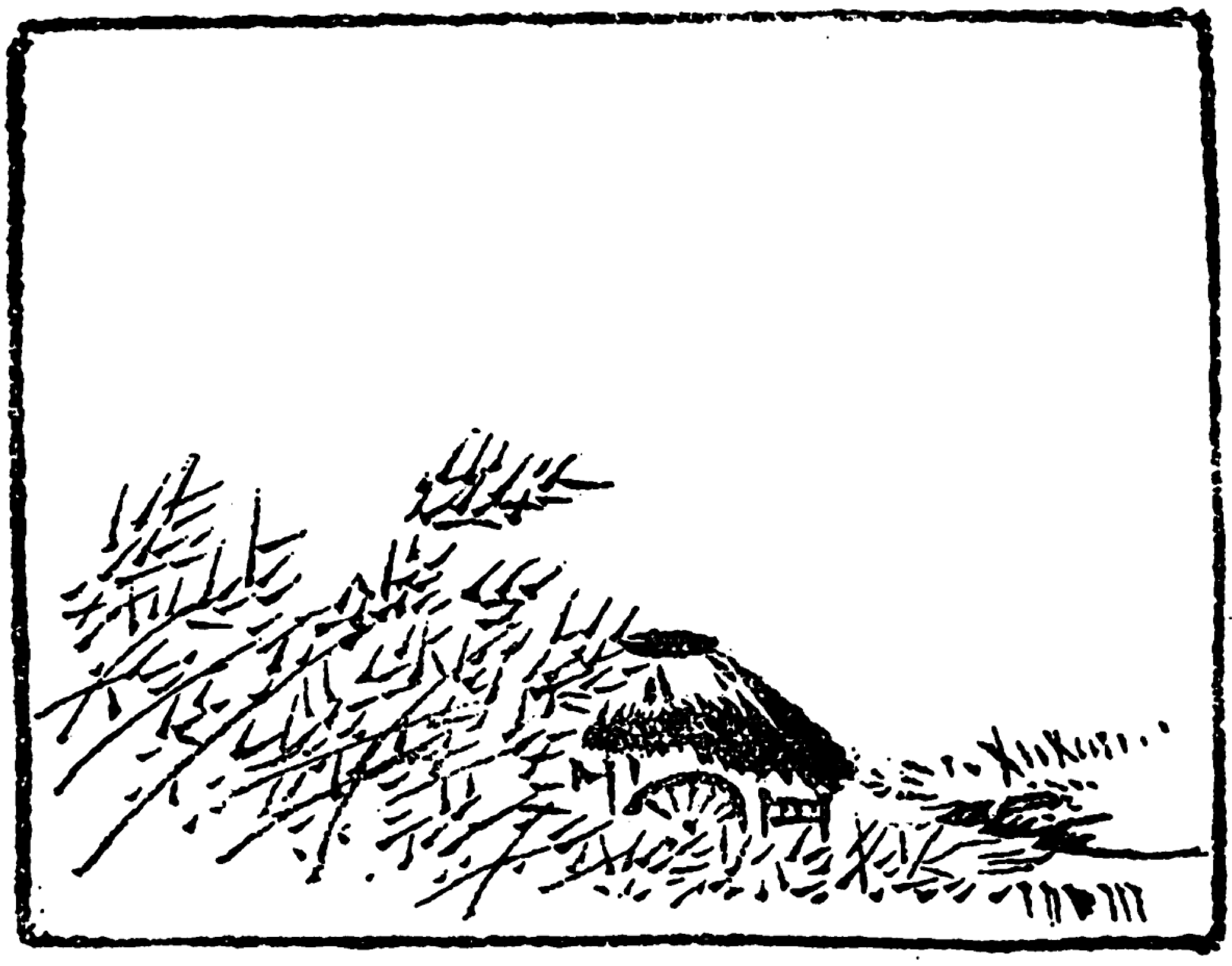
二

『磯さん、貴孃の氣落なさるのも最よ、私もね、貴孃の御心は、御推し致して居ますがね、何しろ肝腎の貴孃がなほ惡くなつては、亡い御母樣に、濟まないではありませんか、ぬ磯さんこの處をよつく考えて御覽なさいね』

金泥銀泥で、古代な蝶を畵いた地袋を後にして、油氣の無い髮を、無造作に束髮美しい肩當を、した八丈の搔巻を額まで被つて、雪のようなシートを敷いた同じ物の布團に身搖もせず、伏つて居る磯子を、さし覗く樣にして八重子は云つた、續いて重子は、

『ねえ磯さん、八重さんの仰る通り早く、よく御なんなさいね、私だつてね、十三の秋父を失つてよ、其の二三日と云ふものは泣いて日を暮したの、病人に此樣事を云つては惡いけれど、其の後は病氣にでもなるかと思つたくらいなの、私はねー磯さんこれで病氣にでもなつちや大變だと思つて急に氣を變へたの、それでね、其の明日からと云ふものはもー泣くのを止めてしまつたのよ、ですから貴孃なんか、氣を大きく持つが一番ですよ、ね、最早氣を强くして、此樣話は止して外の御話を爲ませう、さ、さう被つていては、上氣ますよ』

水車　〔賞外〕　福岡縣浮羽　古賀つれ子



顔に憂は有り乍ら、聲は花やかに、そつと夜着の襟に手を掛ると、今は素直に友の爲す儘に任せた磯子は、白つぱいフランネルを重ねた荒い銘仙の袖に、顔を被つて泣いて居た。

『何だか暗く成てねえ磯さん』

ふと立つて障子際に寄り添つた八重子は振り返つて、

『磯さん開けたら寒いでせうね。』

『いゝの陰氣だから。』

『ぢや開けますから能く掛ていらつしやいよ。』
雨に黄昏てはゐるが、さすがに外の名殘の光りが明かに室内へ差し入る。
『磯さん一寸此方を御向きなさいよ、鯉が可笑いわ、あの藤の花を食ちや出しゝて居るの、貴孃寒かないの成る丈咳かない樣にして、早く御癒りなさいよ、ね』
『エ、直癒るわもう大丈夫よ、あら藤が大變に冷めてねえ』
『あら、起きちやいけないわ、さ寐て入らつしやい、ねね磯さん藤は寐てゝも澤山見えてよ、さあ、掛て上げますから』
となだめる樣に八重子は云つた、
『いゝの、松は如何したのでせう、洋燈を持つて來ればいゝのに、松や……』
呼ばうとしたが、風に當つた故か、俄に咳き始めた。
『だからいけないのよ、燈は直に來ますわ、貴孃餘り氣を使うからいけないのよ、ねえ小泉さん。』
八重子はうなづいた。

三

大塵の紙間、六疊を圍んで、黒柿緣の火鉢の灰、吉野紙の樣な淨灰を衣て、直筒の鐵瓶は、蟬時雨、とばかり湯のたぎる、猫板の上には九谷の急須と茶碗、
『まあ、大變咳いて苦いでせう、あら被るのは御止しなさい毒だから、今御湯をあげますからね』
云ひ〳〵立つて、茶碗を取り出した重子は、今しも湯を注がうとした時、松がパッと明く洋燈を持つて氣遣はしげに入つて來た、
『恐れ入ます、私が……まあ大變御咳き遊ばして』
『否、御湯は私があげるから、洋燈をお持ちだつたら此方へ、……磯さん、ハイ御湯、』
束髮は、がつくり仰いだ。
『ア有難う最早よくつてよ』
咳の留つたのを見て、松は嬉しさうに、
『有難う御坐いました』
『松、御伯母樣は』
『御室に御居でゝ御坐います、それから御孃樣へ』
『何か御云ひになつて』
『ハイ、あの今夜は是非何か召し上りましと仰せになりました』
二人は目を見張つて、
『ぢや磯さんは何もあがらず？』
『ハイ、あの幾何申し上ましても……』

「左樣？ぢや困るはね！、磯さん何かあがらなくつては、身體が弱るてはありませんか、ね何か召し上らないといけませんよ、まあ松さん餘り心配しない方がい〻のよ」

「左樣で御坐いますが重子樣、私は、御孃樣の毎日、御痩遊ばすのを見ますと誠に……」

云ひかけて窃に見返れば、磯子はいつしかすや〳〵と寐むつて居た、

『まあ御前さんまで泣かして磯さんは如何するのだろう、もう御泣きでない、それに磯さんも御寐みの樣だから、あら奧で御呼の樣よ、ぢや心配せずにいつていらつしやいよ』

ハイと幽に答て松は出て行つたが、程なく引き返して來て、

『どうも有難う御坐ました、それからあの、御日永ですのに大變遲れて失禮致しました、彼方で何卒御飯をつて……此方は私が御代り致しますから。』

＊　＊　＊　＊　＊

其の後數月程へて、此の靜かな摩尼水莊から、笑聲がもれ出た、同時に本邸へ歸つて磯子は、間もなく女子大學へ入學した、松は如何したろう、此地から三里はなれた里の村長某へ嫁つたと云ふ事だが。

（評）ほんの病氣見舞の紀事文と云つても好い位な、小說的脚色のないものであるが、筆づかひは如何にも器用、沈着でもあり周到でもある、流石は女性の作たるに背かない。

〇秋の夜

京都　小百合子

「ね、美いちやん、解ッたかい、解ッたら何う乎母樣の云ふ事を聞いてお吳、可いかえ」

答は無くて、我が膝に取り縋りつ〻、泣きくづるる我が子の態のいぢらしさに、母は今更可愛さの、一層增りて、地へ離さまで、涙は頰に流る〻なり

秋は宵、只さへ物悲しきに、たそがれ、暮より降り出せし秋雨の小止みなう小窓を打ちて、細く燈せし籠洋燈の蕭々と音する夜なり、

「母樣、お祖母樣は何故母樣に出て行けなんて、仰るのッ」美代子は、涙に濡れし瞳、睜然と視開きて、母を見上つ、

「何故ッて皆、母樣が行屆かなかッたから――惡かッたから……」

「然う？」美代子は、力無く答へて暫く、小首傾けつ〻有しが、

「ぢや可いわ、母樣！、私お婆さんに謝るわ、今まで

は誠に惡うござんしたけれど、之からは氣を附けますからッて母さんが謂ッてましたから、何うか勘忍してあげて下さい、もし聞いて下さらなきア、美代も母樣に附いて適きますよッて云へば、お婆さんは必と許して下さるわ　ね母樣、私而謂ッて謝ッて來るわ」善き事案じ出しぬと計り、美代子は俄に勢附きて立ち上り早や襖に手をかくるを

「あれお待ち」母はそが袂引よせて、己が膝に懷き上ぬ

今年十才の、蕾の花、日頃は怜巧氣に見へても、未だ小供、常、自分が悪戯過ぎて、叱られし時の事と思ひ競べて、母の罪とやらも、詫びさへすれば、容易く許さるゝ事とのみ思へる心根の、扨もいぢらしやと、母は犇と美代子を懷きしめぬ。

我身に罪ありて去らるゝならば、さこそお恨も無けれど、夫の出征中に、家の書生と姦通したりなぞ、露覺なき、いまわしの濡衣着せて、夫には一言の相談もなく、お去り遊ばすとは、姑上も餘りな、さる事をもしも戰地なる良人に聞きまさば、何と思召さん。

日頃より我がなす事とさへ云へば何一ツお氣には召さで、召使の前も憚らずのおてらしめ、面赤うして涙呑みし事も幾度。

然りながら、是も皆我身の不足ぬから故、お憎しみも無理ならねど、さりとて今は斯く、美代てふ者まで、有る中なるを、如何に爲さぬなかの孫なればとて、生木を裂く如き事は、なし給はずとも善からんを、雄々しき御心には、愛も情も知り給はぬにや。

我ありての時にてさい、美代に對して彼のなされ方、增して無き後はさぞや罪なき乙女をと、子を思ふ親心の可憐さと氣遣はしさに氣もそゞろ、今まで忍びし涙の一時に堰を切りて、懷きしめたる美代子の前髮に、沸ゆる涙は霰と降り、お恨しき姑上樣、と屹と奥の方睨みつ

「美いちやん!!!……」

「はゝ母樣……」

離れじと母の胸に縋れば、母も亦美代子を永久にはなさじと……

秋の夜は稍更けたり、小萩の露のはらはらと散る音、さては風になりしか。

（許）是に似た作は世にいくらもあるべし、作者扮本なくして此れだけの鉄ありとすれば、實に見上た手腕と言はれねばならぬ。

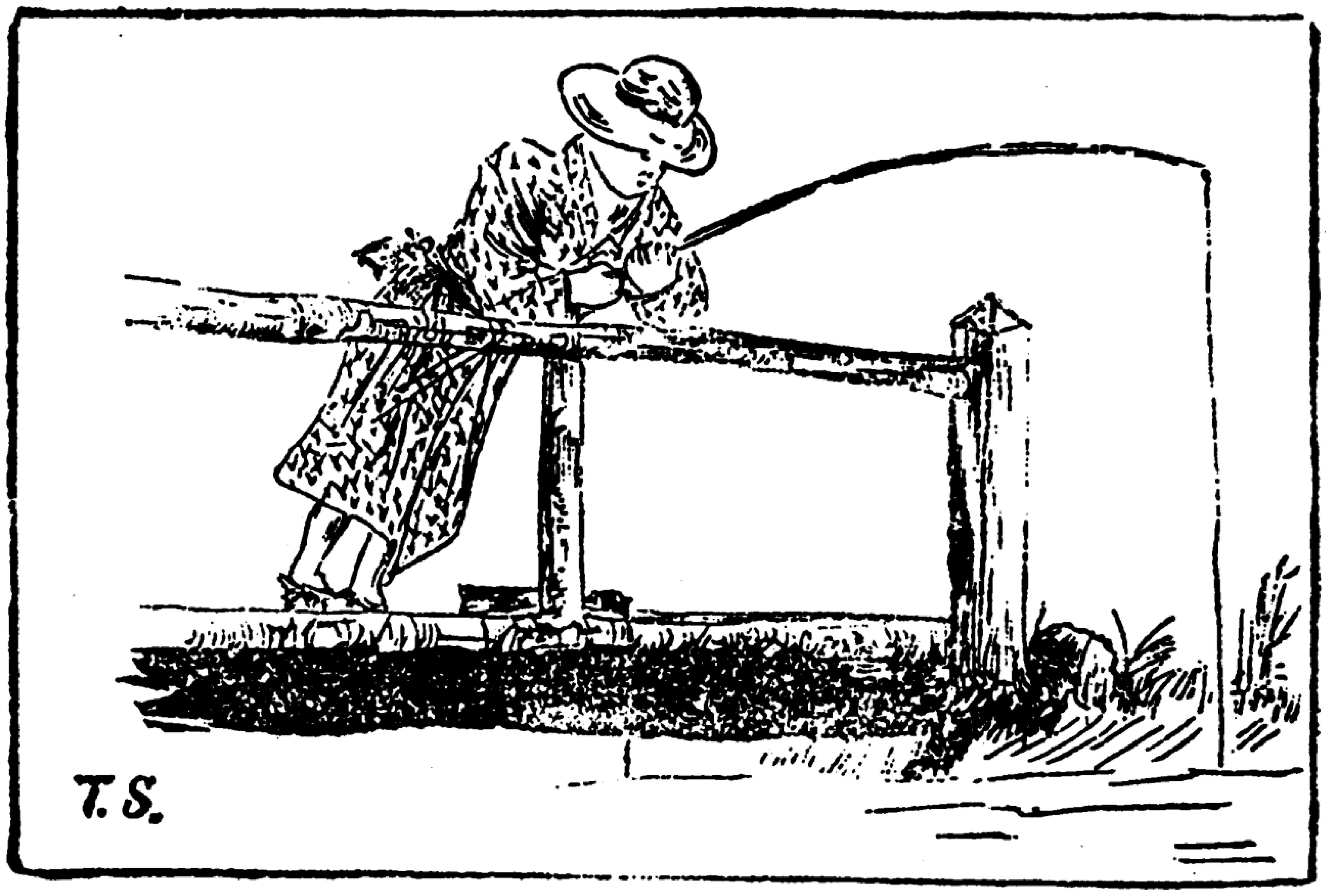
○懺悔

能登　杉下ふみを

妾の御友達に高森美代子と云ふ同情に富むだ極く心優しいお嬢さんがございました。妾とは大の仲善で、いつも遊びに參りましては、ヴハイオリンを彈いたり、讃美歌を歌つたりして居りました。美代子ちやんには一人の兄さんが居らしつてお名を正一様と申しました。中學へ通つて居らつしやるので、年齡は十八九でもござんしたら、色の白い優形の本當に上品な方でした其お方があの何でした、そつと妾の袖にホヽヽヽヽヽハイそれはもう懺悔するのですから、何も悉皆白狀致しまし。妾はたゞ何となくあやしう胸が踊りまして、恐し物にでも出會つた樣、また嬉しい物を得たやう、無我夢中に人なき所に駈け行きました。手がふるい腕がどき〱して、やつと封を切りて見ましたら貴下、妾の樣なものに細々と有難いお言、妾はたゞ樂しい天の御園生へでも往つたやうて、惘然して、自分で自分を忘れてしまいました。それからと云ふものは、ものに醉つたやうて焦るゝ心の遣る瀬なく、忍ばうかとまで思ふた事もありましたお母さんは、早くも妾の素振を見て、聽くもそれと見て取られて時々それとはなしに御意見せられました、それは妾も戀てそ爲て居れ、正一さまとはお互に結婚の出來ない事情のあるといふ位な事は朧ろながら自覺して居りました。けれども其時は戀盛り、まして我儘な妾は母の云ふ事などは少しも聞き入れんでした。ところが母は遂に妾の他出を許しませんて、正一さまとの手紙の往來も絶えました。其間の妾の心、母が無理に引裂くのだと思ひ、その苦しさ腹立ちさ。

其のち三週間も經ちて、妾の慕しき正一様はお約束のお嫁さんを娶りました。それを聞

釣〔賞外〕　北豊島郡巣鴨　佐藤露子



きまして、妾は甚麽に悲しんだでございませう、甚麽に口惜しんだでございませう。人知れず涙を袖に絞つて居りました。

それからといふものは、正一樣を恨み母に腹立ちて無我夢中、到底常識を失つた妾の心の闇夜は、おつ母さんが親切にお諭し下されば下さる程、口惜くつて、情なくて、憤慨つた餘り、しまいには天にも地にもたつた一つしかない我家が厭になり、前後不見に女の家出……。どうして妾の樣な不孝者を、世間の人樣が庇護つて下されませう、いろ〳〵流れ流れて今は此姿。あゝ思ひますれば、妾が末永く御世話を致さねばならぬ父母を置き去り、大膽にも家出などをしたのでせうやつと浮世のつらい味に目が覺めましてから、もと家に居りました夢の樣な時を朧に辿ッて見ますると、其時のおつ母さんのお言葉が今になりては一々身に泌み口惜しくて口惜しくて、殊におッ母さんが涙に濕める目を屢々叩いて、出來ることなら、此樣な嬉しい事はないけれども」と仰有つた時の事を想出すと、居ても立つても居られず、お國の方を拜んで、勘忍して下さいと泣いて〳〵泣き過しました。其れから考へた上御兩親に今迄の事を謝罪したら、幾分妾の心も浮ぶのですから。思ひ切つて手紙で懺悔しました。すると貴下、有難いではありませんか此のお手紙。

妾はほんとうに嬉しくて嬉しくて泣きましたよ。

是れから若い人が妾の眞似を爲さないやうにと思ひまして、無理に人樣を捉へては、妾の懺悔を聞いて頂いて居るのです。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

是れは○○病院の一看護婦が、診察を待ッて居た妾に涙と共に語られた懺悔話です。

（評）看護婦の色懺悔には有りさうな一節、殊にそれを結局に於て明かにしたるは作者の手腕侮るべからず。

大塚楠緒子女史談

▲女子と文學●●●●●　平常考へて居ないこともありませんが、纏まつた話も出來ません、何に此頃は書くよりも、批評をする樣になつて參りまして、自分は少しも進むことが出來ないのです、女子の方では一葉女子などは、實に豪い方だと思ひます、然し女子は小說を書くにしても、境遇、地位に關係をしまして、自分の考を十分に書くことの、出來ないことがあります、一葉女史は固々秀才の方でしたろうが、彼迄發展なさることの出來たのは、一つは境遇だろうと存じます、女子は家庭を造りますと、俗務は多うくなりまして、机にばかり向ふて居るといふ譯にいきません、小金井さん、三宅さんなども一時は盛にお書になりましたが、近頃は拜見しない樣です、夫でも彼の方々は、既に一家の風をなしていらしやいますが私共はとても駄目です

はがき文

編輯局選

地

○あづま菊

牛込　紅子

鏡臺の上の東菊觸らば散らうかと心配なので、靜かに〱御化裝をしてしまひ、扨て立たうとする途端、危ふく紅絹うらの袖飜つて、淡紫色の花片がはら〱と飜れた。

あやまちにも詩趣を見出す

人

○火事

陸前登米町後舟橋　星　つるよ

錦のつゞれを引き裂くやうに、深空の星の悉く地に落ちて燃ゆるやうに、巨人が祈りの祭壇に萬本が蠟燭の輝のやうに、火炎は燃え上り燃え昇るけれども、町娘お七が吉佐を戀ふる胸の炎のその餘燼にも及ばないと思つた。

たしかに奇抜

秀逸

○妹の手紙

越後　杉本しん子

今年十一になる故郷の妹が優しく手紙に白蝶の一羽を封じ籠めて其文の終りに姉さん妾ほんとに可愛想なの此蝶が今朝籬の傍に死んで居たの、あなた大事に弔つて下さいな

埋めろならば草花の蔭に

○小女の夢

出雲　くれなゐ子

昨夜をかしき夢見てね、少女の云へるを引き留めて、如何なる夢と問ひよれば、少女は薄くれなゐに頬を染めて答へ得ぬてこそ答へなれ。

怪しき夢もあるものかな

○口髭

岩代　根本松江

三ツになる姉の子は、いつも弟に鬚を書いてくれと机の側から離れないので、弟が口髭を四本も書いてやると大喜び、まるで日露戰爭のポンチ繪そツくら。

安んぞ知らん、他日のカイザル式

○妾の想ひ　陸前　鈴木淳子

星の光を壷に溶いて、それを百合の香りに練り、美しい何鳥かの音を吹きこめて、簪に瓔珞、頸に首輪、腕に輪かけて、あの白雲にのつて碧瑠璃の空を飛んで見たい。

これは驚けり

○きらめく星　巣鴨　田中ふげつ子

戰はてた野の夕、まだ消えない砲のけむりは、夕風に此處彼處さ迷ひ、香よき草花の匂ひは失せて、歸りゆく鳥の啼聲は淋しく、美しく色どられた西の空、青白くきらめく星、あゝ、これ何の啓示であらう。

地の聲は天によみがへる

○兄様　伊豫　坂梨雅子

あゝ妾は兄様が商業學校に居られるを便りに妾もこの女學校に入學したのに時折り學校や下宿に訪ね見れば用事は何かと妙なお顔又偶に途で逢へば横向いて知らぬお顔眞身の妹を何故すげなくなさるのだらう。

これも世間の一面

○山家夏曉　越後　花野てふ子

眉より細き半鈎の月影は、桃色匂ふ東天の一方に殘れり。靜けき山中の孤村は、今方に明けんとすなり。涼颯々、冷露團々、心地自から淸きを覺ゆ。綠雲低く垂るゝ麓の方には東天紅を歌ふ鷄の聲幽かなり。

却つて斯る文體も珍しく思はる

○寫眞の銘　丹後　青葉女史

我れ小學卒業後、哀れ大洋の捨て小舟、風波の爲何等のなす所なく漂ひ迷ひし茲に二歳、今幸にして一導の光明を得、他郷の月を見んとなすなり、神よ!! 風雨をさけて妾を助けよ。即ち紀念として之れを寫すになん。

更に又幾年の櫛風沐雨、顧みて當年の姿の若きに驚く。

○見ちがい　長崎　松竹とく

庭前に植ゑ込めし三色スミレの花も二ツ迄咲きぬ花子の目には何と映ぜしかアラ蝶よと走りより後よりそつとつまんだ一刹那花チヤンそれはてふ〳〵ばなですよ

成程、飛ばなかつた

○ポチと小蝶　札幌　白鳥りう子

麗かな春の光を身にあびながら一羽の小蝶が愛らしい菫の上で白銀の様な羽を擴げたり縮めたりして居るのを愛犬ポチは小さな首をかたげながら不思議そうに、面白そうに見とれて居た

知らず、ポチも亦新派歌人の一人か。

○京人形　茨城　白菊女史

今迄咲き滿ちた藤の下で友達と元氣よく遊んでゐた、八重ちやんが泣き出したので、驚いて行つて見ると、抱いてゐた雪子を櫻の幹へぶつつけたので、痛からふと頭をさすつて泣いてゐた。

此子、生れながらにして同情あり

○天の星より

德島　佐友とき

天の星は美しう候。地の花もまた麗艶しう候。海の眞珠はさらに淸らかに候。あはれそれにもまして美しき優しき、情なり、慰藉あるは、戀しきなつかしき君にて候ふよ。

所謂理想の戀人か

○泣かぬ妾

羽後　鈴木しゆん

妾は泣かなかつた、實際妾は泣かなかつた、妾は泣きたかつたけれども泣かなかつた、それは、舅さんや姑さんが、妾の傍に居たからてあつた、舅さんや姑さんが妾の傍に居なかつたら、妾は如何に泣いたてせう。

夏寶と答へて嫁の涙かな



○散る花

紀伊　堀江朶流子

今しも靈柩は松原を通りてし、軍樂は尙も哀悼の曲を奏づなり、其聲低く、緩く、長く、悲しし、中將邸の畔に至りて靈柩、遲々として進まず、垣根の櫻、ひら／＼と三片、四片、あゝ、花また心なきにあらざるか。

今年の花の散ることよ

○人の世

本郷　山峯庵

曉鐘に咲いて晩鐘に萎む朝顏の花！宇宙の有象無象又皆是

鐘ありて新し

○ゆかしい心

長野　飯塚ぎん子

日頃なつかし友よりの書面、やれ嬉しやと手ばやく封きつて讀む中ぱさつと音して落ちた小さな紙包開きみれば、ゆかしい菫の花瓣、私は思はず花を掌にのせてしばし遠き友を忍ぶのであつた。

此菫、能く語る

○散歩　　愛媛　天野八重子

今柔な風は袖一ぱいになつて花やかな夕雲も次第〳〵に消へうせると月はだん〳〵光りをましてかすかに船唄の聲がする。

水彩畫

○此子の顔　　伯耆　酒林智子

れんげの花束を手にして母の背に眠れる神の子の美しき無心のかんばせにさうと散りくる梨の落花ア丶此美しき神々しき樣よ、ねがわくば一目出征の父に見せたき念ひ、とばかり胸をつきぬ、

○流星　　在釜山　池田敏子

白蓮の香涼しう浴衣袂に薫る夏の夕、堀端に佇んで天を眺めて居たら、淋しう光つて居た一つ星が、意味ありげにパッと光を増して北方の方へ流れて消えた。み空に行つた詩人の靈が人の世を忍ぶのであらう。

○子守唄　　淡路　露子女史

坊やは好い子だ寢れしな――。その聲が如何にも若々しく、優しいので脊窓を開ると、お隣りの絹ちやんが可愛らしい人形を負ふて唄ふて居る立聞ける姿に氣付かずに。――坊やのお守は何處へいた――。

○甲州の君へ　　芝　日木菊子

ふつくりと乳の樣な葡萄の園の御方かと、母なき身には只管になつかしく、滴る緑りに梳り給ひて清き淵に水鏡の未だ見ぬ御姿、此日よりあこがるゝ身と相成候せめて折々に床しき御の薫り示させ給へと切に祈る

○橋の袂　　岩代　小林美武子

私は朝な〳〵町端れの六角橋に行くのが例です。香足が自然に動いて無意識に此處まてくるのです。そしてたぶ〳〵とせゝらぎつゝ流るゝ小川を一心に見つめてはボンヤリ歸つて參ります。

○紅　　駿河　山路まつ世

私は此家へ嫁てから、いつてもかゝさず淡化粧して、紅を濃くして居ましたが、此間山て草刈して居た時、森の陰て、色の黒いのに口紅さして

春の熔山、岩つゝじ、と唄ふのが聞えましたから夫きり止ました。

○春の里川　　鹿兒島　ゆき江子

暖い春の川邊に、餘念なく一人の男兒が遊んでいる、所に優しい菫が水のまに〳〵流れて來た。子供は何を思ふたであらう、いそぎ拾ふて我が笹舟に乘せ、ほゝ笑みながら行方迹に見送つている。

○ボートレース　　東京　すゞ子

過日お隣の太郎樣と芳子樣と私と三人て向島へボートレースを見物に參りましたら。太郎樣は赤びいき。私と芳子樣は背びいき。やがて赤が勝ちました。て太郎樣は突然「大勝利赤萬歳ッ」

○卯の花　　廣島市　鈴村露子

時ならぬ垣根の雪のそれの如く眞白に咲きほこりたる卯の花のやさしく美しさに來る日曜には二三の友を招かんと思ひ居りしにあゝ殘念なるかな最早散り初めたるをいかにせん

○金色の波　　近江　桐山美惠子

歌一首物せばやと橡側に立出れば何に驚きてか緋なる大鯉潑剌と躍上りて忽ち深き岩影に容を陰しぬ。後には巴紋の夕陽に照り榮へて金色の波を漂はし麗しきこと限りなし。

○桔梗　　京都　花蕙子

馬にはませむ料とにや鎌を朝日にきらめかし、露ながら刈りたる草の一束、背にのせて歸りゆく田舍少女、知りてか、知らずしてか草の中に桔梗一本まじれり

○蓮　　京橋　早坂さた子

花籠につまれし蓮のいつしかと投げすてられてひとり嘆くにはなか〳〵に花とうまれてめでられて朝の榮え夕のなげき。

○お聞きなさい　　安藝千鳥

妾は文机にあり、無邪氣なる妹は庭の芝生で菫や蓮花草を摘んで居る、フト大きな聲てお姉ちやまと呼んだあはてゝ窓によれは愛らしい妹は消き聲てお姉ちやまお聞きなさいあの可愛らしいホーホケキョーの聲を!!

○夜　　巢鴨　佐藤露子

晝間の事を皆一時忘れてしまつて天國へ遊ぶ其間の樂しさと云つたらな

い、學校の事も吾家の事も何もかも其日〳〵を又夢てくりかへすのです
もの。

○昔の宿　北海道　眞　富　女

あゝ忘れられぬは君が情
せめての昔を忍ばんと主なき宿に來とへばゆる〳〵靜に岸邊を洗ふ小川の流も君と別れを惜みし楡の木蔭ももとのまゝされど心なき櫻のみは風もなきに散りしきる

○看護婦と大尉　山口　村田節子

綾さん赤十字の看護婦よ私大尉の奥樣て篤志看護婦つてれホーラ繃帶卷一二三樂山の陰ておまゝ事に餘念なきお隣りの綾さんと妹の敏子は手早く人形の繃腕を卷くのであるすると突然弟が姉さん僕何一等軍醫子ー

○朝日京色　宮城縣　齋藤とみゑ

とだかけの聲にて夢さめたり起き出れは空には一點のくもりもなく淸き水て顏洗ひて我が庭の櫻を凝と見つめて居ると春風そよふき美しき香を送つた

○初夏　札幌　杉山清子

初袷の裾からけて、いささ小川を打渉るに脛を洗ふ水も心地よく、やがて向岸に行きしに、穗波うれうれと波る麥畝の傍に啣へ煙管のまま佇みし、老翁の樣いと滿足げに見受けぬ、

○君のねーさん　大和　葛城しづ子

大阪府に遊學して居る弟があります、試驗休暇て歸省の際私がお土產に芥子の饅頭を賴みます、と端書を出しました、するとお友達が其を見て君の姉さん年幾ツだと笑はせたそうです

○小川　福島　水野芳子

一郞さんが前の小川で足を洗て居られますと黃色な蝶が一羽一郞さんの袖にとまつたので、一郞さんは見て居ますと、手にもつた大事の下駄はツヤポンと落ちて下へ〳〵と

○花ちやん　群馬　里の夕暮

今年二つになる花ちやんを、姿は、おぶつて、長閑な田舍道を、ぶらり〳〵歩いて居ると、不圖かたへに、お地藏樣が有つた、花ちやんにも見ゑたか、背中て、人形ばあー、

○可愛い心　山口　下田きよ子

『姉チャン又雨よ』と幼弟が此二三日起ると第一に申すのが今朝は好天氣なので上機嫌、姉チャン嬉な〻〻と朝食もすまない內から早邊には居ませんでした。

○振分髮　京都　野菊

「母ちやん！母ちやんのお好な椿の花持つて來てよ」と母御の新墓前に無心に手向くる振分髮。

○春の日曜　神戸　谷山輝子

今日は樂しき日曜て有ります姿は靜ちやんと近き野に遊びに行きました今すみれをつんで居る靜ちやんの紅のりぼんに蝴蝶とまり空高く樂しそうに舞上りました

○怪しの書簡　美智子女史

去年緒月お母さんと泣いたあの父ちやんよりの手紙あの辭世ハ歌、早や死んだのだらふとあきらめて香花を手向て居た、然るに復此の手紙父ちやんは未だ生きていらしやるだらふか

○若き男　麴町　加藤豐

每夜飯守の社の椽に腰を掛て尺八を吹て居る若い片目の男がある、いつても曲が終ると深い吐息を漏し、細い聲て何かつぶやいては嘆息し、しまいには泣き伏すのが例だ、一體どうゆう人だろう其曲はいつても同じの戀の歌！

○牡丹餅を贈る辭　三河　露子

松井樣今日は良お天氣てすれ今朝姿が不味い牡丹餅を作りましたから一寸差上ます本年齡の膳に上る事が出來ましたら餅もさぞ滿足するでせう實は姿が上る筈でしたが差支まして使をつかはしたのですさよなら

○蛙　伊豆　加藤溜子

鶯の聲懷しかりし梢もいつか青葉のみ茂くなり、白き將黃なる蝶の舞ひて遊びし菜の畑も、打ち返されていよ〳〵春も夕ぐれとなりぬ。折柄山吹咲ける池の汀の田の面に雨をや知らすらめかしましく蛙の聲。



讀友俱樂部

○剽窃詩文の注意（記者）

○「女子文壇」第六號の投稿に對する剽窃の注意は、又多數に參りました、前號の例にならひ、剽窃と確定した詩文の名と其作者を左に發表します

▲文章の部

○消息文中和歌山縣小川政代の寄せたる「一都の友に寫眞の取かへを賴みて」と云ふ一文は樋口一葉女史著「通俗書簡文」（博文館日用百科全書ノ内）九十八頁にある「遠きわかれりの友に寫眞の取替を賴む文」に一二字の相違あるのみ、全文殆んど同じ又右の一葉女史の文は吉田彌平外三氏共編「女子國語讀本」五の卷三十五頁にも載せられたるものなり

○同じく秀逸の部神奈川縣中村清子の作「朝顔に添へて友の許へ」と云ふ一文は三十六年九月十五日發行「女學世界」定期增刊秋の卷にある島根、岸崎以志子の文と七八字違へるのみにて全く剽窃したるもの

○叙事文地賞、大分縣中津京町宮田秋子の作「春の夕暮」は「少年世界」第九卷第一號「少年文」欄に一等賞を得たる群馬縣、舘林佐市の作を巧みに焼直したるものにて此文は猶ほ「少年世界」第十一卷第二號少年文壇乙賞「春の夕暮」靜岡市、坂本俊雄として選抜されあり、宮田秋子は何れより取りしか知らず文字は稍變りたれど全篇の布置結構、右の二文に摸倣せしものと斷定す。

○抒情文の秀逸、泉州美濃子の「おもかげ」は三十四年十二月一日發行「中學世界」定期增刊「英才詞苑」冬の卷（四卷十五號）七十九頁にある紀州田邊、原稻葵と云ふ人の「面影」を剽窃したるに疑ひなし、但し文字は多少增減したり。

▲小說の部

○短篇小說、地賞泉州横山の里、天畑美濃子の「懺悔」は去る三十六年九月廿日發行「中學世界」秋季增刊「白雲紅葉」八十五頁、小說に賞を得たる竹内二郎作の「愛の光」を聊か短縮したるのにて全く剽窃なり。

▲新體詩の部

○伊豫、こずゑの薹は三十七年三月十五日發行「女學世界」春期增刊「女學校生活」たなか女史の作と同一、少し短くせしのみ。

▲はがき文の部

○天賞入選、大久保しげ子の作「好きな物」と云ふ一文は跡見女學校機關雜誌「汲泉」中にありし同校學生石原鶴子女史の作と同一、入選無効とす。

○人賞入選今井八百子の「猫のはなし」と云ふは何處かで見たるが剽窃にあらずやと注意し來れる人あり、只其原作の出所明かならざる故強ちて剽窃と斷定するを得ず、作者自ら早く懺悔して自白すれば記者は今後投寄の原稿を採用すべし、判明せざる時は他の原稿も沒收す又剽窃にあらざる事分明すれば作者の爲之れ程喜ばしき事なし。

▲和歌の部

○秀逸中村しのゝめの作歌、下句は「女子文壇」第一號大塚楠緒子女史の湯の宿の初めにある歌の下句と似たらざるやと注意し來れり或は暗合ならむ。

○五十九頁下の段、千葉縣榎木しづ子の「春うら……」と云ふ歌は「讀賣新聞」募集の和歌より剽窃せしものなり

以上は皆第六號剽窃詩文でありますが第五號の剽窃は前號の當欄で發表して置きました處、編輯〆切後、また／＼左の注意がありました、

▲文章の部

○叙事文秀逸、京都桂蘆風女史の「郊外の曉」は「松川の朝」と題する或る人の作を剽窃せしものなり。

○同じく四十一頁福岡町島幸子の「生別死別に勝る」は「中學文壇」第六十一號軍國文壇中清水儉恕の作と同一。

▲新體詩の部

○天賞入選、森山ます子の「春の夜」は「中學世界」增刊綠葱紅情新體詩欄森山益二の「春の夜（一等賞）」と一字一句の相違なし、思ふに此れは益二とます子は同人ならずや、但し當選無効なり。

○秀逸中、備後福田仙翠女の「虹」は大久保季允と云ふ人の作なり

▲はがき文の部

○秀逸中、鳥幸子の「此次に」と題するものは保坂還泉と云ふ人の作なり、剽窃。

○同じく德島、住友發喜子の「出征の夫に」と題するものは「中學世界」定期增刊花香各籟抒情文に第四賞を得たる信州田村賀惠次の「一瀛笛の音」の中間三行目以下を窃取せしものなり。

右に依り大分縣宮田秋子、泉州天畑美濃子、大久保村しげ子、上毛今井八百子、越中森山ます子の五人には無論賞品を送りません、又秀逸以下にも新しく汚名を負はれた諸孃は大いに反省せられむことを望みます。

三河の都築靜子女史も剽窃家の一人として誅せられたが今回長文の懺悔文を寄せられた、謬つて改むるに憚ること勿れて記者は女史の本心が未だ腐敗し盡くさなかつたのを欣びます、都築女史は再び白日の下を濶歩し得られるのです

第六號、第五號に對する剽窃詩文の注意を與へられた諸孃（最も此件に限り男子の注意文を受領す）は多數で主なるものは左の通り、此外無名逸名の方も數十氏ありました、諸孃が文學に忠實なる能く黑白を判定し、記者をして其罪を破せしむるの勞は、深く鳴謝するのであります

○廣島、美代子○跡見女學校生徒數名より○

神奈川、國語讀本五を學べる女學生○大阪、平田撫子○水戸、叶月女史○淺草、後藤○神戸、宮本瀧子○廣島、洋の字○三河、しづ江○弘前市、松竹梅子○大和、花井秋子○仙台市、すみれ○常陸、綾子○滋賀、辰井紫苑○上總、山守○神戸、なにがし○横濱、愛繇女○上毛、一探女史○越後、尾島淸子○山田錦子○樋口一子○樋口好子○長崎、愛讀女○武藏、みゑ子○京都、一女生○鹿兒島、ひばり○本郷、須磨溪○千葉、白蝶女○薩前、大槻入洲子○佐世保、横山浪愛

◎諸孃と記者

○諸先生樣方お揃ひます／＼御健在御喜び申し上げ候さて私は文壇愛讀者の一人に候いつぞや文壇第二號に於て意外にも和歌の天賞に當り私の喜びのみか家內中の大喜び血氣にはやる弟などは强ひて私に寫眞までも送らしめ仕末今更恥づかしく候さるに今日まで未だに何等の御沙汰もこれなく候ところいかゞの御都合に候や賞品など相受けたき心はさら／＼これなく候へども若しも世に憎むべき彼の剽竊家と同一視せられ候はずやと甚だ懸念いたし居り候まゝ女のつゝしみも忘れて右伺ひ申候（失名）（記者曰、お寫眞は大切に預つてあります外の方から來ませんから其內に合せて出す事に致します、勿論潔白な當選者を天下に紹介したいのは本誌の素志です）○私も三號から愛讀者のお仲間入致しましたが、直接御社へ注文しないでもよりの賣捌店からもとめて愛讀して居るのでは、投書しても沒書になるのでございますか、何卒誌上でお答を。（神奈川芳子）（記者曰、何處でお買ひ下すつても愛讀者ですもの、決して沒書はいたしません）○懸賞募集項目にはハガキ文は端書云々とあり俳句にははがき判紙とありますが俳句を投書するには端書だけの大きさの白紙でも差支へはありますまいね私は左樣思ひまして半紙て端書だけの輪郭にして出しましたがそれでは不可ませんか一寸御教示下さい（撫子女史）（記者曰、それでもよろしい）○記者さん少女界の樣に記者さんや主筆のお方の寫眞を文壇に載せて下さるわけにはなりませんか私は遠方ですからわざ／＼東京まで參る事ができませんから田舍に居ても御目に掛かれます樣是非に願ひます（撫子）（記者曰、何うも皆さんから記者の寫眞を出せと仰つて、記者は難有い譯ですが、本社の寫眞部はなか／＼多忙て、容易に記者の顏など撮つてくれません、今に談判してみます）○記者樣に伺ひますが妾は妹の白蓮と二人で女子文壇を購讀して居りますが投書しますには別々に購讀せねばなりませぬか其して投稿詩文は同封でも差支へありませんですか一寸本欄でお指敎を願ひます（三河霞溪女史）（記者曰、凡て仰せの通りでよろしい）○私は誠に不幸なものて兩親に早く別れ唯今は七十有餘の祖母と二人暮らしておりますが前は都の女學校に物學びしておりましたが半途で祖母の爲に歸國いたしまして私は最早修業に出る事は出來んのです然して私は國語國文を修め小說家となり以て一身を立てたいと思ふのですが此田舍に居りながら如何なる方法を取ればよろしいでしよう記者樣をわづらはし紙上で御答を願ひたう存じます（江州彥根、小蝶子）（記者曰、お氣の毒な身の上ですが、小說家などにおなりなさらず、外に職をお求めなさい、小說家などは、ならうとしてなれるものではありません、非常の天才なら別ですが）○唐突ながら記者樣へ申上ます、妾は某女學校の四年生で女子文壇の愛讀者の一人てすが日頃より投稿いたし文才を磨き度切望致居ましたが幼稚なる妾等の如き投稿いたし反て皆樣にお手數を懸けては濟みません故控へ居りましたが本月の投稿せよの聲を見まして及ばずながら勇を皷して投稿いたします、以後續々御願ひ申上ます、（麴町區飯田町池田方羽二生淸子）（記者曰、社說を書いた記者もこれてこそ滿足いたします）○記者樣私は都から遠くございまして何もかも新しいものを見きゝいたしますのはおくれがちで御座いますがこの文壇は發行の日につきますので都の御方々と同じ日によまれますから何よりうれしうございます外形の美にとゞめる又內容の眞に價値のあることはこれ以上のものはないと存じます私どもの樣な世の諸方面觀察に心をやらないものには淸らかな精神やさしい思想なれることが出來ますからいつも／＼之を友として居るのでございます、（さゆり女）（記者曰、誌友にも斯云ふ心がけの美しいお孃さんを得ましたのは蓋し女子文壇の光榮です）○記者先生を始め愛讀諸姉樣方に御頼み旁御尋ね申ます何卒皆さま御手數ながら本欄で御知らせ下さいませ、私共は小學校を卒へ裁縫專門學校に入學して今春卒業致したばかりですが東京、京都邊で華族樣か大家かで御使ひ下さる御家は御座いますまいか素より少々の勞働は厭ひませんし裁縫も和服だけは出來ます手藝も普通は習つて居ます此の上は家庭見習と云ふ目的で奉公致すのですが家事萬端を御敎示下さる御家はありませんか其の代りお金は出し得ませんよ學科や音樂（琴其他）等夜間御敎へ下さるなら如何なる事も厭ひませんが私共も家財に不自由はありませんが上流社會の家庭に接したいのみで奉公致すのですから眞より敎へ御使ひ下さるならば如何なる事も厭ひません慾よりの下女ではありませんで小間使として何事も御敎示を望むのです年齡は十六七歲です（廣島の二女）（記者曰、御熱心はお察し申します、併し上流社會に接すると云ふ事が必ずしも貴孃の爲になるとは申せません、記者は寧ろ小間使になられるより、財產に御不自由がなければ外に修養の途はあらうと思ひます）○記者樣私共おねがひがあるのよ、それは記者樣方の御寫眞を口繪に出して貰ひたいのよ、私記者樣にお目にかゝりたいことよ、外の誌友俱樂部には締切がないのですか、いづれも御返りを。（北海道龜田郡七飯村松井長子）（記者曰、いやもう餘りお目にかゝり榮えの無い顏が揃うて居りますから。次に誌友俱樂部のメ切は前月十日頃です）○記者先生に伺ひますが端書文は如何にするのですか、端書文二十四字詰に書くのですか妾の如き不器量の者には筆で二十四字書けません、ペンで書いてさへ宜く行きません、やはり半紙に願ひますが如何でしようか（花月女史）（記者曰、半紙でもよろしい、半紙半枚に一文を書くのです、强て半紙をハガキの形にしたのは却つていけません）○短歌は半紙二ツ切に一首認めた物なれば何首投じても、よ

ろしいのですか（保香）（記者曰、各欄とも一人佳作一章宛と投稿規則にあります、未だ御覽にならなかつたのですか）

○記者樣に伺ひます第壹卷第三號の短歌で地賞を取つた埼玉の山下芳葉さんと云ふ方は男子のかたゞそうですが男子の方が投書してはいけないのでせう（有樂町の一婦人）（記者曰、男子はいけないのです）

○記者樣に伺ひ升詩文の用紙は半紙とあり升が改良半紙でも宜しう御座いますか其から私は習字も募集していたゞきたいとかれてから望んで居りますが如何で御座いましよう或は和歌の秀逸以上のお方の御筆蹟をおかゝげ下さいまし（東京愛讀少女）（記者曰、改良半紙でも罫紙でもよろし、習字も考へて置きます）

○私は今度初めて投書致しましたが投稿規定をよく見ましたけれども不わかりの處澤山あります短歌と俳句ははがきに上げるのではありませんか半紙二ツ切りにして消息文か抒情文の中に入れてやつてもよいのですか（東京早坂さた子）（記者曰、短歌は半紙に俳句はハカキです外の文と同封で差支えなし）

○記者先生私等は五號よりの愛讀で姉妹ですが此後どし／＼投書致しますからよろしく御愛顧のほど願ひます（備後比婆郡帝釋村市岡ます子全まさ子）（記者曰、何うか折角御勉強なさい）

○記者さんにお願ひ申ます本文壇にて受賞せし御姉樣方を拜し度あります御寫眞を本誌て披露して下さい（群馬縣山田郡樋口とき子）（記者曰、何れまとめて置きまして紙上へ出します）

○記者先生に一寸御尋ね致します、一人にて一ッの封筒の中へ同種類のものを幾つも入れて投稿することはできませんか、若し右樣にすれば沒書しますか、はがき文、俳句は必端書でなければならないのですか、他の紙へ書いて投書すれば沒書致すのですか、俳句は四季亂題いつのでもよいのですか、讀友倶樂部への投書規則はございますか、私は一向存じませんから教へて下さい（上毛新田の里、賤が家）（記者曰、同封でよろし、ハガキ文、俳句は半紙でもよろし、俳句は成るべく其季節の題がよろし、讀友倶樂部も半紙でよろし、たとへは此半紙のやうに）

○記者先生十五日後の投稿は翌月の部へ入れて下さいますか、又沒書ですか。敎へて下さい（勿論翌月へ廻します、左樣に故なく沒書はいたしません）

○あゝ敬愛なる記者樣よ妾は田舍の淺學の一少女ですが第一號より理想の文壇を二つとない友と愛して居りますもの、何卒あはれ者と思召下さいな記者樣が誠に愛讀者に對すに御親切なのでかげながら感涙に堪へませんでした、それで此度かく思ひましたの、あゝ妾のやうな拙きものでも度々投稿して御添作を願ひしならば少しはよいかとはつかしながら御らんに入れるのです（白菊外二名）（記者曰、そんなに仰つれる程記者は甚くして居りませんけれど、知己の言として厚く受けます、勿論此上一層皆さんにお爲になるやうな方針を取らうと思つて居ります）

○記者樣よ私この女子文壇の益々盛になるのを誠にうれしう存じます私毎月配達せらるゝのがまち遠しくてなりませんわ記者樣よ隨分御身體を御大切にし女子文壇の爲め且私共のため御盡力下さいどうぞ／＼（上毛德子）（記者曰、盛んになるのも皆樣のおかげです、皆樣の御健康を祈ります、讀者萬歲、投稿家萬歲）

○雜誌について望ましき事は最少し名家文壇の欄を擴張して諸名家の名文を掲載して下さい。紙數が不足なら。讀者文壇の賞外の者を減じてやつたらよいかと思ひます、それから時々臨時增刊を出してほしいものですが如何でせう（陸前八淵子）（記者曰、御忠告ありがたう、追々左樣な事にいたしませう）

○記者樣に申し上げます何れ繪には色どりをしてもよろしゆうございますか（大島白石女子）（記者曰、いけません）

○記者先生に一寸御伺ひ申ますアノ投稿は一人で一度に幾つも投書致してはいけないのですか私これまで投書した事御座いませむのでさつぱり樣子がわかりませんのでどうぞ誌上でも御教示を願ひ申ます（刀根の川邊小夜子）（記者曰、幾種も同封で差支なし）

○記者樣女子文壇の發行によりまして片山里の私等まで家事手傳のかたはら多くの新智識を得る事を有がたく感謝いたします（耶馬溪渡舟）

○記者さん、今度投稿用紙は半紙だけになりましたネ、此紙ではいけませんか（松子）（記者曰、この紙でもよろしい）

○記者樣並に諸孃樣妾も本誌五號から愛讀者の一人と成りましたから以後は何卒宜しくお願ひ申ます、それから記者樣お伺がひですから記事なども澤山出して頂戴な、左樣なら（北海道龜田郡七飯村松井長子）（記者曰、承知しました）

○諸孃の交際

○女子文壇愛讀諸姉にて妾を送りし方の御姓名を申し上げます永戸初子孃馬場歲雄氏、池川糸子孃田中文子孃今田芳子孃今出時子孃、住吉花子孃神山その子孃石塚より子孃、宮本ふさ子孃、河上きよ子孃砂本しげ子孃、小原雪江孃、寺内あまつき孃平川蝴蝶子孃、小松枝子孃長尾いそ子孃葉川安子孃、麻元二葉子孃高橋りは子孃、谷田靜江子孃柳原良子孃青山文子孃工藤松子孃、伊木鈴子孃

右之諸姉方に差し上げました就ては失禮ですが主なる記者樣は何人ですか是非知らして頂戴（北海道膽振早來市街地本郷なほえ子）

○先般中より遠地旅行中につき當分繪葉書交換を殘念乍ら御斷り申して置きましたのに前號に此揭載なかりし爲め澤山の諸姉から御寄贈の榮を蒙りましたそうで願元からの報知でした、又諸姉に一冊妾の如きものにまで御交換を望れ深く感謝致しますが只今前の通りで御返事も出來ません何れ又神戸の方へ歸りましたならば御禮致します（山陰の一偶にて青山文子）

○小說（地獄の花）は十四ヶ所から申込がありましたが一番早く郵便のつきました水戸市の山田千代子さんに差上げました思ふに私が女子文壇てふ雜誌を愛讀しなかつたらば山田さんの樣なやさしいお友達が出來なかつたと思ひまして深く喜びました因に申しますが十四ヶ所からの申込は皆愛讀者で投書家ではありませんでした（撫子）

○淺野しげる樣小說地獄の花を御送り下すつてどうもありがとう御座いました淺寳にも御禮申上ますよ私もほんの心ばかり水戸勝景の繪端書を御贈りいたしました猶これからこれを御緣に御交際いたしませうれ（常州叫月女史）

○皆さん妾は去る四月に小吉高等小學校を卒業した計りの淺學なる少女であります、此上猶一二の學校に入りて修學した

いのが家庭は之を許しませんのです、故に妾は貰き姉様方に教を受けたいと思ひます何分愚妹と思召し此後愛して下さい（越後小柳滿玖）○皆さん私は遠方々と交際致したくありますから同意の方は下所迄に御知らせ下さい願ひます（佐賀縣佐賀市上芦町二十三宮田君子）○兵庫の黑田様臺北の藤井様先日は御交際のおはがきを下りましてまことに有難う存じます何分行末ながらか愛かつて下いましよ（兵庫山陽社宅柳田のぶ子）○記者様始皆々様妾も今度女子文壇の愛讀者になりましたどうぞ御交際を御願ひ申します此誌は非常に面白く且妾の理想に適して居て誠に嬉しいのですから益々盛んに發行せられん事を望み升（長野縣下高井郡中村川邊千枝子）○千葉の松闌様神戸の勇子様初め闌子様すみれ様よりこのふつゝかなる菊に對して御親切なる御手紙を下さいまして誠に有難う御座います一々御返事差上る筈で御座いますが御所書のはつきりいたしませんのでこの誌とで御禮申上ます何卒神聖なる御交際を願ひます（神戸中村きく子）○大阪の青木とし子様御親切な御音葉を給はりましてまことにありがたうあの妾男子とのうたがひを受けましたけれど妾眞實に女子なんですから何卒れ御うたがひお晴らし遊ばして末ながく御交際を願ひます一寸本紙上て御禮まで（兵庫山陽社宅柳田暢子）○記者様初め愛讀家諸孃私は此文壇の生れた時から愛讀者の一人です度々投書致しますから末長く御交際下さい（岩代松祭女）○記者様に御願申ます私共二號から愛讀者になりましたから宜しく御傳致下さいませ又皆様へ不束者ですが御交際下さいませ（靜岡市西草深町松村方中田ふん大橋ます）○あゝ妾はほんの田舎者でおまけに無文な者でありますが少し位は和歌や俳諧など心得て居りますのですよかられ！以後親誠な御方と交際をれがいたいのです勿論繪葉書の交換もお願ひ申しますのよ（大阪府下豐能郡池田西之口町魚市方中西久子）○皆さん私は今月より此の雜誌を見て居ます御交際を願ます繪はがきの御交際も（赤坂音山南五ノ七拾四村山内村上幾子）

編輯だより

○特別懸賞贈與。　本號廿四頁目に豫告の如く、本誌は此度讀者の愛顧に酬ふる爲め特別懸賞法を設け正金を秀逸の作家に與ふる事としました。如何に本誌が種々の方法に於て、讀者の爲に計らんとしつゝあるかは是を以て御了察を願いたい。

○次號の記事。　紙面の都合で次號へ廻したものは中内文學士の「伊勢物語」評釋と、又「女流小影」は擔任記者病氣の爲め次號へ廻しました。

○佐々木信綱先生。　先生は必ず次號の本誌の爲に「ゆきかひぶり」と云ふ一文を寄せられる事は確定いたしました。

○斬新の口繪。　前號と本號の寫眞版口繪には他に先んじて各女學校卒業式を紹介しましたが次號には評判の三宅克巳氏水彩畫（夏の海邊）十色刷、河合英忠氏極彩色畫（美人納涼）七色刷の二枚の外又々斬新なる寫眞版を選み、時に西洋最近の流行、名畫、風景等を紹介しやうとおもひます。

○誌友俱樂部。　の原稿は毎號逐次増加して參りますが之れ本誌が益す多方面に發展して行く證據だと記者は潜かに欣んで居りますが、いつも言ひます通り、字體は成るべく明かに、文章は成るべく短く、必ず毛筆で認めて下さい。

新刊紹介

▲東京遊學案內（少年園編纂）　少年園の遊學案內と云へば多年學生の間に信用せられ、既に今回にて第二十版を重れ、凡ての用意に増訂を加へたり、都下有名の女學校も多く更に加へられたるものあり（定價五十錢本郷西片町十內外出版協會發兌）

▲スケッチ繪はかき（第一輯）　ムートン寫生三宅克巳筆の朝、岡田三郎助筆の內、中澤弘光筆の裁縫の處女、以上三枚を色刷にして美くしき紙に包みたり（十三錢本郷區元町一ノ十六スケッチ會）

▲泰西女訓（木田増次郎編）　泰西女訓とはむつかしき書題なれど本文は存外に優しく且趣味多くして爲になる事多し、東洋的敎訓にのみ熟れたる日本の女子は此の如き書に就いて西洋の敎訓を受くるは目下の急務なり（定價四十錢本郷西片町十、內外出版協會）

▲女子の見たる女子の本性（鈴木秋子著）　男子の見たる女性と、女子より見たる女性とは自ら差異あるべし、本書はさむしろ女史として知られたる鈴木秋子の作にて女性より見たる女性觀なれば、論旨にも自然同情ありて男女共に一讀の價値あり（定價三十錢下谷中根岸小林嵩山房）

每號懸賞募集課目

選評大家（文學士醫井日本女子大學教授、巖谷小波君、佐々木信綱君
文學士尾上女子高等師範校教授、廣津柳浪君、山中古洞君）

特別獎勵賞與法は第九號より實行す

○論文　○抒情文　○敘事文（各半紙廿四字詰三十行以內）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以內）　○はがき文（端書かな付廿四字四行）

○短編小說（半紙總かな付廿四字六十行內）　○新躰詩（半紙一枚十句以內）

○短歌（半紙二ッ切一枚一首）　○圖畫（二寸の三寸判風俗景色）

○新體俳句（はがき判紙一枚一句）

▲各欄とも一人佳作一篇宛投稿の事　但着色無用可成陽皮紙を用ゆ

▲此外家庭教育に對する事項並に讀者の通信等何でも寄稿あれ

賞品規定

○論文○抒情文○敍事文○消息文○小說○圖畫、當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲特別賞▼（正金を呈す）

▲天賞　金壹圓五拾錢　一等金三圓、▲地賞　金壹圓　二等金貳圓、▲人賞　金五拾錢　三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○短歌○俳句、當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分▲地賞同二ヶ月分▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）　一等金壹圓、金二等七拾錢、三等金五拾錢

每回の本誌により當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

（投稿〆切＝每月十五日）

▲嚴守すべき投稿規定必ず一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○投書丈け取纏め郵送するときは開封にして發出せば卅匁迄二錢にて事足れり

定價

女子文壇（每號水彩畫彩色畫寫眞口繪數葉挿入）每月一日發行

一冊（大百二十頁以上）	六冊（半ヶ年分）	十二冊（一ヶ年分）
前金拾錢	前金五拾七錢	前金壹圓八錢
定價郵税共一冊金拾壹錢	定價郵税共六冊金六拾三錢	定價郵税共十二冊金壹圓廿錢

外國行郵税共拾四錢

注文心得

○本誌は前金の外送本不致候○代金逕不足のなき樣注意被下度候○領收書は一切差出さず候○御注文每に何號より何册及御住所氏名等は明瞭に御認め可被下候○郵券代用は必す定價の壹割增に願上候○御問合は返信料添ひ願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本可仕候

廣告

（六號ヨリ改正）

種別	一頁（二十四字詰六十行）	半頁（二十四字詰三十行）	一行（五號活字二十四字詰）
普通	金拾五圓	金八圓	金參拾錢
特別（表紙裏面口繪裏面）	金貳拾圓	[illegible]	○

〆切　發行前十五日

▲廣告特約取扱

京橋區南佐柄木町二番地　日本廣告株式會社
神田區千代田町二番地　博報堂
神田區花房町九番地　富士原秀穩

明治三十八年六月廿八日印刷
明治三十八年七月一日發行

不許轉載

[illegible]

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者　野口竹次郎
東京市京橋區大鋸町十一番地
印刷者　石川金太郎
東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

東京市京橋區大鋸町十一番地
發行所　女子文壇社
電話本局六〇七番

特約發賣所

東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿六　東海堂
東京市京橋區鎗屋町十三番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　良明堂

(slap, slap, slap).

"Isn't that enough, Little Maud?"

"Oh, no, not nearly enough! Why (slap, slap, slap), I've got to whip you until you don't mind it at all" (slap, slap, slap).

The whipping went merrily on until it was agreed that she was used to it. Then we waited many days for Katy to be naughty. Yes, the day came and she was whipped by her mother. Maud and I sat holding our breath, watching for Katy's release. She came to us sighing and sobbing:—

"It hurt all the same, Maud."

Except ye become as
little children ye
can not enter the
kingdom of God.

りますよ,「ピシヤ,々々々)」

「モウ,好い加減に充分でないの,モード?」

「イヽエ,イヽエ,未だ々々中々!(ピシヤ,々々々)あなたが,痛と思はぬ樣に成るまでしなければ駄目です,(ピシヤ,々々々)」

斯く従妹が,充分打たれる事に慣れて,其れを何とも思はぬ樣に成つたと三人が同意しましたまで鞭打は元氣好く續けられました.其れからケーテが又悪作をして叱られる日を待つて居りました處愈々其日が參り,彼はメリー叔母さんに鞭うたれました。モードと私は固唾を飲んで結果如何とケーテの赦されて出てくるのを待つて居りますと彼は歎息し且咽び泣きしつゝ出てきて云ひますには,

「モード,矢張り痛たかつてよ.」



Mary. We were very fond of Katy; but we were somewhat afraid of aunt Mary, and we thought her very hard on Katy, who was whipped whenever the cousin was naughty. My little sister, Maud, whose imagination was ever on the alert, proposed one day that she should whip Katy, beginning gently and increasing the weight of the blows, until she should be used to it and not mind any more. Katy agreed, and we went to work. She was laid across my knees, and Maud, armed with a slipper began to slap her, (slap, slap, slap).

"Do I hurt you, Katy?"

"No, not much."

"Well, I'll go a little harder then" (slap, slap, slap).

"Oh, that hurts! don't go so hard."

"Well, but you know (slap, slap, slap), if I don't go hard you won't get used to it (slap, slap, slap); and if you once get really used to it (slap, slap, slap), then it won't matter if aunt Mary whips you every day,

た．私共小供はケーテを好きでしたが叔母さんを少し恐怖がつて居りまして，叔母さんが従妹にきつくあたり過ぎると思つて居りました。ケーテは，何時もきかんぼう致しますと必らず鞭で打たれました。私の妹のモードは，新奇な考への浮ぶ子供でしたから，或面白い事を云ひ出しました。其れはケーテを最初は輕く段々と強く打て終には打はれる事に慣れる様にしようとの意見でした。

従妹のケーテは承知しましたから私共は直ちにそれに着手しました。先づケーテを私の膝に俯伏させて妹は上靴を以て身仕度をしケーテを叩きはじめました。（ピシヤ，々々々）

「痛くつて？ ケーテ.」

「イヽエ，甚どく痛くないの.」

「それなら最とひどく叩きますよ（ピシヤ，々々々.）」

「ヲー痛い！ そんなに強く打たかないで頂戴.」

「それだつてね，私が甚どくしないと，あなたの爲になりません（ピシヤ，々々々）若あなたが一度慣てしまうと（ピシヤ，々々々）叔母さんが今度毎日あなたを叩いても痛くも何ともなく成

As silently, as tenderly,
The down of peace descends on me.
O, this is peace! I have no need
Of friend to talk, of book to read;
The holy silence is His Voice;
I lie and listen, and rejoice.

Trowbridge

斯くも静けく　おだやかに
平和ぞ我身に　降り下る。

我は欲ぞまじ　この外に
談らふ友も　讀む文も。

この聖寂は　神の聲
伏しつゝ聽きて　樂しまん。

Friend.

A friend is a refuge. We all have troubles at some time. For many years we may get along quietly, and without sore trial; but the day will come to all of us when we shall be in sorrow or danger. It may be sickness that comes upon us, or bereavement, or loss of some kind. It may be the misunderstanding of others who become our enemies without cause. Whatever the trouble may be, a true friend will prove a great comfort to us.

朋友

朋友は隱家なり. 我等の一生中には艱難の來るや必せり. 幸にして多年を無事平和に送るとも一度は悲哀, 困苦の日に相會するを常とす. 或は疾病, 或は死別, 失敗, 又は世人より誤解を受けて計らざるの敵を蒙むりし時, 其の不幸の如何を問はずして我等に大なる安慰たる者は朋友なり。



Whipping.

We had a little cousin who sometimes visited us with her mother,—little Katy and aunt

鞭打

私共の従妹のケーテは分自の母, 即ちメクー叔母さんと時々家へ泊りがてら遊びにきまし

英文

津田梅子閲　　河井道子述

Summer.

Around this lovely valley rise,
  The purple hills of Paradaise.
O, softly on yon banks of haze,
  Her rosy face the Summer lays!

The butterfly and humblebee
  Come to the pleasant woods with me.
Sweet woodland music sinks and swells,
  The brooklet rings its tinkling bells,
The swarming insects drone and hum,
  The partridge beats its throbbing drum,
The squirrel leaps among the boughs,
  And chatters in his leafy house.

夏

此の妙美なる　溪を繞き
樂園の山は　聳ゆなり。
霞の岸に　あな靜けく
夏の顏　顯れり。

蝴蝶と蜂は　綠蔭に
我と共にぞ　來るなれ。
森の調は　樣々に
小川の鈴は　いと涼し
群がる蟲は　歌舞しつゝ
鷓鴣は勇みて　太鼓打ち
栗鼠は綠枝を　飛びづたひ
青葉の巣にて　談るなり。

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

最廉無比　定價金拾錢　郵税壹錢

（東京秀英舍印行）